

保育士のメンタルヘルス

-陽性・陰性感情に基づく実証的研究-

11020303

吉兼 伸子

-目次-

はじめに	1
第1章 保育士のメンタルヘルスの現状と課題	2
第1節 保育の現状と課題	2
第1項 子ども、親を取りまく社会環境の変化	
第2項 保育士を取り巻く法令の変化	
第2節 保育士のメンタルヘルスに関する先行研究の検討	11
第1項 保育士のメンタルヘルスに関する先行研究の概観	
第2項 保育士のメンタルヘルスの関連要因の検討	
第3項 研究目的と検証プロセス	
第2章 保育士のメンタルヘルスの質的検討	22
第1節 保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と 保育士のやりがいの実態調査	22
第1項 調査方法の実際	
第2項 保育困難状況・保育困難状況の対応についての結果	
第3項 保育困難な状況においても対応できる・やりがいの結果	
第4項 保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの考察	
第2節 保育士の感じる保育困難状況の要因の妥当性の検証	36
第3章 保育士のメンタルヘルスと要因に関する量的分析	49
第1節 保育士の陰性感情と要因の検討	49
第2節 保育士の陽性感情と要因の検討	59
第3節 保育士の陽性・陰性感情と要因の検討	62
第4章 保育士のメンタルヘルスの要因の総合考察	68
第1節 保育士のメンタルヘルスの各要因の総合考察	68
第1項 メンタルヘルスと社会・家庭・職場要因の関連性の検討	
第2項 保育士の心の疲労と心の健康	
第5章 結語	81
おわりに	83
文献リスト	86

資料

説明文

同意書

質問紙

はじめに

近年、少子高齢化や男女共同参画社会の到来、核家族化、地域の子育て力の低下など急激な社会状況の変化の中で、保育所を取り巻く環境が大きく変化している。保育士の業務内容や保育の方向性を示す「保育指針」も改訂の度に保育業務の拡大がされている。すなわち、第一次改訂では、保育ニーズにあわせ、乳児保育の普及と障害児保育が追記された。第二次改訂（1999年）では、保育所を家庭保育の補完から地域子育ての支援の役割が拡大された。第三次改訂では、親や地域の子育て支援機能の低下に呼応し、保育士に対して、保護者の育児ストレスや育児不安、家庭環境の調整機能も求めている。第四次改訂の中間取りまとめ（2016年）では、感染予防及びアレルギー対応まで保育所の責務としてあげている。

このように、保育士に求められる役割の増大に対して、保育士のメンタルヘルスは良好ではないといわれる。保育士のメンタルヘルスは保育士の問題だけにとどまらない。保育士が関わる対象は人間形成の土台となる乳児期の子どもであり、保育士は乳幼児期の子どもにとって大切な環境の一部である。保育士のメンタルヘルスが不良になると、保育への意欲を失い、子どもへの思いやりをなくし、適切な保育活動が出来なくなると推察される。引いては、対象となる乳幼児の人格形成にも悪影響を及ぼしかねない。そのため、直接的に子どもと関わり、親と共に育児に関わる保育士の精神的な健康は必須と考える。

保育者のメンタルヘルスを検討する上で、今現在保育士が仕事においてどのようなことに困難感を感じ、またどのようなことがやりがいとなりモチベーションを高めているかを知る必要がある。このような質的な聞き取り調査は、保育指針の第三次改定以降はみあたらない。

また、メンタルヘルスに対してWHOは、(1) 陰性感情、(2) 陽性感情、(3) 満足感の3要素から構成されており、うつや不安などの陰性感情 (negative effect) と満足感を含む陽性感情 (positive effect) の両方向からメンタルヘルスを検討する必要性を示している (SUBI, 2010)。しかし、保育士のメンタルヘルス研究は陰性感情とストレス要因の関連性が主流で、両感情からの検討は少なく偏りが見られる。以上より、本研究は保育士の仕事の困難感とやりがいを質的に調査し、保育士のメンタルヘルスの両感情からストレス要因との関連性を検討する。

また、保育士のメンタルヘルスを良好に保つ事は、子どもの健全な心身の発達を援助し保育の質を確保する点、保育環境が整うことで女性の働き方に多様性を与え、働く女性のサポートになる点で社会的意義が大きい。

第1章 保育士のメンタルヘルスの現状と課題

保育士のメンタルヘルスを考える時、保育の現状と課題を検討する必要がある。本章では、保育士のメンタルヘルスの現状と課題について、①社会環境と保育施策、②保育士のメンタルヘルスの先行研究から検討する。

第1節 保育の現状と課題

保育の現状と課題については、まず子どもと親を取り巻く環境を検討し、その後に保育士への影響を考える必要がある。そこで、第1節では子どもと親を取り巻く社会環境を検討する。

第1項 子ども、親を取り巻く社会環境の変化

第1項では子どもと親を取り巻く環境の変化について、第2項で少子化を中心とした影響を検討する。子どもと親を取り巻く環境の変化について、(1) 少子化と子育て環境、(2) 子育ての希望と現実の差違、(3) 女性の社会進出と子育て、(4) 待機児童問題について概観する。その後に、それらの環境がどのように保育に影響するか考察する。

(1) 少子化と子育て環境の変化

少子化について、少子化の現状と子育てに関する変化について考えてみたい。

少子化の指標として「合計特殊出生率」が一般的に上げられる。これは、15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する。この数値は、2.1を下回ると人口の減少を意味する。日本は平成17年に1.26まで減少したが、その後微増し平成25年確定値では1.43まで回復しつつある。しかし、合計特殊出生率は出産可能な女性人口に左右されるため、平成25年は前年に比し0.1ポイント上昇しているにもかかわらず、出生数で見ると7,415人減少している（厚労省, 2015）。合計特殊出生率は上昇していても、実際の出生数は減少しており、出生数の低下は少子化の現状を物語っている。

このように少子化が進むと社会はどのような不利益を生じるのであろうか。少子化により兄弟数や遊び相手が減少することで、同世代や上下世代との軋轢が減り、けんかや仲裁などの経験が少なくなり、自分の希望や想いがそのまま実現する。子どもはけんかから相手の主張と自分の主張の妥協点をみつけ、調整や交渉を学ぶ。つまり、子どもの数が減り、関わりが希薄になることで調整や交渉・妥協を学ぶ機会が減少する（鯨岡, 2002）。また、少子化が問題になる前の時代で

は、人間関係の要となる自己主張や協力することの必要性、弱者へのいたわりを遊びの中で自然と体得していた。それがかなわず、自己主張や仲間の協力、弱者へのいたわりは社会的な教育内容と移行する（民秋, 2014）。

加えて、少子化の中で子育てをする環境上の問題を、家庭の養育力の低下と地域の養育力の低下から検討する。家庭の養育力の低下は、核家族化と家庭内家事協力の少なさが指摘されている。核家族化は、世代間の生活文化の継承及び豊かな知恵を基盤とした育児文化の継承がされないことが問題とされる。また、家庭内の家事協力においても、6歳未満の子どもをもつ夫の家事関連時間1日あたりの国際比較をみると、日本が1.07時間に対して、スウェーデン3.21時間、アメリカ3.13時間と格段に少ないことが指摘されている（村田, 2015）。

一方、地域の養育力低下として、以前は近所づきあいの延長として、地域の子どもの見守りや躰教育がなされたことが、都市化が進むことで地域に助け合いの減少がおきており、地域の子育て力の低下が伺える。

以上より、少子化が進むことで、かつては家庭教育内容であった協力することの必要性や弱者へのいたわり、自己主張の必要性が社会的な教育内容となる。また、子育てをする環境的な変化として、少子化の中で家庭及び地域の養育力は低下し、核家族における子育ての孤立感を招き、家庭内で家事の協力が得られないことで子育ての負担感の増加が推察され、指摘できる。

(2) 結婚・出産・子育ての希望と現実の差違

少子化や子育て環境の変化に対して、若者は結婚・出産・子育てに希望がもてないのであろうか。国立社会保障人口問題研究所による「出生動向基本調査」によると9割の若者は結婚を望んでいた。加えて希望する子どもの数は2.42人であったが、実際の子どもの数は2.07人で過去最低であった（出生動向基本調査, 2010）。若者は結婚を望み、なおかつ子どもを2.5人程度希望しているにもかかわらず、実際の子どもの数は過去最低となった。理想の子どもを持たない理由として、子育てや教育にお金がかかるから（60.4%）、自分の仕事（勤めや家業）に差し支えるから（16.8%）と経済的理由が主であった。

これらから、経済的なサポートや女性のライフイベントと働き方の配慮があれば、希望する子どもの数は実数になり得る。希望する子どもの数が実数となれば、少子化に歯止めができる。

(3) 女性の社会進出と子育て

結婚・出産・子育ての希望と現実の差違で経済的理由と女性の就労が関係していることがわか

ったが、女性の就労を中心とした社会進出は子育てにどう影響するのであろうか。

日本の女性の就労の特徴として、Mカーブを描くことは認知されている。Mカーブのくぼみは30代であり、平成23年の統計によれば女性就労率は30～34歳67.6%、35～39歳67.0%であった。しかし、10年前の平成13年と比較すると有配偶者就労率は30～34歳で9.3ポイント上昇している（総務省, 2013）。ここ10年間の保育施策、経済施策の一定の評価として示される。

一方25～44歳の女性就業率では71%になっており、保育所利用者は三人に一人の割合となっている（総務省, 2013）。つまり、女性の就業率の上昇は、保育の受け皿拡大が支えている。

しかし、家族関係社会支出の対GDP比較で日本1.32%は、英国3.78% スウェーデン3.45%と比較すると低く、子育て支援の量及び質の不足は諸外国に比して顕著である（内閣府, 2011）。

つまり、女性の就業率上昇には、子育て支援の量や質の充実の経済的な裏打ちが必要であるにも関わらず、諸外国に比して日本の対GDP比較の家族関係社会支出は低く、少子化対策の課題となっている。これらは、日本の子育てに対する性別役割意識や高齢者対策に対して少子化対策が後手に回っている現状を示しており、子育てに対する意識の改革と子育て支援制度のさらなる充実が少子化対策には必須と捉えられた。

(4) 待機児童問題

女性の社会進出に、子育て支援施策の必要性が明らかになった。女性の社会進出に保育施策なしには語れない。ここでは、保育所に入りたくても入れないいわゆる待機児童の問題を考えたい。待機児童問題は、地方より都市部の方が深刻である。第2項の保育士を取り巻く法令の変化でも述べるが、保育行政の根拠法である社会福祉法の改正により、保育所の入所対象者は「保育に欠ける子ども」から、「保育が必要な子ども」に変更された。子どもの健やかな育ちにおいて少しでも保育の必要性があれば、保育所への入所対象となるように変更された。社会福祉法の下位法である「子ども・子育て支援関連三法」により、各地方自治体で保育所入所申請があれば保育の必要性の認定を受ける。今まで保育認定の就労においては昼間常態勤務のみ対象であったが、パートタイムや夜間などすべての就労が対象となった。また、求職活動や就学、同居家族の介護やボランティア活動参加、ひいては虐待やDVの恐れのある場合も保育の必要性としてあげられ、保育対象者が増加した。

これらにより、保育所数は24,425（平成25～26年）から、28,783（平成26～27年）に増加した。保育所の申込数は52,763件（平成25～26年）から、131,410件（平成26～27年）に倍増した。比例して待機児童は平成27年4月時点で23,167人となり、前年増加1,796人とふくれあが

っている。これらは雇用や人口の集中している都市部で深刻化している。

以上のことから子どもと親を取り巻く環境として、少子化及び社会の養育力の低下のため保育の外部化が必須となり、結婚・出産・子育てに対する若者の希望に添い、諸外国の子育て支援に並ぶべく、保育対象者の拡大がなされた。その結果、保育所申込数は倍増し待機児童はふくれあがった現状が見えてきた。これらの状況は、保育所で勤務する保育士の業務の量的な負担になると予想される。

第2項 保育士を取り巻く法令の変化

第1項では、社会環境の変化から子どもと親に及ぼす影響を考えた。本項では保育施策から保育士への影響を考えたい。

保育所は1947年（昭和22年）に制定された児童福祉法第7条に規定される児童福祉施設である。そのため、保育所は児童福祉施設として最低基準が規定されている。所轄官庁は厚生労働省であり、保育内容及び運営は、保育指針として示されている。一方幼稚園は学校と見なされ、所轄官庁は文部科学省であり学校教育法に従う。幼稚園の運営及び教育内容は、幼稚園基準と幼稚園教育要領に示される。幼児教育・保育は、所轄官庁は違うものの重奏するため、常に保育指針は幼稚園教育要領と同時期に見直し、改訂がされている（図1-1-1）。

保育指針は、三度改訂されている。第一次改訂は、1990年に社会環境の変化（都市化、核家族化、少子化）を受けて「措置」から「利用」となった。つまり、「保育に欠ける子ども」に対して行政処分（措置）行政庁と対象者という関係から、保育サービスを保護者が選択し保育所と契約する双務関係・利用契約関係に変わった。また、保育ニーズにあわせ、乳児保育の普及と障害児保育が明記された。

第二次改訂（1999年）では、保育所を家庭保育の補完から地域子育ての支援の役割まで拡大明記された。2001年児童福祉法の改正により保育士は、「児童福祉施設において児童の保育に従事する者」であったが、「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う」と国家資格・名称独占がうたわれ、幼児教育の専門性をより強く問われることとなる。

第三次改訂（2008年）のポイントは①保育所の役割の計画化、②保育内容の改善、③保護者支援 ④保育者の質を高める仕組みであった。しかし、現状の子どもや子育てを取り巻く環境の激変により、核家族・共働き家庭の増加に伴う長時間保育・夜間保育・病児保育など保育ニーズは変化し、保育者の役割と負担の増大が叫ばれている（重田, 2008）。さらに、養護と教育の重要性が示され、大綱化され保育内容の自由度が広がる反面、保育指針が厚生局長の「通知」から厚生労働大臣の「告示」となり、拘束力、制約力、規範性はより強くなった。

また、第三次改訂では、親や地域の子育て支援機能の低下に呼応し、保育士に対して、保護者の育児ストレスや育児不安、家庭環境の調整機能も求めている。これら保育指針にみる保育所への役割の増大は、保育士の業務の質的な負担となる。

平成29年の第四次保育指針の改定（1年の周知期間を経て平成30年施行予定）に向けて、平成28年8月に中間取りまとめが示された。今回の改訂において、子どもの育ちを巡る環境の変

化を踏まえた健康と安全の記載見直しが行われた。「保育所における感染症ガイドライン」「保育所におけるアレルギー対応ガイドライン」（共に平成20年告示）の一体運用の必要性が強調された。それらガイドラインを踏まえて、アナフィラキシーショック時のエピペンの導入など保育所の積極的な対応を推奨している。保育所に専従の看護師の配置は義務化されておらず、専従看護師がいない保育所は、これらの対応の中心は保育士となる。症状の表現ができない子どもの感染予防及び安全を守ることは、保育士にとって質的な負担となることが推察される。

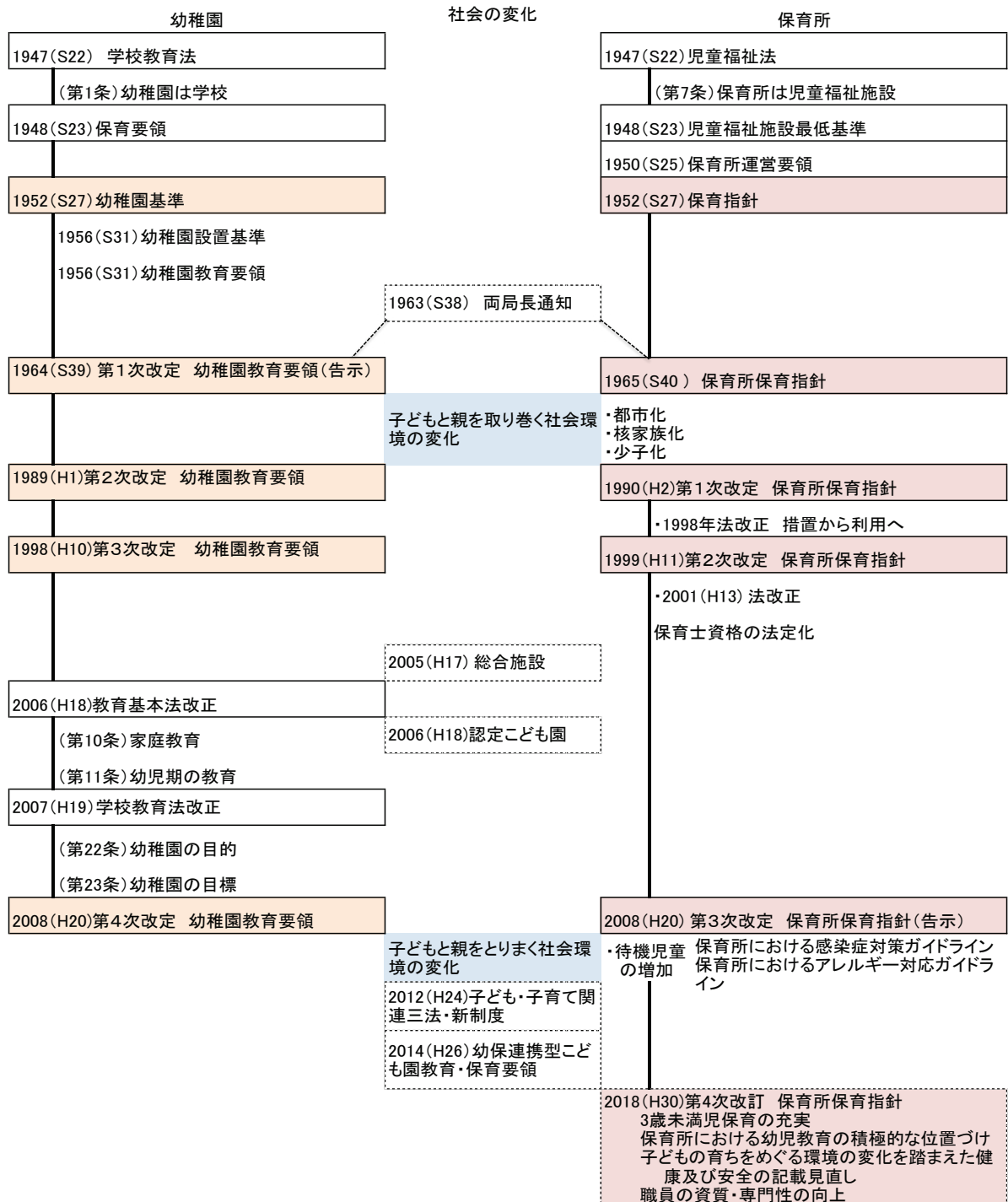


図1-1-1 幼稚園教育要領と保育指針の変遷

一方、養護・教育の重奏は幼保一元化・一体化といろんな場面で議論され、文科省と厚労省のモデル実施として2005年「総合施設」がつけられ、翌2006年認定こども園制度がスタートした。2012年子ども・子育て支援関連三法（子ども・子育て支援法、認定こども園法の一部改正法、子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関連法律の整備等に関する法律）の成立をみた。対象は、「保育に欠ける子ども」から、「保育が必要な子ども」となり対象者

は増加した。幼稚園・保育所はともに施設型給付とされ、保護者の経済的負担の減少を図っている。しかし、「保育が必要な子ども」の解釈の拡大で保育対象者が増加し、保育士の業務量の量的な負担に直結しかねない。

以上のことから保育施策から保育士の環境をとらえると、保育指針の改定のたびに保育の役割が拡大されていた。すなわち、家庭保育の補完から、育児のサポート・地域の子育て拠点・障害児保育・病児保育・時間外保育・感染症及びアレルギー対応まで、様々な対応が保育士の業務として規定されていた。

保育の現状として、少子化及び社会の養育力の低下のため保育の外部化が必須となり、結婚・出産・子育てに対する若者の希望に添い、保育対象者の拡大がなされた。また、様々な社会変化に対して保育ニーズの拡大し、保育指針に示された保育の役割の拡大もなされた。これらは、保育への社会の期待と追い風に捉えられると共に、保育業務の量的・質的な負担となる可能性が示唆された。

文献

厚生労働省, 平成 27 年度人口統計年間推移,

合計特殊出生率 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei15/dl/14_tfr.pdf

(参照 2016. 10. 10)

厚生労働省, (2010) 出生動向基本調査,

<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp> (参照 2016. 10. 10)

厚生労働省, (2016) 保育所保育指針の改定に関する中間取りまとめ,

http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/matome.pdf

鯨岡峻. (2002), 「育てられる者」から「育てる者」へ—関係発達の視点から—, 日本放送出版協会

民秋言. (2014), 幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立, 萌文書林

内閣府. (2015), 労働力調査,

<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf>

(参照 2016. 10. 10)

内閣府. (2011),

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/gdp.html> (参照 2016. 10. 10)

重田博正. (2010), 保育職場のストレス-いきいきした保育をしたい-, かもがわ出版

重田博正. (2007), 保育士のメンタルヘルス-いきいきした保育をしたい-, かもがわ出版

第2節 保育士のメンタルヘルスに関する先行研究の検討

第1節では保育士の現状と課題を検討し、社会の変化に伴う保育の役割の拡大を示した。保育の役割の拡大に伴い、保育士のメンタルヘルスは良好ではないと言われる。そこで、本節ではそのような環境下で勤務する保育士のメンタルヘルスとその関連要因を先行研究から探りたい。

第1項 保育士のメンタルヘルスに関する先行研究の概観

まず、保育士のメンタルヘルスの先行研究をあたり、メンタルヘルスに対する保育研究の動向を探る。

文献検索システム CiNii、医中誌、J-STAGE にて、「保育士」「保育者」「メンタルヘルス」「ストレス」「困難」「効力感」「mental health」「preschool」「nursery」「teacher」「stress」をキーワードとし、原著論文を中心に1996年から2015年まで20年を遡り概観した。その年代を選択した理由は、先に述べた保育士の業務を規定した保育士保育指針の第2回改定(2000年)と第3回改訂(2012年)を挟んだ期間を採択した。概観するための選択された文献の基準として、(1)保育者のメンタルヘルスに関するもの、(2)保育者の困難やメンタルヘルスに関するもの、(3)(2)を軽減させるための方法に関するものとした。尚、選択にあたっては、検索によって得られた題名、アブストラクト、キーワードにより、本研究の目的に合わないものは削除した。

また、WHOによるとメンタルヘルスは、(1)陰性感情 (2)陽性感情 (3)満足感の3要素から構成されている。しかし、近年うつや不安などの陰性感情(negative effect)と満足感を含む陽性感情(positive effect)が必ずしも連動して動くものではないと報告されている(SUBI, 2010)。そこで、メンタルヘルスを陰性感情と陽性感情に分け、それぞれの先行研究を検討した。

検索により、45文献示された。それら文献の保育士のストレスに関わる要因の結果から、個人・社会的・職場の3要因が分類された。表1-2-1はメンタルヘルスを陽性・陰性感情に分けて、これらの要因との関連性を示した。縦軸にはメンタルヘルスの陽性・陰性感情に用いられた指標であり、横軸に個人要因・職場要因・社会要因に分けて一覧表にしたものである。全45文献中38文献は、メンタルヘルスの陰性感情に着目して関連要因を検討していたが、陽性感情及び陽性・陰性感情の両者から、関連要因を検討している文献が少ないことが明らかとなった。また、陽性感情や陽性・陰性感情の両者から関連要因を検討した文献であっても、個人・職場・社会要因すべてを網羅している先行研究はきわめて少ないことが明らかになった。

以上より、保育士のメンタルヘルスと関連要因の先行研究を検討したが、メンタルヘルスの陽性・陰性両感情から検討した文献が少ないこと及び個人・職場・社会要因を網羅した研究が極め

て少ないことが明らかになった。そのため、メンタルヘルスの両感情から、個人・職場・社会要因を網羅して検討を行う必要性が示唆された。

表 1-2-1 メンタルヘルスの感情で分類した要因別文献数

メンタルヘルスの感情	従属変数	文献数	個人要因						職場要因								社会要因
									職場環境要因				職場対人要因				
			経験年数	保育技術	性格	家庭の安寧度	ワークライフバランス	ワークモチベーション	職位	職務	賃金	仕事の量的負担	仕事の質的負担	職場の人間関係	保護者との関係性	子どもとの関係性	
陰性感情	ストレス	18	9	1	2	3		4	2	7	1	7	4	9	11	10	6
	バーンアウト	11	3	1	2	2	1	3	2	5	2	6	6	8	4	4	2
	負のメンタルヘルス	7	2		1			2		4	1	2	2	5	2	2	2
	コーピング	2	1									1	1	1	1	1	
陽性陰性両感情	SUBI 心の健康度・疲労度	3	1			1			1								1
陽性感情	効力感	4		2						4		2		3	2	1	
合計		45	16	4	5	6	1	9	5	20	4	18	13	26	20	18	11

第2項 保育士のメンタルヘルスの関連要因の検討

メンタルヘルスの先行研究の概要傾向はわかったが、メンタルヘルスの関連要因は何が強いのだろうか。本項では、先行研究を陽性・陰性感情別に分類し、関連要因をさらに個人要因・職場要因（環境要因・対人要因）・社会要因に分けて述べていきたい。

（1）陰性感情と関連要因

1) 保育士のメンタルヘルスの陰性感情

保育士のメンタルヘルスの従属変数を検討するとき、まず文献数の多い陰性感情から取り上げる。陰性感情の中でストレス要因が 18 文献で最も多い従属変数であった。ストレス尺度として職場ストレス尺度（JSS-R）や職業ストレス調査票（JCQ 日本語版）及び保育士ストレス評価尺度（NTSS）が使用されていたものの、代表的なストレス項目から選択的に要因を選別した項目が多くみられた。保育士のストレスに関しては数多くの研究がされているが、保育者のストレスが高いことが示されていた。

次に従属変数として文献数が多いバーンアウト尺度は 11 文献であった。保育士のバーンアウトにつながる「情緒的消耗感」は、管理職や非正規保育者より常勤保育士に多く、それは仕事の量の多さと関連していた（神谷, 2011）。また、保育士においてバーンアウトの下位尺度である「情緒的消耗感」・「脱人格化」・「個人的達成感の低下」（以下、バーンアウト 3 要因と示す）のいずれかが注意域あるも、35.2%（小林, 2006）～39%（磯野, 2008）と不良であり、注意域にあるものの割合と比較すると医師（20.7）看護師（28%）以上であった。その他、陰性感情としてベック抑うつ尺度（BDI-II）や精神的健康状態表-日本語版 WHO-5 等も活用されていたが、いずれの指標もメンタルヘルスの病理に傾いている。

第1節で述べた保育の社会的役割の変化に対して、ストレス要因となるものは何か。保育指針が改定された 2008 年以降に質的な聞き取り調査をした文献は極めて少ない。つまり、現在の保育上のストレス要因と保育指針改訂以前のストレス要因の変化の検証はされていないのが現状である。

2) 陰性感情と個人要因について

次に、陰性感情に関連する個人・職場・社会要因別に検討したい。

まず、個人要因の中で最も多くの先行研究で関連性が明らかにされた要因は、「経験年数」であった。経験年数が少ないほどストレスを囲みやすく（上村, 2008）、若い保育者ほどバーンアウトに陥る危険性が高い（齋藤, 2009、森田, 2011、磯野, 2008 など）と指摘している。反面、同様

にバーンアウトを評価尺度とした調査において経験年数に関連しない(小林, 2006、吉兼, 2010)、保育効力感と経験年数が相関しない(西野, 2006)もあり、経験年数で対応しきれない状況、つまり今までの保育スキルでは対応できない状況があるのではないかと推察された。

個人要因の経験年数の次にあがったのは、保育技術及びワークモチベーションであった。日々臨機応変な対応を求められる保育活動の実践に起因する困難感(金城, 2011)、気になる子どもに対応する困難感(池田, 2012・小林, 2006 他)、保育指導技術に不安が多くや自信がない保育者はストレスを貯めやすく(村田, 1996)、森田(2011)は子どもたちが求めるものへの理解が進むほど課題が多くなると述べている。強すぎるワークモチベーションや子どものニーズの追究は、ストレス要因となり得ることが示唆された。

この他、個人要因の中では、家庭の影響も無視できない。陰性感情と家庭の安寧度の関連性を明らかにした論文は5編であった。既婚の保育者は未婚の保育者に比し精神の健康において、有意に良好であり、家族サポート重要性を示唆した(嶋崎, 1996、村田, 1996)。磯野(2008)の調査も、良好な家庭の安寧度は、抑うつ・情緒的消耗感と負の関連を示している。これらのことは家族が重要なサポート源である事を示している。以上から、家庭を個人要因の一部ではなく、婚姻及び家族サポートもふまえて家庭要因として捉える必要性が示された。

3) 陰性感情と職場要因について

次に関連要因として職場要因を取り上げる。職場要因は、職場環境要因及び職場対人要因に分けられた。

職場環境要因には、仕事の量的・質的な負担があがった。仕事の量的負担は、休憩の希求度、バーンアウト、抑うつ(以下、メンタルヘルス関連3指標と示す)のすべてと、質的な負担は抑うつ及びバーンアウトと関連があり(磯野, 2008 他)、仕事の量的負担及び質的負担は、量的負担の方が大きく(山城, 2005)、仕事の実践的スキルとして組織協働のスキル・実務レベルのスキルともにバーンアウト3要因と有意差を生じていた(森田, 2011)。スタッフの数や所属園の環境は、他の要因と重なり合ってメンタルヘルスに影響を及ぼしていた。また、職務内容の変化($p < 0.01$)や、開所時間の変化($p < 0.05$)はストレス総和と有意差を生じており、保育士のストレスに保育環境や保育ニーズは重くのしかかっている(森田, 2011)。

保育指針の改定により、仕事の量的負担もさることながら、発達障害を含む障害児保育も明文化された。障害児の受け入れから約10年を経ている。そこで、業務上の負担感の中で、子どもの養護の質的な部分での聞き取りが必要である。

次に、職場対人要因として職場内・保護者・子どもとの人間関係を検討した。保育士の抱えるストレスに関して、対上司、対同僚、対保護者、対幼児という人間関係が主要ストレスと示し、人間関係が主要因であった（金城, 2011、上村, 2008、石川, 2010、宮下, 2010 など）。それら、ストレス状況に同僚及び上司のサポートにより軽減する事を示し（重田, 2007、手島, 2010 など）、池田（2012）や三根（2001）は職場内のまとまりや共通意識は保育士のバーンアウト状況の低減に役立つと述べている。職場の人間関係やサポートはメンタルヘルスと密接に関係している。しかし、これらは本来の子どもの養護とは無縁であり、職場の人間関係が果たして主要因であるかは検討の余地がある。

4) 陰性感情と社会要因について

ここでは、陰性感情と社会要因について検討する。社会的サポートとして、保育内容や気になる子どもへの対応など、保育の質的負担に対して外部のコーディネーターや臨床心理士のサポートは有効である（上村, 2012）。障害児を受け入れるようになり、就学前の保育所や幼稚園において約1割の子どもが何らかの障害の可能性が示唆されている。文科省の特別支援体制整備状況調査によると小中学校の校内委員会や特別支援教育コーディネーターの設置率は9割を超える中、就学前の幼稚園教諭・保育所は、同設置率が50%台である（文科省, 2014）。この実態が、外部のサポートにも頼らず、試行錯誤している可能性が示唆される。

(2) 陽性感情と保育効力感について

文献数の多い陰性感情の研究傾向と関連要因について検討したが、ここでは陽性感情と関連要因について整理したい。保育士のメンタルヘルスの陽性感情の従属変数としては、「保育者効力感」尺度が大半を占めた。

保育効力感には、専門職としての誇りや保護者子どもとの信頼関係、過剰な期待や要求が関与（池田, 2012）していた。また、保育効力感は社会的スキル（.34）と職務内容満足度（.29）と相関していた。子どもの理解や対応の難しさ（-.35）学級経営の難しさ（-.17）と負の相関を示した（前田, 2009）。

金城（2011）は保育のやりがいを、インタビューからM-GATを用いて明らかにしたが、「やりがい」には「子どもの成長・保育内容」「ソーシャルサポートの確からしさ」が内包され、「保育者としての誇り」につながると述べている。

陽性感情は、誇りや信頼関係が関与しているが、過剰な期待や社会的スキルは、ともすれば諸

刃の刃となり、メンタルヘルスにも影響を起しかねない。質的研究を除き、純粋な陽性感情ではなく、陰性感情との関連において示される研究が主であった。

(3) 陽性・陰性感情と関連要因について

陽性・陰性感情の各感情と関連要因の検討を述べてきたが、ここでは陽性・陰性の両感情と関連要因の先行研究を検討したい。両感情から検討した文献は極めて少ない。

磯野（2008）によると保育士のワークモチベーションは、21点/25点と高い状況であったが、同様にメンタルヘルス関連3指標（休憩の希求度・バーンアウト・ハズ日本語版抑うつ）も低い状況ではなかった。

上村（2012）はSUBI（The subjective well being 日本語版「心の健康度」と「心の疲労度」）を用いて保育士のメンタルヘルスを明らかにした。保育士の心の健康度は一般女性に比して良い状況であるが、心の疲労度も一般女性に比して悪い状況であった。このアンビバレントな状況は、保育士が充実感や満足感を感じながらも、不安や鬱傾向も高く、一見元気で快活にみえるものの、実際には心理的な負担を抱えている状況が推察できる。この心理的な余裕のない状態で仕事に過度に没頭する行動特徴は、多田ら（2010）によればバーンアウトの初期徴候とも重なる。

以上より、保育士のメンタルヘルスの陰性感情と関連要因との検討では、本来の子どもの養護以外の職場要因、個人要因、社会要因との関連性が示された。また、個人要因の一部として捉えられていた家庭は、婚姻等のライフサイクルの変化に起因して有効なサポート源にもなり得るため、家庭を個人要因の一部ではなく、家族サポートもふまえて家庭要因として捉える。次に、陽性感情と関連要因との検討では、保育士という職業にやりがいを感じる一方で、職場の満足度やソーシャルサポートがそれらの根底にあることが示された。加えて、陽性・陰性両感情と関連要因の検討では、陽性感情が良好であるが、陰性感情は良好と言えない結果が示された。

保育士のメンタルヘルスと関連要因の先行研究の検討から以下のことが課題としてあがり、それらを網羅した研究の必要性が示唆された。

- ①二極性のあるメンタルヘルスの陰性感情を中心とした分析が多数であり、陽性感情を従属変数とした研究が少ないこと。
- ②メンタルヘルスに関連する要因においては職場要因が中心であり、家庭要因や社会要因を網羅した研究が少ないこと。
- ③2008年保育指針第3次改訂後、保育の現状を明らかにする質的調査が少ないこと、また保育の陽性感情に関連する「やりがい」と陰性感情に関連する「保育困難感」両者を網羅した研究がな

いこと。以上の3点が明らかとなった。

第3項 研究目的と検証プロセス

保育士のメンタルヘルスの現状と課題及び、先行研究の検討から本研究の仮説を考えた。社会の保育士への期待は、保育士のストレスの拡大に関連し、保育士のメンタルヘルスに影響を及ぼす。そのため、保育士のメンタルヘルスに影響する要因をコントロールすることで保育士のメンタルヘルスの向上に繋がることを期待する。

保育士のメンタルヘルスを扱った先行研究は、第2節で述べたように要因の偏りがみられた。すなわち、二極性のあるメンタルヘルスの陰性感情を中心とした分析が多数であり、陽性感情を従属変数とした研究が少なく、メンタルヘルスに関連する要因においては職場要因が中心であり、家庭要因や社会要因を網羅した研究も希少であった。また、保育指針第3次改訂後、保育の現状を明らかにする質的調査が少ないこと、また保育の陽性感情に関連する「やりがい」と陰性感情に関連する「保育困難感」両者を網羅した研究がないことである。

これらから、図1-3-1に本研究における仮説を示す。社会情勢の変化から保育業務の量的・質的負担が危惧される。それにより保育士のストレスの拡大が予想されるため、ストレスの要因に関して職場要因だけでなく、家庭要因及び社会要因から考える必要がある。また、保育業務の困難感とやりがいについても質的な検討が必要である。従属変数であるメンタルヘルスは、陽性感情及び陰性感情の両極から検討を重ね、保育士のメンタルヘルスの向上の示唆をまとめたい。

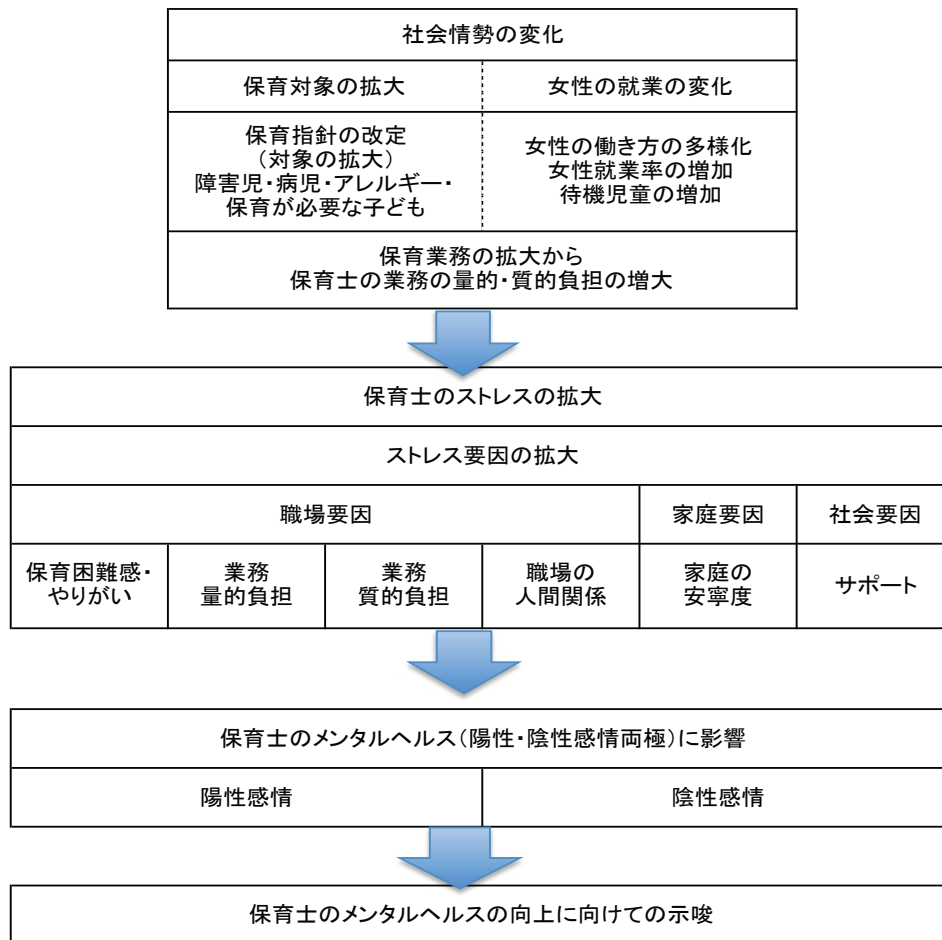


図1-3-1 課題を付記した仮説図

本研究の仮説は、社会情勢の変化から保育業務の量的・質的負担の増加及び、保育士のストレスが拡大する。それらのストレスの要因として、職場要因だけでなく、家庭要因及び社会要因や、保育業務の困難感ややりがいを想定した。それら保育士のストレス要因と、保育士の陽性・陰性感情との関連性を実証的に明らかにすることが本研究の目的である。

研究の方向性として、第一段階では保育士の役割が変化中、保育の現状を把握するために、保育所で実際に担任業務を行っている保育士の (1) 保育上の困難感 (陰性感情)、(2) 困難な場面でも対応できる方法 (陽性感情) (3) 保育のやりがい (陽性感情) の質的調査を行う。第二段階として、質的調査で明らかになったストレス要因 (保育困難感の要因) を踏まえて、保育士のストレス要因を (1) 個人要因、(2) 家庭要因、(3) 職場要因、(4) 社会要因 (以下、メンタルヘルス要因と示す) を決定する。その後質問紙調査を行い、陽性・陰性感情とメンタルヘルス要因の関連性を明らかにする。第三段階として、第一段階、第二段階の結果を俯瞰し総合考察を行い、示唆を得たい。

文献

- 池田幸代・大川一郎. (2012), 保育士・幼稚園教諭のストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響—保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として, 発達心理学研究, 23 (1), pp23-35
- 石川洋子・井上清子. (2010), 保育士のストレスに関する研究—職場のストレスとその解消—, 文教大学教育学部紀要, 44, pp113-120
- 宮下敏恵. (2010), 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討, 上越教育大学紀要, 29, pp177-186
- 赤田太郎. (2010), 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性, 心理学研究, pp158-166
- 齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘令子・宮岡等. (2009), 保育従事者のバーンアウトとストレスコーピングについて, 3, pp23-29
- 本吉大介・細野宏美. (2014), 保育者の対人ストレスの認知的評価とソーシャルスキルの関連, 健康心理学研究, 27 (1), pp45-52
- 山城真紀子・上地亜矢子・大城一子・嘉数朝子. (2005), 沖縄県の保育者の職業的ストレスと健康についての研究 1—認可保育園と認可外保育園を対象に—琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, pp79-86
- 手島幸子. (2010), 保育者における保護者からのストレスとソーシャルサポート, 心理相談センター年報, 6, pp33-41
- 加藤由美・安藤美華代. (2015), 保育士のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望, 岡山大学院教育学部研究科集録, 159, pp1-10
- 加藤由美・安藤美華代. (2012), 新任保育士の抱える困難に関する研究の動向と展望, 岡山大学院教育学部研究科集録, 151, pp23-32
- 磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古. (2008), 保育所で働く保育士のモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因, 小児保健研究, 67 (2), pp367-374
- 小林幸平・箱田琢磨・小山智典・小山明日香・栗田広. (2006), 保育士におけるバーンアウトとその要因の検討, 35 (5), pp563-569
- 田中紀衣・村松公美子・片桐敦子・村松芳幸・宮岡等. (2012), 保育従事者におけるバーンアウトとコーピングに関する検討, 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 6, pp41-45
- 原田和宏・齋藤圭介・有岡道博・岡田節子・香川幸次郎・中嶋和男, (2002), 福祉関連職における Maslach Burnout Inventory の因子構造の比較, 社会福祉学研究, 42 (2), pp43-53

- 森田多美子・植村勝彦. (2011), 保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響する要因の検討, 愛知淑徳大学論集, 1, pp67-81
- 大鐘啓伸. (2015), 保育士のメンタルヘルス支援プログラムの試作-EPA 活動に関連する心理学的測定から-, 名古屋女子大学紀要, 61, pp165-173
- 上村眞生. (2011), 保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究-保育士の経験 : 年数による検討-, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 60, pp249-257
- 村田努. (1996), 保育者のストレス状況とその要因, 白梅学園短期大学紀要, 32, pp135-147
- 西坂小百合. (2002), 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育効力感の影響, 教育心理学研究, 50, pp283-290
- 秦野悦子・青木敦美. (2005), 保育士の精神的健康におけるストレス要因と効力感, 保育と保健, 12 (1), pp43-47
- 前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎. (2009), 保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響, 九州保健大学研究紀要, 10, pp17-23
- 村田ひろ子. (2015), 家庭生活の満足度は、家事の分担次第-ISSP 国際比較調査「家庭と男女の役割」から-, 放送研究と課題, pp8-19
- 中根真. (2014), 保育所保育士のワーク・ライフ・バランスの実態と課題-両立の難しさに焦点をあてて-, 保育学研究, 52 (1), pp116-128
- 上村眞生・七木田敦. (2008), 保育士のサポート源構造に関する実証的研究, 小児保健研究, pp854-860
- 林富公子. (2013), 保育士自身を対象とした研究に関する動向, 園田学園女子大学論文集, 47, pp209-221
- 西野美佐子・藤原利. (2006), 保育士が直面する問題と職場研修に関する研究, 東北福祉大学研究紀要, 30, pp11-26
- 田辺昌吾・松山由美子・古市久子・遠藤晶・江原千恵・内藤真希. (2014), 保育者は経験年数を重ねることでどのように変化するのか-身体表現の指導・援助の悩みに注目して-, 四天王寺大学紀要, 58, pp231-241
- 嶋崎博嗣. (1995), 保育者の精神健康管理に関する研究-属性・職務上の背景からの検討-, 筑波大学体育科学系紀要, 18, pp149-158
- 水野智美・徳田克己. (2008), 就職後3ヶ月の時点における新任保育者の職場適応, 近畿大学臨床心理センター紀要, 1, pp75-84

- 神谷哲司・杉山隆一・戸田有一・村山有一. (2011), 保育所における雇用環境と保育者のストレス反応-雇用形態と非正規職員の比率に着目して-, 日本労働研究, 608, pp103-114
- 金城悟・安見克夫・中田英夫. (2011), 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造-M-GTA による分析の試み-, 東京淑徳短期大学紀要, 44, pp25-44
- 重田博正. (2010), 保育職場のストレス-いきいきした保育をしたい-, かもがわ出版
- 重田博正. (2007), 保育士のメンタルヘルス-いきいきした保育をしたい-, かもがわ出版

第2章 保育士のメンタルヘルスの質的検討

第1章では、保育士のメンタルヘルスの現状と課題を法制度の変遷および先行研究から検討した。そのなかで2008年第三次保育指針改訂後、保育困難な状況についての質的な研究はほとんどみられなかった。本章では、保育士のメンタルヘルスに影響する要因を導き出すために、メンタルヘルスの陰性感情である保育困難状況と陽性感情として保育のやりがいをインタビューから導き、示された語句の関連性から妥当性を検証したい。まず、第1節として保育士の保育の困難感とやりがいに関する質的調査を実施し、保育困難状況とやりがいの概念図を明らかにし、メンタルヘルスに影響を及ぼす要因を明らかにする。第2節においては、第1節のインタビュー内容を形態素で分け、核となる要因の関連性を検討する。

第1節 保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの実態調査

第1節では、保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの実態調査から、保育士の感じる保育困難状況とやりがいの概念図を作成したい。

第1項 調査方法の実際

(1) 調査対象と方法

調査対象者は、山口県の保育所(園)に勤務する保育経験5年以上の保育者10名にインタビューを行った。調査協力者はすべて女性で年齢は25歳から48歳まで、保育経験は5年から28年であった。

インタビューは、保育者の指定した場所において、半構造化面接で行った。インタビュー時間は1時間程度と依頼し、調査協力者の業務や語りの状況に応じて30～90分の間(平均41分)で実施した。インタビューの内容は調査協力者の了承を得て、ICレコーダーにより録音した後に、逐語録を作成した。インタビューで用いた質問は表2-1-1の通りである。実際のインタビューにおいては表2-1-1に示した構造化された質問を起点としながら、調査協力者の興味や関心に従って質問の内容を深めたり、質問の順序を変えるなど自然な会話の流れになるように柔軟なスタイル(半構造化)により実施した。

表2-1-1 半構造化面接で用いた質問内容

質問内容
あなたが保育する上で、保育困難感を感じる状況とはどんな状況ですか
そのような保育困難状況に、あなたはどのように対応しましたか
保育が困難な状況であっても、対処可能だと感じるときはどんな状況ですか
あなたにとって、保育(仕事)のやりがいとは何ですか

(2) 倫理的配慮

調査協力者に対して、あらかじめ研究の目的、方法、結果の公表、ICレコーダーによる会話の録音などについて文書を用い説明した。さらに、インタビューで得られたデータは研究目的のために用いること、学会発表や博士論文として公表すること、それ以外の目的で利用はしないこと、個人が特定できるようなデータの使用はしないことを説明し、了承を得た。本調査は山口県立大 学生命倫理委員会（第23-42号）で承認を得た。

(3) 分析方法

本研究においては、保育者10名のデータが得られた。インタビューの分析方法については、表2-1-2に示す。9名のデータの分析の時点で、「保育が困難な状況」「保育が困難な状況への対応」について新たなサブカテゴリ及びカテゴリの生成が認められなくなった。10名のデータの分析を終えて、理論的飽和に達したと判断した。サブカテゴリも検討したが、面接時のやりとりの流れや特定の保育士の語りに大きく左右されていると考えられたため、サブカテゴリ数による分析は行わなかった。

表2-1-2 インタビューの分析方法

手順	手順内容
1	全面接の逐語記録を作成し、意味の単位ごとに意味文として切り出す
2	各意味文にその内容を要約したコードをつける
3	コードを一覧にし、関連性の高いコードをサブカテゴリとしてまとめる
4	関連性の高いサブカテゴリをカテゴリとしてしめす

逐語録をまとめる段階で、逐語の内容やコードに、個人や調査協力者の勤務する保育所が特定される懸念が生じた。そのため、会発表や論文等の公開時は、逐語録そのままの表現ではなく、

話者の話した表現をできるだけ崩さずに、話者独自の表現や固有名詞を一般的な表現に対応した形で記載することとした。したがって、本論文に記載された話者の会話表現は筆者によりある程度、修正された形になっているものも含まれる。

(4) 分析コードの質保証

本研究は、分析コードの信頼性と妥当性できるだけ確保するために、研究計画の立案から、調査の実施、データ分析にいたるまで、発達障害臨床に携わる医師と博士後期課程指導教授のスーパービジョンを受けた。

第2項 保育困難状況・保育困難状況の対応についての結果

逐語録の分析の結果、調査協力者としての保育士は、すべて「保育困難な状況」を経験していた。「保育士が感じる保育困難な状況」は「子ども要因」と「親要因」に大別され、対象となったすべての保育士から両要因の経験が語られた。

(1) 「保育士が感じる保育困難な状況」の「子ども要因」として語られた内容

「保育士が感じる保育困難な状況」の「子ども要因」について得られたカテゴリとサブカテゴリを保育者の語りを、要約したコードを示す(表2-1-3)。以下カテゴリは《 》で、サブカテゴリは〈 〉で表現した。

子ども要因のコードより、〈衝動的な行動や暴力〉〈落ち着きがない〉〈部屋を出る〉〈気持ちの切り替え〉〈パニック〉のサブカテゴリが抽出され、《集団生活を乱す行動》と命名した。また、〈意志を通す・こだわり・気むずかしい〉〈コミュニケーションがとれない・他の子どもと関われない〉のサブカテゴリが抽出され、《集団生活をおくれない行動》と命名した。

表 2-1-3 保育困難な状況の子どもの要因

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
衝動的に手が出たり、足が出たりする・カッとなると我慢ができない	衝動的な行動や暴力	集団生活を乱す行動
じっとしていない・常に動いている・走り回る	落ち着きがない	
年長さんになってトラブルになると部屋から出て行く	部屋を出る	
別の行動をするといっても嫌だとだだをこねる	気持ちの切り替え	
風を怖がり騒ぐ・突然奇声をあげる・かんしゃく持ち・ひっくり返って大声でなく	パニック	
手順通り作らないと気が済まない・自分の通り道をふさいだ子どもの洋服をはさみで切った・黄色いものしか持たない、遊ばない	意志を通す・こだわり・気むずかしい	集団生活を送れない行動
造語・言葉が出ない・一緒に遊べない 設定遊びができない・特定の保育士しか抱かれたい	コミュニケーションがとれない・他の子どもと関われない	

表 2-1-3 から、集団を乱す行動の多くは、ADHD（注意欠如多動性障害）の多動衝動症状と類似しており、ADHD 的行動特性の子どもが《集団生活を乱す行動》であると保育士が認識していることが分かった。また、集団生活を送れない行動は、コミュニケーションがとれないや造語など意思伝達の質的障害、設定遊びができないなどは対人的相互反応の質的障害、黄色いものしかもたない等は行動興味活動の低下、反復性常同的儀式行動と捉えられ、ASD（自閉症スペクトラム障害）的行動特性であることが推察された。保育者はそれら発達障害の行動特性（ASD 的行動特性）を保育困難な状況として《集団生活を送れない》要因として語っていた。

(2) 「保育士が感じる保育困難な状況」の「親要因」として語られた内容

「保育士が感じる保育困難な状況」の「親要因」について得られたコード及びサブカテゴリとカテゴリを表 2-1-4 に示す。

表 2-1-4 保育士の保育困難な状況の親の要因

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
完璧に工作をする子どもの親は、子どもの代わりに気づかずに子どもと思っている	親が子どもの行動特性に気がつかない	子どもの行動特性を認識しない
子どもがはしゃいでいるのは、一時的と思っているがいつも騒いでいる	親が子どもの行動特性を気にしない	
母親の情緒が安定していない・子どもに当たる・不安で夜中に電話をかけてくる	親自身が不安定	親の行動特性に問題がある
親自身がコミュニケーションを避ける・目を合わせない・アドバイスなどが通じない	親自身がコミュニケーションが苦手	
親も乱暴な行動をとる・子どもを座らせるときも投げるように置く	親自身が乱暴な行動をとる	
3歳を過ぎたらだっこせず、甘やかさない・3歳までは覚えてないのでどこにも遊びに連れて行かない・ジュースをたくさん飲ませる	親と保育者との保育方針の違い	
年少さん以上になっても3歳未満児クラスの対応を希望する・異常に厚着をさせる・子どもの行動を保育士に逐一聞く	親が神経質	
乱暴な行動をしても注意しない・笑ってごまかす・子どものいいなり・偏食はそのままにする	親が子どもを叱れない	育児の行動が未熟
子どものわがママをみとめる・黙認する・言葉でたしなめるのみ・普通の子のお母さんが変わってきている子どもにどうしていいかわからない	親が子どもにどう接するか分からない	
反抗期が分からない・いつまでもほ乳瓶を使う・親が食べさせているため、自分で食べようとしていない	親の育児能力が低い	
祖父母と住んでおり、母親が長女のような関係・何でも祖母に聞く・子ども機嫌に周りが振り回される	親になりきれしていない	
夜遅く連れ回す・居酒屋に連れて行く・体調が悪くても登園する・人混みに乳児を連れて行く・おむつを替えていない・お風呂に入れても入っていない・休みの日のお迎えが日頃より遅い	親が子どもに対する影響を気にしない	自分中心の親

関連するコードよりサブカテゴリとして〈親が子どもの行動特性に気づかない〉〈親が子どもの行動特性を気にしない〉の2つがあがり《子どもの行動特性を認識しない》とカテゴリを命名した。このカテゴリのコードより、発達障害の行動特性のある子どもの親であることが分かった。子どもの行動特性では、保育士と保護者の認識のずれがあり、そのことで保育士は保育困難感を感じていた。

サブカテゴリとして〈親自身が不安定〉〈親自身、コミュニケーションが苦手〉〈親自身が乱暴な行動をとる〉〈親と保育所との保育方針の違い〉〈親が神経質〉の5つがあがり、カテゴリの命名を《親の行動特性に問題がある》とした。このカテゴリに属した親はコードからみると、発達障害の行動特性のある子どもの親と健常児の親の両方が存在した。

関連するコードより〈親が子どもを叱れない〉〈親が子どもにどう接していいかわからない〉〈親の育児能力が低い〉〈親になりきれしていない〉の4つのサブカテゴリが生成され《育児行動が未熟》とカテゴリの命名をした。〈親が子どもに対する影響を気にしない〉のサブカテゴリは《自分中心の親》と命名し、コードからみたカテゴリの属する親は、健常児の親であった。

保育士は、発達障害の行動特性のある子どもの親と健常児の親ともに、子どもへの影響を顧み

ない親の行動そのものに戸惑いを感じている様子が伺えた。

(3) 「保育困難な状況への対応」について

保育困難な状況の対応についても、子どもへの対応と親への対応に大別された。

1) 「保育困難な状況への対応」の「子どもへの対応」について

関連するコードより〈保育活動を試行錯誤する〉〈その子と段階的に関わる〉〈一緒に行動するという概念にこだわらない〉〈その子を中心とした活動の工夫〉〈他の子への対応の工夫〉の5つのサブカテゴリが抽出され、《保育の規制や概念にこだわらない》とカテゴリの命名をした。

〈その子どもの居場所をつくる〉〈その子を取り巻く、子ども同士の関わりをつくる〉サブカテゴリを《子どもを取り巻く環境の工夫》、子どもから信頼される〈状況に巻き込まれない〉の2つのサブカテゴリが抽出され《保育士の精神的な心構え》とそれぞれカテゴリの命名をした。

以上から「保育困難な状況への対応」の「子どもへの対応」では、《保育の規制や概念にこだわらない》《子どもを取り巻く環境の工夫》《保育士の精神的な心構え》の3つのカテゴリが抽出された。おのおのの語りを要約したコードとサブカテゴリを表2-1-5に示す。表2-1-5から、保育士たちは集団生活を成り立たせ、他の子どもへの影響を緩和するために、あらゆるスキルや工夫を行っていた。その内容をみると、指導を中心とした教育的な行動ではなく、その子どもを支える支援的行動が中心であった。

表2-1-5 保育困難な状況の子どもへの対応

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
何でも試してみる、正解ってないから、うまくいくこともあり前回良くても次はまずいときもある・手本はないからまずはやってみる	保育活動を試行錯誤する	保育の規制や概念にこだわらない
他の子どもを見たらできる子は、まず他の子どもが何をしているのを見せて行動や活動を促す・集団に関われない子どもは一人遊びから関わる・強制しない・否定しない	その子と段階的に関わる	
指示の聞ける他の子どもを先にトイレに行かせ並んで待たせ、じっとしていない子どもを保育士がトイレに連れて行く	一緒に行動するという概念にこだわらない	
匂いがだめでみんなと食べれない子どもは、保育士のそばに置き、クラスという枠を外れて気の合う保育士のそばでお弁当を食べる	その子を中心とした活動の工夫	
一人遊びをしているときは、そばで保育士も遊ぶ・その子が喜びことを設定保育にすれば、みんなでできる		
その子が書きたい時に、お絵かきをさせる・お医者さんごっこをしたいときは患者役や薬剤師・看護師役にみんなを巻き込む		
いいことと悪いことの型はめの教材で、絵では分からない子どもに、形自体を変えて、形をはめることで、何がいいこと分かるようにした	他の子への対応の工夫	
他の子がその子ばかりだっこすると言われたら、言った子どもをだっこする・して欲しいことはみんな一緒		
その子が居てもいい場所、居心地のいい場所をつくること・自分が病氣だと分かっているわけだから・いろいろなことを経験させて、五感を刺激して、ストレス出ない状況を考える・心のいい状態を作る	その子どもの居場所を作る	子どもを取り巻く環境の工夫
障害児を受け入れていると最初は他の子どももびっくりするが、なれてくるとよだれを拭いたりして誰も汚いと言わない、保育士のまねを他の子どもがしてくれる・変化を教えてくれる・他の子と一緒に居るのが当たり前だと思えるようになる・こだわりのある子に他の子が距離を置きながら見守ってくれた	その子を取り巻く、子ども同士の関わりを作る	
保育士は友達ではないからなれ合いにならない、尊敬されるような行動をとると他の子どもは信頼して、その保育士の行動をまねする	子どもから信頼される	保育士の精神的な心構え
こちらも落ち着いて対応する・なぜそうなったかやその子の気持ちをくみ取れるように考える・ちょっと時間をおいて考える・他の人の対応を見る	状況に巻き込まれない	

2) 「保育困難な状況への対応」の「親への対応」について

関連するコードより〈親の不安を理解する〉〈信愛される行動をとる〉〈親の心情に歩み寄る〉の3つのサブカテゴリが抽出され《親の立場になって声をかける》と命名した。〈良い事への強化・それによる変化を伝える〉〈将来の悪影響を伝える〉の2つのサブカテゴリの2つのサブカテゴリが得られ《望ましい行動・その子の将来への影響を粘り強く伝える》と命名した。〈他の子どもと比較する〉〈子どもの変化で変わる〉のサブカテゴリでは、《実際に見てもらう》とカテゴリ命名した。以上から「保育困難な状況への対応」の「親への対応」では、《親の立場になって声をかける》《望ましい行動・その子の将来への影響を粘り強く伝える》《実際に見てもらう》の3つのカテゴリが抽出された。各サブカテゴリの語りを要約したコードを表2-1-6に示す。

表2-1-6から、親の類型に対して保育士は柔軟に対応し、育児指導という教育的な視点ではなく、育児相談のような支援的な行動で対応していた。何度も言葉を変えて伝えるや経験を元に

伝えるなど、親に保育士の意図を分かって欲しい気持ちが表れていた。

表2-1-6 保育困難な状況の親への対応

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
子どもの行動の意味や成長過程であることを伝える・不安な親にいつ電話してもいい指導した・不安が子どもの咳で救急車を呼ぶような行動になる・みんな最初はそうなんだと理解できるようになるとお母さんも楽になる	親の不安を理解する	親の立場になって声をかける
何でも教えてあげる・頼りになる人になる・信頼してもらう	信頼される行動をとる	
親は自分の子どもしか見えていない・障害の意味が分かっていない・よそのこと比べて親が落ち込む・対応が分からないストレスがあることを分かってあげる	親の心情に歩み寄る	
叱った後の状況を報告する・良い事への強化をする 望まれる育児を促す	良いことの強化・それによる変化	望ましい行動・その子の将来への影響を粘り強く伝える
ちょっと変わったお母さんたちに、育児をどうやって伝えたらいいか悩むが何度も言葉を換えて伝える・将来どうなるかを分かってもらう・育児情報を伝える・経験を元につたえる・どういうことが正しいのかを時間をかけて伝える	将来への影響	
縦割り保育で、他クラスの子どもの目にする・園にいるときの子どもを参観してもらう	他の子どもと比較する	実際に見てもらう
子どもの状況を報告する・子どもが休みでも行きたいというような園にする・それを見た親のきもちもかわる・スキンシップをとって安定した子どもを見てもらう・その育児がなぜいけないかを知識を持って自信を持って伝える	子どもの変化で変わる	

第3項 保育困難な状況にも対応できる・やりがいのインタビュー結果

保育士のメンタルヘルスに関連する要因を検討する場合、陰性感情に結びつく要因だけでなく、陽性感情に関連する要因の聞き取りの必要となる。本項では、陽性感情に関連すると考えられた「保育困難状況にも対応できる」と捉えた内容、また、「保育士のやりがい」について検討する。

(1) 「保育困難な状況にも対応できる」について

保育困難状況の語りと共に、保育困難な状況にも対応できると答えた保育士が存在した。関連するコードより〈工夫すれば変わってくる〉のサブカテゴリが抽出され《子どもが変わってくる》と命名した。〈昔も今も子ども自体は変わらない〉〈気にかからなくなる〉〈対応や手順を学んだ〉のサブカテゴリが抽出され《見方や対応で落ち着く》と命名した。〈スーパーバイザーに相談できる〉のサブカテゴリが抽出され、《スキルアップ・サポート》とカテゴリ命名した。保育士たちの語りから保育困難な状況でも対応可能な要因として、《子どもが変わってくる》《見方や対応で落ち着く》《スキルアップ・サポート》のカテゴリがあがった。おのおののサブカテゴリのコードを表2-1-7に示す。

表2-1-7から、保育士は日々の活動の工夫や子どもを個性ととらえることでその子どもの変化を肯定的にみたり、自分のスキルを研修やスーパーバイザーなどから助言を求める等、自助努力で対応可能と答えていた。

表2-1-7 困難な状況でも対処可能な要因

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
設定や導入をその子も周りも楽しみがあるように工夫したり、時間がたてば子どもの行動は変わってくる	工夫すれば、変わってくる	子どもが変わってくる
昔は性格という括りだった・今も昔も子ども一人一人は変わらない・集団になると落ち着きない子どもが目立ってしまうが春に比べればずっと成長している	昔と今は子ども自体変わらない	見方や対応で落ち着く
最初は気にかかっていたが、互いになれて気にならなくなる 愛情を注がれると子どもは変わってくる・仲のいい子ができる と変わってくる	気にかからなくなる	
発達障害特性のある子どもへの対応は、他の子どもにも使える・一人一人行動(特性)は違うが、結構なことは健常児の中 でできる	対応や手順を学んだ	
絵一つでも、どんどん変わっていく、その子の内面を示している ようだ・それを褒めると他の子どもも認める	子どもの強みや変化が分かる	
何度も研修に参加したら、こんな感じで関わったらいいと分かって 気が楽になった・研修先の先生にもアドバイスを受けられる ようになった	スーパーバイザーに相談できた	スキルアップ・サポート

(2) 「保育士のやりがい」について

「保育士のやりがい」について関連するコードより〈子どもがかわいい〉〈保育にはつらさを越える何かがある〉〈子どもに頼られている〉〈保育の難しさ・達成感〉の4つのサブカテゴリが示され、まとめて《子どもが好き・仕事がすき》とカテゴリ命名した。

〈子どもの初めてにあえる。親と喜びを分かち合える〉は《子どもの成長を実感》と命名し、〈自分の強みを活かせる〉〈協力体制がある〉の2つのサブカテゴリ《保育に独創性が活かせる》と命名した。保育士のやりがいについては、《子どもが好き・仕事がすき》《子どもの成長を実感》《保育に独創性が活かせる》のカテゴリが得られた。それぞれのサブカテゴリのコードについては、表2-1-8に示す。

表2-1-8の中で、子どもの姿や素直な反応につらさが救われたり、達成感を感じている様子がうかがえた。また、成長という親と共有できる喜びがやりがいとなっていることも語られた。自由な保育活動が保証されている環境もやりがいにつながっていることが示された。

表2-1-8 保育のやりがい

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
どんな年齢でもすごくかわいい・笑顔です・おこつてもその後笑顔で寄ってきてくれる・じらをいっている子どもも好き・寝顔も好き	子どもがかわいい	子どもが好き・仕事がすき
ぎゅーっと抱きしめられたらそれだけでやら・困ったことも何か忘れていくんです・それを越える何かがあるんです・いい仕事です・パワーをもらっている	保育にはつらさを越える何かがある	
いつもおこつてばかりだったのに、事故で休んだ後に登園したときみんなで囲んでくれた・叱られてもついてくる・こちらの思いを分かってくれる	子どもに頼られている	
狙いをもった保育計画は大変で難しい・本を見たり勉強しながらと言う感じで、書いてあるようにはならない・計画を練って活動して大変だけど子どもの笑顔が活力	保育の難しさ・達成感	
言葉ができて、初めて名前を呼ばれたり、初めてパンツをはけることに会える・言葉が少ない中で、保育園で遊んだことをいってくれる・できるようになった瞬間を親と喜べる	その子の初めてにあえる・親と喜びを分かち合える	子どもの成長を実感
ピアノが好きな先生は作曲したり、その曲をみんなで歌ったり。その先生の強みが活かせる	自分の強みが活かせる	保育に独創性が活かせる
やりたいことをさせてくれる・協力やサポート体制がある	協力体制がある	

第4項 保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの考察

今回のインタビューを行った10名の保育士は、すべて保育困難状況を経験していた。保育困難状況に至った子どもの行動は、発達障害の行動特性と類似していた。5年以上の経験のある保育士は、何らかの発達障害の行動特性のある子どもを担当したことになる。これら発達障害の行動特性のある子どもを経験した保育士の割合は、先行研究のデータ郷間88% (2008)や斉藤96.6% (2008)と同等であった。今や、勤務する保育所に発達障害の行動特性のある子どもがいるのは当たり前前の状況になっていると推察された。

保育困難状況の子ども要因は、《集団生活を乱す行動》《集団生活を送ることができない行動》であったが、子どもの行動においてセルフコントロールができない状態が集団生活を乱していると考えられた。落ち着きのない子どもの困難性と対応について、中村(2005)は「保育現場では、対応に迷ったり、理解が十分できなくても、何らかの対応をしなければならない現状があり、81%の子どもに特別な対応を行っていた。保育者がクラスでできる対応としては、『子どものそばに常に保育者がついていて』対応が最も多かった」と述べている。今回の保育士の語りの中でも、個別対応の多さが目立った。しかし、保育事情からこれらの事例にすべて個別対応ができるとは言いがたい。丁寧に関わりたいと思っても、それがかなわぬ状況は保育士の「保育不全感」につながる可能性があることは古賀(2011)も指摘している。これら保育不全感が、保育士のメンタルヘルスに影響する可能性も否定できない。

保育困難な状況の親要因は、《子どもの行動特性を認識していない》カテゴリの〈親が子どもの行動特性に気がつかない〉〈親が子どもの行動特性を気にしない〉の2つがあがった。親は家庭内での子どもの行動をその子の行動特性としてとらえており、家庭という枠組みの中では保育困難な状況の行動は表在しにくい。例えば、工作を手順通りきちんとつくらないと気が済まないなどの、子どもの認知が良い場合、コミュニケーションの問題やこだわりは親として問題と気づきにくい。また、気づいていても自分の子どもの行動の特性を受け止め、我が子に発達障害の傾向があると認識することは容易ではない。

一方、保育士は同年代の子どもを見ており、全体を見たときの違和感など、行動の特性には目が向きやすい。集団生活の中では、コミュニケーションやこだわりは目立つ。保育士の視点は、子どもの障害の有無や発達障害の行動特性の有無にかかわらず、客観的でその子の将来をみて今後の影響を査定し、親の行動の子どもへの影響を危惧していた。それらは、《親の行動特性自体に問題がある》《親の育児行動が未熟》《自己中心的な親》の語りの中にも共通する。

保育士は、親に保育士の意図が通じない事や親の行動を否定的にとらえ、保育士の思いの中で

は、子どものために親の行動を変えて欲しいというジレンマを感じつつも、親に歩み寄り、親の育児行動を支えようとしていた。図2-1-1には、保育困難状況と対応及び保育困難状況でも対応できる内容・保育士のやりがいについてまとめたものを示した。

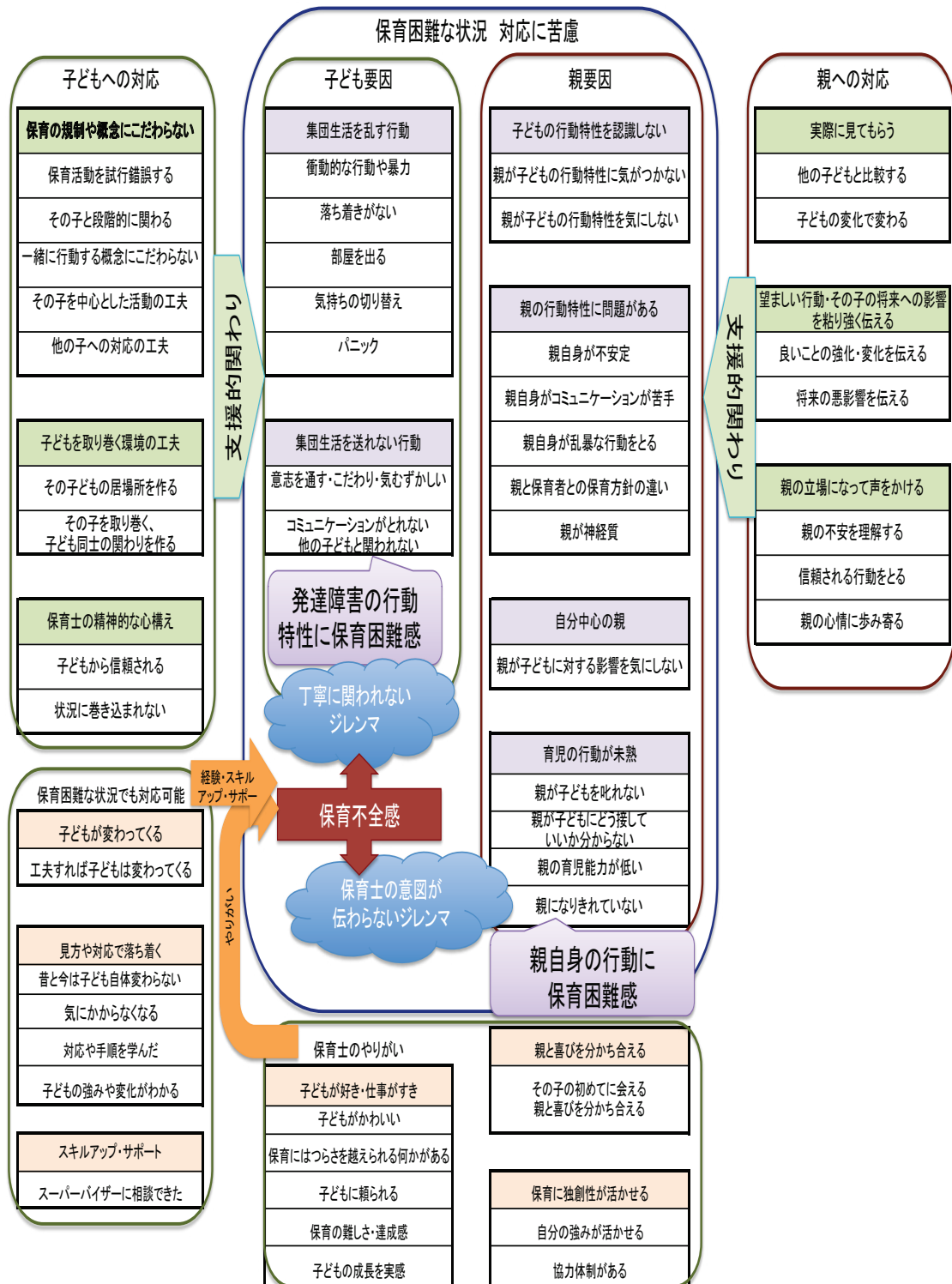


図2-1-1 保育困難状況とやりがいの概念図

保育士の語りの中で、保育困難な状況でも対応可能や子どもの行動が気にならなくなるなどの表現がなされた。そのコードから、経験や工夫で対応可能・研修などで発達障害の行動特性のある子どもの対応を学んでいることが分かった。その語りの中で「昔は性格というくくりでした」「今も昔も子どもは変わらない」「互いに慣れて気にならなくなってきた」など、子どもの個性ととらえていることが興味深かった。前田ら（2010）の調査においては保育士が発達障害児の行動特性の一部を発達上気になる行動特徴としてあげていない。幼児期には定型発達児でも発達障害の行動特性類似の行動の特徴を認めるが、幼児担当する保育士にとっては、日常的に対処出来るため、保育士はそれを特別な行動異常として気にしていないと推測した。美馬（2012）によれば、保育士が保育困難な子どもの行動が気にならなくなる状況とは、子どもや保育士が互いに慣れたととらえるより保育士の視点が変わった可能性も示唆された。視点の変化には、保育士が研修などの自助努力で保育困難な子どもの理解や対応を体得し、子どもの見方や対応が変化し、それに伴い子どもも落ち着いたとも考えられた。

一方、保育のやりがいについて垣内（2007）によれば、保育の仕事に働きがいを感じる保育者の割合は、63%である。本研究でも、すべての保育士から保育のやりがいの語りが聞かれた。保育士のやりがいのカテゴリとして《子どもが好き・仕事がすき》《子どもの成長を実感》《保育に独創性が活かせる》があがった。これらは、金城ら（2011）の「保育職のやりがい」のコアカテゴリ《子どもの成長・保育コード》《サポートの確からしさ》と合致する。保育者は、これまでできなかったことができるようになった子どもの成長に保育者としての喜びを感じ、保育からねらい通り子どもの反応があったときの達成感がやりがいにつながっていた。また、職場からのサポートや保育者の自己実現可能な環境もやりがいに寄与していた。これらから、保育職は子どもの成長という発達に寄り添う中で、仕事のやりがいを確認しやすい職種であると共に、職場のサポートや主体的な保育活動がやりがいに影響する事が示唆された。

保育士の保育困難状況の子どもに対する対応のカテゴリ《保育の規制や概念にこだわらない》《子どもを取り巻く環境の工夫》《保育士の精神的な心構え》及び親に対する対応のカテゴリ《親の立場になって声をかける》《望ましい行動・その子の将来への影響を粘り強く伝える》《実際に見てもらう》に共通する要因は、支援的な関わりであった。保育所の対象となる子どもは保育が必要な子どもであり、保育は「養護機能」が最も求められる。平成20年「保育所保育指針」の改訂（厚労省、2008）では、家庭との連携や保護者との相互理解が強調された。保育士は、元来「幼児教育」より「幼児の養護」つまり、子どもの育ちを支えることを生業としている。今回の調査協力者である保育士たちからも支援的な関わりが語られ、子どもの障害の有無や親の行動特

性にも柔軟に対応していた。このことから支援のゴールは「保育環境への適応」であり、保育困難な子どもや親の行動を個性ととらえていると考えられた。

以上より、保育士の業務上の困難感とやりがいの要因をまとめると保育士の業務上の困難感には子ども要因と親要因があり、子ども要因は発達障害児の行動特性と類似する内容であった。また、困難感の対応には子どもに対しても親に対しても支援的に関わっていた。保育士のやりがいには、子どもの成長を実感したり、自分の保育スキルを実感できる事が要因となっていた。

保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの実態調査でそれぞれ要因を導き、概念図を作成した。しかし、逐語録から抽出したカテゴリ間の関連性の妥当性の検証はできていない。そこで、第2節では逐語録から導き出したカテゴリとカテゴリ間の関連性について検討を行う。

文献

保育所保育指針。(2008), 厚生労働省告示, 厚生労働省 2008. 03. 26

<http://www.nozomi.ac.jp/hoikuen/hoikuisisin2008.pdf> (参照 2016. 10. 10)

垣内国光。(2007), 保育者の現在-専門性と職場環境, 東社協保育士会, ミネルバ書房

金城悟。(2011), 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について, -M-GTAによる分析の試み, 東京成徳短期大学紀要, 44

郷間英世他。(2008), 幼稚園・保育園における「気なる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀要, 113

古賀松香。(2011), 1歳児保育の難しさとは何か, 保育学研究, 49 (3)

斉藤愛子他。(2008) 保育所における「気になる子ども」に対する保育上の困難さについての調査研究, 小児保健研究, 68 (6)

須永進他。(2010), 保護者の保育ニーズとその対応に関する研究 I, 医療福祉研究, 6

中村仁志他。(2005), 幼稚園及び保育園における落ち着きのない子どもの困難性と対応について, 小児保健研究, 64 (1)

前田和子他。(2010) : 保育士による発達障害児の早期発見と早期支援の課題, 沖縄県立大学紀要, 11

美馬正和。(2012) : 保育士は気になる子どもをどう語るのか, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 115

第2節 保育士の感じる保育困難状況要因の妥当性の検証

第1節では、保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいをインタビューから実態調査し関連性を概念化した。しかし、概念図で示した関連の妥当性は検証されていない。そこで本節では、第1節のインタビュー内容を形態素で分け、要因の関連性を検討したい。まず、インタビュー内容から導き出した頻出語句の関連性を確認し、その後に頻出語句の要因マッピングを行い、第1節で作成した概念図との妥当性を検証する。

(1) 分析対象と分析方法

まず、インタビュー内容を形態素に分け頻出順に並べ、上位3語を重要な語句と捉えて関連語句を視覚化し、重要語句が何と関連するかを検討する。その後に、先行研究に習い出現頻度10回以上の語句を用いて布置図を作成し、重要語句の布置図上の位置関係を確認する。

第1節の保育士の感じる保育困難状況の要因・対応と保育士のやりがいの実態調査の逐語録を分析対象とし、SPSS TextAnalysis For Survey4.0Jを用い、テキストマイニングによる分析を行った。テキストマイニングでは、逐語録からのキーワード（語や語句）とタイプ（品詞や感性の種類）の抽出及び抽出したキーワードのカテゴリ化・カテゴリ間の関連性を把握するための視覚化という2つの作業を行った。

テキストマイニングを行う際に、逐語録の前処理（同じ質問に対して、複数の回答者が異なる単語を使用している場合、内容が同様であれば1つの単語にまとめる作業）を行う。しかし、本項では、回答中のわずかな言葉の差違やニュアンスが失われることを防ぐために前処理は行わず、カテゴリ化した後に各回答が割り振られたカテゴリを確認し、逐語内容と該当カテゴリの調整を行うこととした。抽出にあたっては、「感性分析」を採用した。「感性分析」とは、単語の品詞と肯定的・否定的等のニュアンスの組み合わせから言葉の表現を抽出する方法である。カテゴリ化では、主に名詞をまとめるため「言語学に基づいた手法」を用いた。この手法は、他の複合語に含まれているキーワードを特定し、それらを一つの包括的カテゴリにまとめる。さらに、正確にカテゴリ化を進めるために、「出現頻度に基づいた手法」によってカテゴリを補った。出現頻度による手法は、評価表現のあらゆるタイプのキーワードをまとめられるため、言語学による手法でカテゴリ化されなかったキーワードをまとめることができる。今回はカテゴリ数との関連で頻度5回以上を条件とした。さらに、保育士や先生、保護者と親のような同意語であるキーワードは1つのカテゴリにまとめる作業や、回答内で意味を持たない不要なカテゴリの削除作業を行い、

カテゴリの調整を行った。

視覚化では、「Web グラフ」を採用した。Web グラフでは各ノード（点）が各カテゴリを、ノードの大きさがカテゴリのレコード数を表している。また、2つのカテゴリを結ぶリンク（線）は、共有するレコード数を表している。今回は「サークルレイアウト」を用いた。サークルレイアウトは、すべてのノードが同等で、ノードの遠近は意味をもち、リンクには方向性がないものとして表される。

テキストマイニングの視覚化「Web グラフ」で、カテゴリのレコード間の強さは分かるが、逐語録で抽出したカテゴリの関連性は明らかにできない。そのため、テキストマイニングの分析後に、テキストマイニングによって得られたカテゴリ（以下、テキストと示す）と逐語録から抽出したカテゴリ（以下、逐語と示す）を用いたコレスポネンス分析を行った。コレスポネンス分析では、クロス集計表の行要素と列要素双方の度数を用いて標準化（総体比較）し、得られた座標値を平面の共通した次元上に近似プロットする（これを布置図と示す）ことで、点の間の遠近の程度をデータの類似関係として把握し、布置図の座標軸に値する次元については解釈を行わない。また、回答者毎のデータに対して直接コレスポネンス分析を適応するよりも、一旦クロス集計を行い、行要素と列要素に対して当該分析を適応する方が、評価対象（テキスト）と評価項目（逐語）がバランスよく対応するため、本調査ではカテゴリ及びサブカテゴリに対してクロス集計表を作成した上で、分析を行った。分析には spss20.0 を使用した。

しかし、コレスポネンス分析で導かれた布置図は、座標軸上のプロットであり点と点の距離しか示されないため、逐語録で抽出したカテゴリの関連性は明らかにならない。そのため、「トレンドサーチ 2015」を用いて逐語録のテキストから、品詞分析しキーワードの重要度や関連度を計算（キーワードアソシエーション分析）後、重要キーワード検索を実施した。「トレンドサーチ」の重要キーワードは単語の出現頻度とばらつきで計算する。出現頻度だけで重要度を決定しないとは、同じ文章内で同じ単語が繰り返されてもそれだけで「重要度が高い」とはみなされない。次に対象キーワードと分析キーワードの関係をクロス表で示した。対象キーワード（列）に対して分析キーワード（行）を含むテキストがいくつあるかを確認した。その後、抽出した重要キーワードを意味のあるまとまりとして、平面上にマッピングする。マッピングはキーワード（単語）間の関連性をバネ（スプリング）に見立てた物理モデルをシュミレーションすることで行う。これにより関連度の高い単語は近くに、関連度の低い単語は離れて配置され、キーワード同士の関連性が示される。このマッピングを要因マッピング（コンセプトマッピング）という。

(2) 結果

1) カテゴリ間の関連性を把握するための視覚化の結果

TextAnalysis の集計分布については、表 2-2-1 に示す。抽出されたキーワードは 788 個であり、カテゴリは 34 生成された。出現頻度の高い順に「子ども」「親」「保育士」であった。以下、出現頻度の 1 位から 3 位までの「子ども」「親-母親」「保育士」について抽出されたカテゴリと出現頻度を表 2-2-1 に示す。

表 2-2-1 テキストマイニングで生成されたカテゴリと出現頻度

	カテゴリ	頻度		カテゴリ	頻度
1	子ども	164	18	健常児	14
2	親_母	90	19	一つ	12
3	保育士_先生	52	20	仕事	12
4	私_自分	38	21	笑顔	12
5	子ども_その子	30	22	障害	12
6	子ども_子	28	23	保育士	12
7	私	28	24	あなた	10
8	言葉	22	25	おいで	10
9	親	22	26	スキンシップ	10
10	気持ち	20	27	絵	10
11	一緒	18	28	最初	10
12	園	18	29	人	10
13	クラス	16	30	全部	10
14	みんな	16	31	他	10
15	いえ	14	32	毎日	10
16	だっこ	14	33	目	10
17	一人	14	34	薬	10
				総計	788

1) 「子ども」カテゴリに対するテキストマイニングの Web グラフ結果

「子ども」に対する他のカテゴリの Web グラフを図 2-2-1 に示す。「子ども」とのカテゴリ間にリンクの濃い関係は、「子ども⇔保育士」「保育士⇔親」「保育士⇔笑顔」であった。保育士と親より保育士と子どもの方がリンクは濃く、子どもを通して親を見ており、子どもと親を一つの塊として捉えていた。

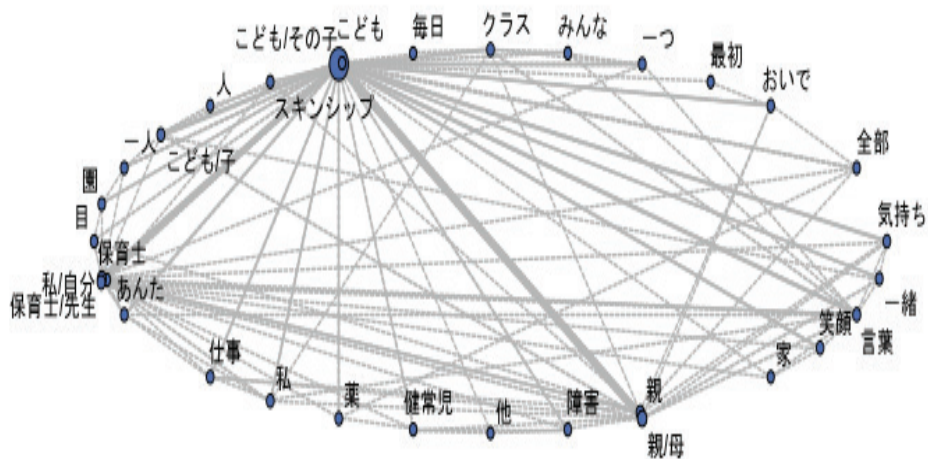


図2-2-1 子どもカテゴリと他のカテゴリのWeb グラフ結果

2) 「母親」に対するテキストマイニングの結果

次に母親の Web グラフでカテゴリ間の関連性の濃淡を検討した結果 (図2-2-2)、「母親⇔子ども」が最も濃く示された。全体の Web グラフに比して、母親から放射状に関連性を示すリンク (線) がでており、リンクは子どもから再び放射状に広がっている。これは、母親については子どもを中心に語られたことをしめす。

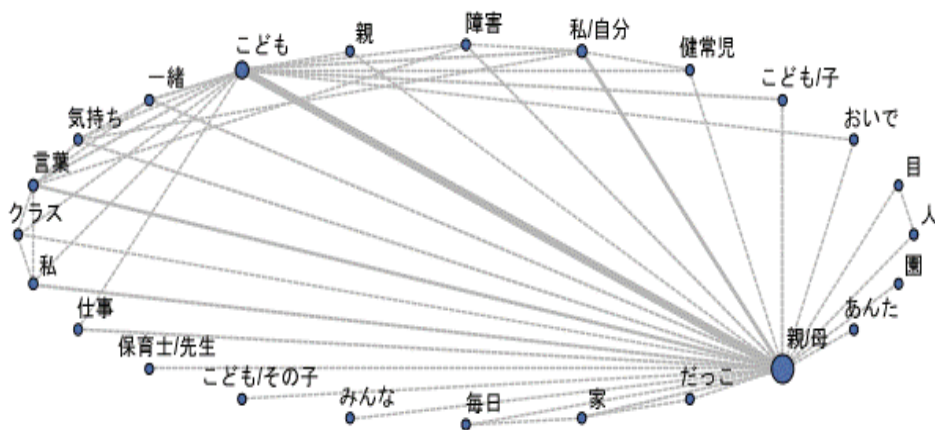


図2-2-2 母親カテゴリのWeb グラフ

3) 「保育士」に対するテキストマイニングの結果

次に保育士の Web グラフでカテゴリ間のリンクの濃淡を検討した結果 (図 2-2-3)、「保育士 ⇄ 子ども」が最も濃く示された。これは、親よりも子どものことを中心に語られた事になる。保育士カテゴリとの関連性が示されたのは、「笑顔」「だっこ」「目」「気持ち」「絵」などであった。保育上、子どもとの関係性やスキンシップとなる「笑顔」「目」「だっこ」、保育計画となる「クラス」「一人」「絵」が示された。

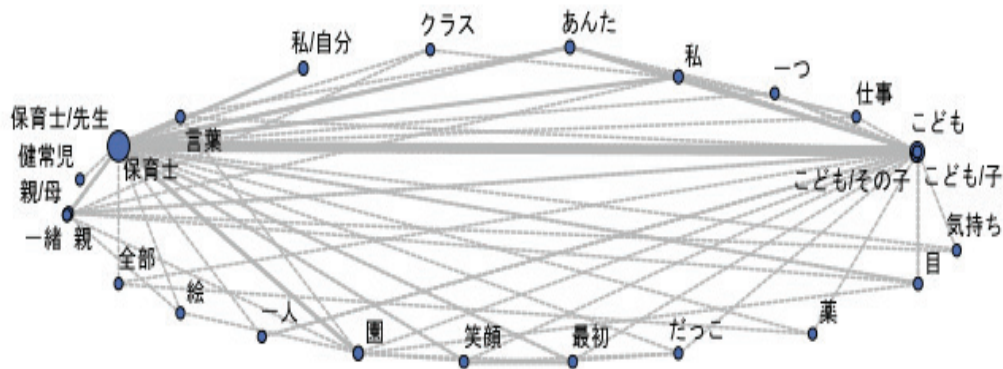


図 2-2-3 保育士カテゴリの Web グラフ

4) 逐語 (逐語から抽出したカテゴリ) とテキスト (テキストマイニングで示されたカテゴリ) の布置図化

まず、行に逐語、列にテキストマイニングのクロス集計表 (表 2-2-2) を行った。子どもとして語られた内容是对応の工夫がほとんどであった。列の「子ども」は、行の「子どもの状況」「障害は個性」「対応の工夫」とともに語られていた。「障害は個性」と認識して、「対応の工夫」をすることで「やりがい」との関連性を示している。総数 204 が集まったのは、「対応の工夫」であった。子どもの状況や保護者の内容の倍以上、「対応の工夫」が示されている。保育士は保育困難状況に対して、「対応の工夫」を中心に語っていた。

表2-2-2 逐語とテキストマイニングのクロス表

コレスポネンズ テーブル

テキストカテゴリ	逐語カテゴリ								
	子どもの状況	障害は個性	関係	サポート	対応の工夫	やりがい	保護者	こどもの印象	総計
こども	4	5	5	0	34	8	27	2	85
親_母	1	0	2	0	19	2	20	1	45
保育士_先生	0	2	2	0	15	2	5	0	26
私_自分	0	1	0	0	10	2	6	0	19
こども_その子	0	0	0	0	10	0	5	0	15
こども_子	0	3	0	0	9	0	2	0	14
私	1	0	2	0	10	0	1	0	14
親	0	0	0	0	3	1	7	1	12
言葉	2	1	1	0	2	2	3	0	11
気持ち	0	0	0	0	3	0	7	0	10
一緒	0	1	1	0	6	0	1	0	9
園	0	0	2	0	4	1	2	0	9
クラス	1	1	1	0	5	0	0	0	8
みんな	0	2	0	0	6	0	0	0	8
いえ	0	0	0	0	4	0	3	0	7
だっこ	0	1	0	0	6	0	0	0	7
一人	0	0	0	0	4	0	3	0	7
健常児	0	1	0	0	6	0	0	0	7
仕事	0	0	0	0	1	2	3	1	7
一つ	0	1	1	0	3	0	1	0	6
笑顔	0	1	0	0	0	2	3	0	6
障害	0	2	1	0	3	0	0	0	6
保育士	0	0	0	1	1	1	3	0	6
あなた	0	0	0	0	3	0	2	0	5
おいで	0	0	0	0	5	0	0	0	5
スキンシップ	0	0	0	0	4	0	1	0	5
絵	0	0	1	0	4	0	0	0	5
最初	0	1	0	0	3	0	1	0	5
人	0	0	0	0	3	0	2	0	5
全部	0	0	0	0	4	0	1	0	5
他	0	1	0	0	4	0	0	0	5
毎日	1	0	0	0	3	1	0	0	5
目	0	0	0	0	3	0	2	0	5
薬	0	0	0	0	4	0	1	0	5
総計	10	24	19	1	204	24	112	5	399

次に、行（逐語）と列（テキストマイニング）の布置図を図2-2-3と図2-2-4に示す。

逐語の8カテゴリ中、7カテゴリは近い配置となった。しかし、サポートのみ距離が他のカテゴリと違い開いている。保育士の語りの中で、サポートの位置づけは他のカテゴリとは異質であった。

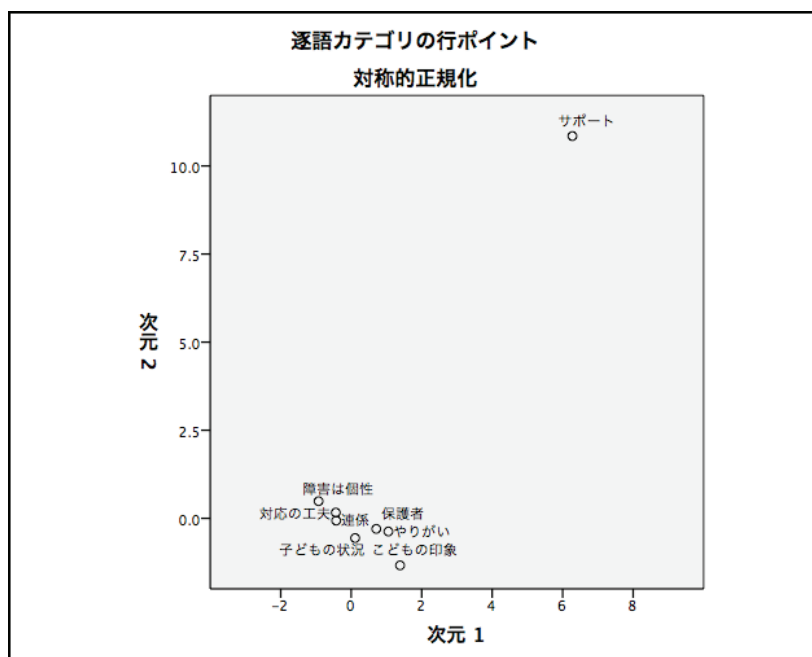


図 2-2-3 逐語の布置図

列のテキストマイニングの布置図を図 2-2-4 示す。テキスト 34 のカテゴリ中「保育士」以外は関連性が近い位置に配置された。

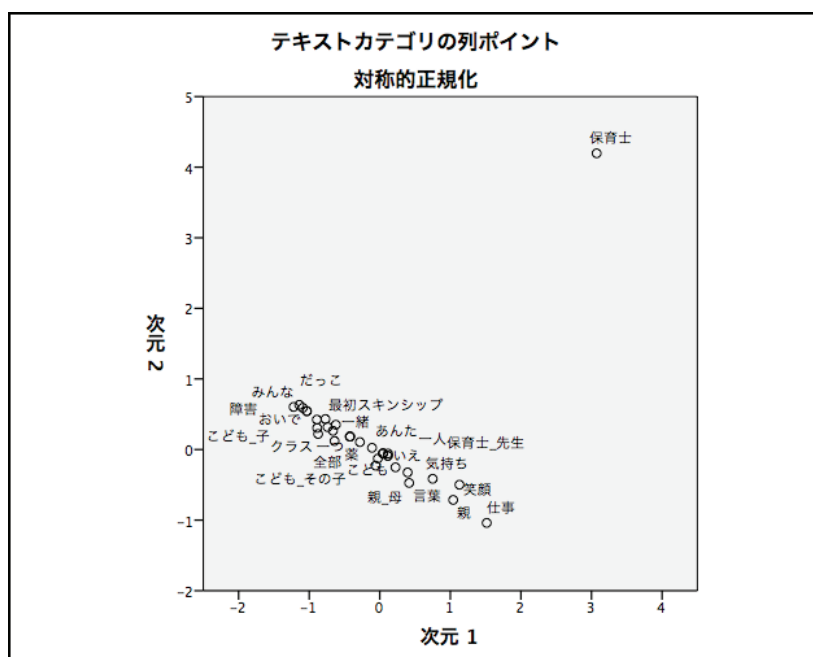


図 2-2-4 テキストマイニングの布置図

テキストカテゴリと逐語のカテゴリの布置図を図 2-2-5 に示す。行 (逐語カテゴリ) と列 (テキストカテゴリ) の布置図から、遠い関係性に見えたサポートと保育士の距離は、サポートの方が遠い関係性にある事が分かった。

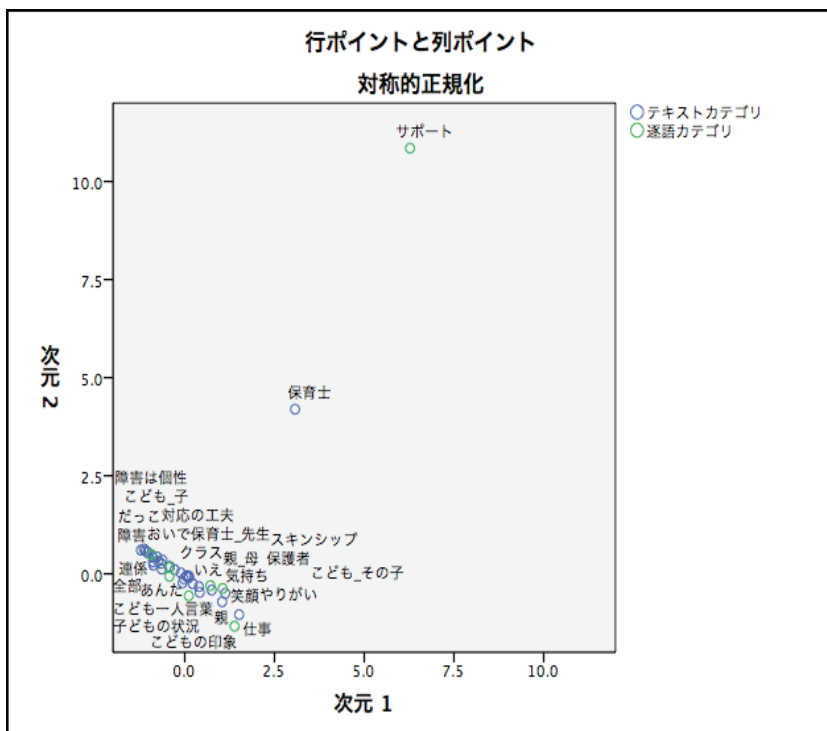


図 2-2-5 テキストカテゴリと逐語カテゴリの布置図

3) 要因マップ

2) で作成した布置図では点と点の位置関係のみ示されるので、ここでは重要語句間の関連性を確認するために、要因マップを作成する。「トレンドサーチ 2015」を用いて逐語録のテキストから、形態素解析により品詞分析し、キーワードアソシエーション分析から、重要キーワード検索を実施した。「トレンドサーチ」の重要キーワードは単語の出現頻度とばらつきで算出される。重要キーワード検索結果を表 2-2-3 に示した。これは、重要キーワード 400Word 中、先行研究にならい (栗原, 2013) 関連テキスト数と出現頻度が共に 10 以上のキーワードを 47 項目選び表にしたものである。これら 47 項目の重要キーワードは、テキストマイニングの出現頻度から導き出されたカテゴリと出現数と同様の傾向を示すが、関連テキスト数と共に重要度に反映されるため、重要キーワード順位がテキストマイニングの順位(表 2-2-1)と異なる。

次に、47 の重要キーワードの関連性である要因マップを図 2-2-6 に示す。最も、強い関連性が見られたのは、連携と関係機関であった。また、テキストマイニングの Web グラフで関連性が深く、本研究の対象である「子ども」⇔「保育士」の関連性を、関連要因マップとして図 2-2-7 に示す。

表2-2-3 重要キーワードの検索結果

順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度	順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度
1	子ども	7.623186	151	230	25	食べる	2.584359	9	15
2	する	5.928197	69	91	26	園	2.575651	22	22
3	対応の工夫	5.924061	120	120	27	行く	2.41773	21	22
4	保育士	5.498464	57	70	28	感じる	2.27384	15	16
5	言う	5.480951	61	78	29	人:名詞	2.253968	12	15
6	なる	4.628625	44	55	30	可愛い	2.228927	7	10
7	連携	4.581411	14	28	31	関係機関	2.220751	11	13
8	ある:動詞	4.452725	41	46	32	いる	2.170904	19	19
9	思う	4.342716	38	40	33	書く	2.151274	11	17
10	無い	4.027947	33	40	34	障害	2.137645	10	11
11	分かる	3.835155	32	34	35	やる	2.105223	11	15
12	来る	3.689333	34	38	36	持つ	2.097094	13	14
13	その	3.397455	28	30	37	怒る	2.071372	8	12
14	自分	3.303394	22	24	38	居る	1.998986	15	15
15	出来る	3.282264	24	29	39	そういう	1.986576	13	14
16	見る	3.264759	19	23	40	担う	1.964353	12	13
17	神経質	3.256108	19	23	41	大変	1.916852	9	13
18	いく	3.204926	26	34	42	障害は個性	1.912424	11	11
19	変化	3.114147	19	19	43	言葉	1.907844	11	13
20	やりがいい	3.086967	21	22	44	対応	1.895262	10	11
21	出る	2.915831	14	20	45	クラス	1.878651	9	11
22	気	2.878479	25	26	46	好き	1.8724	10	11
23	変わる	2.807353	17	18	47	不安定	1.766605	10	10
24	むずかしい	2.611824	15	17					

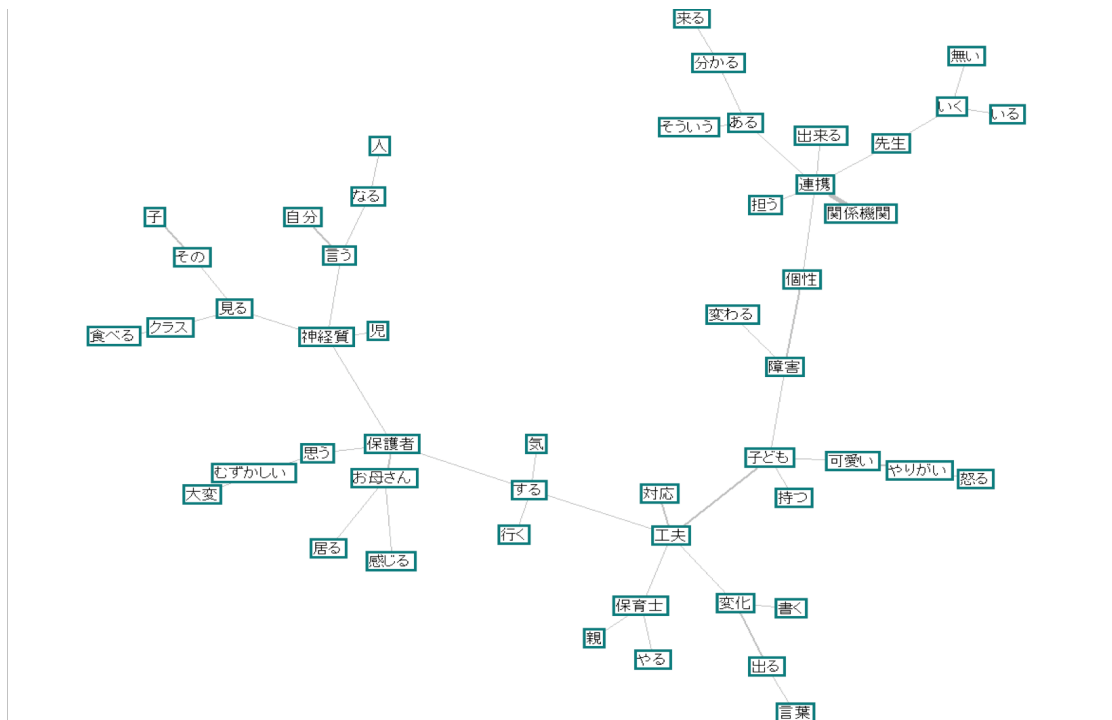


図2-2-6 重要キーワードの要因マップ

重要キーワードの要因マップにおいて、子どもと保育士の間に対応の工夫がつながり、子どもの延長線上に障害-個性-連携と近い位置関係に配置された。

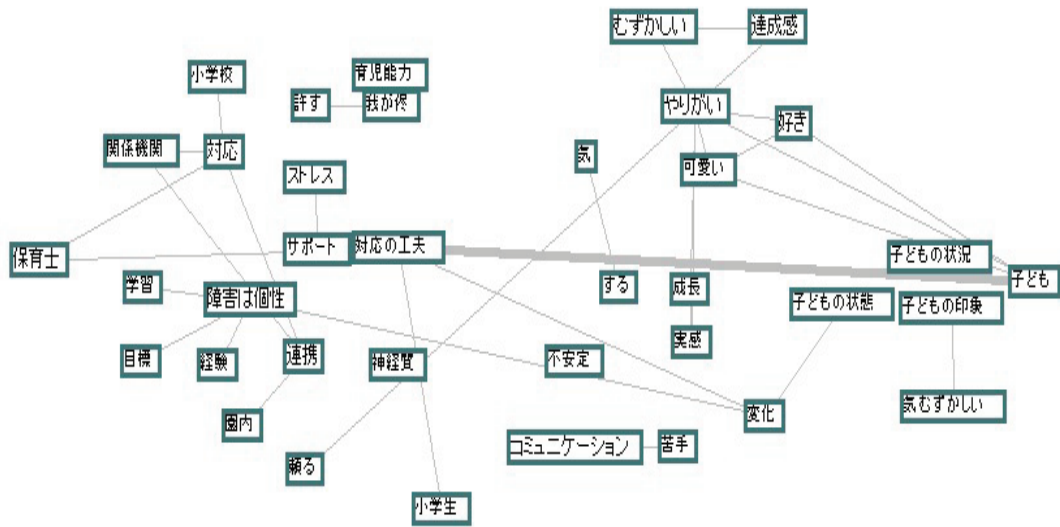


図2-2-7 子ども・保育士の関連性を中心とした要因マップ

子ども・保育士の関連性のマップでも、重要キーワードの要因マップと同様に、こどもと保育士の間に対応の工夫が示された。保育士の周辺に障害は個性が配置され、障害は個性に学習や経験・目標・連携が直接繋がっていた。子どもの状態は、障害は個性-対応の工夫-変化として示された。

(4) 考察

ここでは、重要語句の視覚化と布置図及び要因マップをそれぞれ考察し、それらが第1節で作成した概念図と差違があるかを検証する。逐語録からテキストマイニングで形態素（品詞）分解し、頻出語であった「子ども」「母親」「保育士」を中心としたWebグラフから、保育士と母親（親・保護者）とのリンクより「子ども」のリンクが強かったことより、保育士は子どもを通じて親や保護者をみていると推察された。また、保育士カテゴリとの関連性が示されたのは、「笑顔」「だっこ」「目」「気持ち」「絵」などであった。保育上、子どもとの関係性やスキンシップとなる「笑顔」「目」「だっこ」、保育計画となる「クラス」「一人」「絵」が示された。保育士は子どもと関係性や保育内容の語りが多いことが分かる。

逐語とテキストのコレスポネンス分析のクロス集計で、最も多く語られたのは「対応の工夫」であったことから、保育士は子どもとの関係性、保育内容を含む「対応の工夫」で、保育困難状況に対して支援的に関わっていることが第1節同様にテキストマイニングからも示された。

逐語のカテゴリ及びサブカテゴリとテキストの布置図から、明らかとなった保育困難状況の要因からの「サポート」の距離は、保育困難状況に対するサポートの薄さとも解釈できる。メンタ

ルヘルスに関連するストレス要因を、金城（2011）は保育業務自体のストレスの増大としたが、反面、磯野（2008）や小林（2006）村田（1996）らは、保育士本来の子どもの養護や親の育児相談より、職場の人間関係や社会的なサポートの不足が保育士のメンタルヘルスの主要因であると示した。

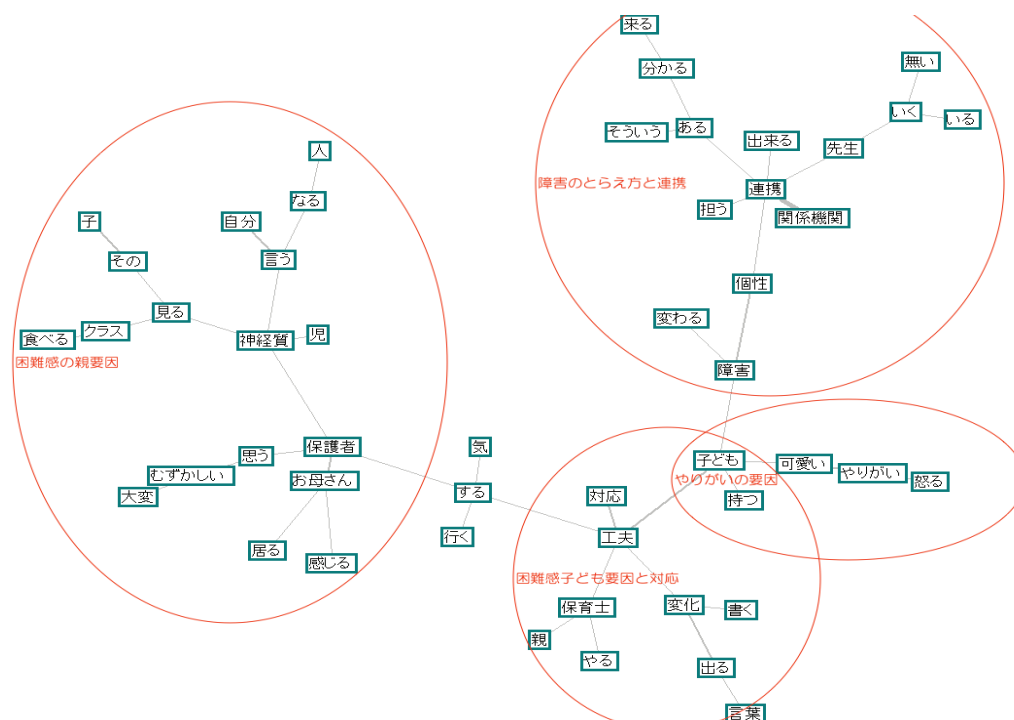


図2-2-8 重要キーワードの要因マップの関連性

要因マップは関連性を直線で、関連性の大きさを線の太さで示される。図2-2-8の要因マップにおいて、塊と思われるものを赤枠で囲むと、第1節の逐語録のカテゴリと同様に、困難感の親要因と子ども要因の塊となっていた。また、やりがいには子どもがかわいいという愛情が関連していた。保育士の業務上の困難感である逐語録の要因マップにおいても、障害のとらえ方が一つの塊として現れた。障害を個性と捉えることが関係機関との連携や「できる」「わかる」「変わる」というポジティブな動詞として現れたことは、障害のとらえ方、つまり障害の認識が保育士の困難感に影響していた。障害は個性ととらえ、関係機関の連携をとることが子どもの困難感に対して前向きな言葉を引き出したことになる。

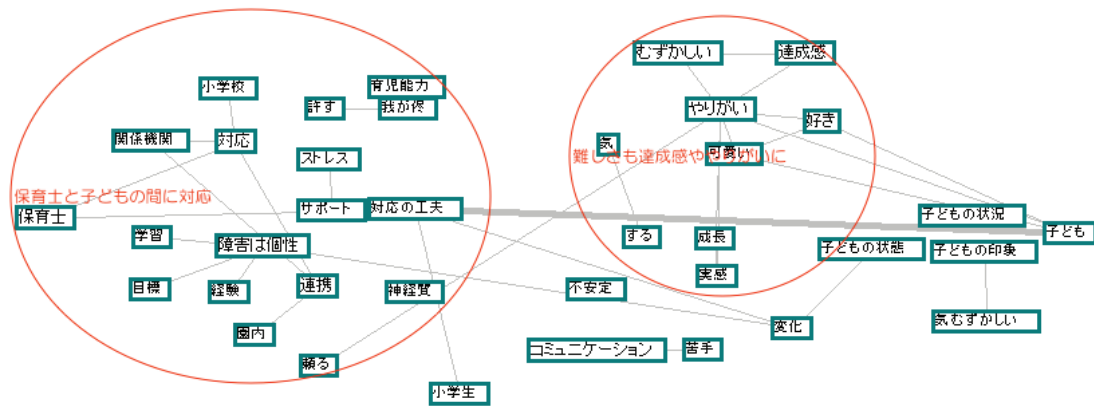


図2-2-9 保育士と子どもを中心とした要因マップの関連性

保育士と子どもを中心とした要因マップで塊と思われるものを赤枠で囲んだ（図2-2-9）。これを見ても、やりがいの塊の中でやりがいからの関連性をたどると難しさも達成感につながり、子どもの成長を実感すると共にやりがいの要因となっている。もう一方の赤枠をみると、子どもと保育士の間に対応の工夫があり、対応の工夫と子どもの関連性が強いことから、常に子どもに対して工夫しながら困難感に対応している事が示された。この要因の中でも、障害が個性と思えるようになるには、経験と保育士自身の学習、その子どもの成長においても目標をもち、園内及び関係機関、保育所の延長線上にある小学校との連携が必要である事がわかった。

以上より、第1節の保育士の業務上の困難感とやりがいの質的調査の結果、保育士の業務上の困難感には子ども要因と親要因があり、子ども要因は発達障害児の行動特性と類似する内容であった。また、困難感の対応には子どもに対しても親に対しても支援的に関わっていた。保育士のやりがいには、子どもの成長を実感したり、自分の保育スキルを実感できる事が要因となっていた。

これらの関係性について形態素に分けて、検討した。この中においても困難感には子ども要因と親要因が示され、障害を個性ととらえる支援的な認識と対応が関連性として示され、第1節の概念図は検証された。

第1章で述べた保育士を巡る保育環境、社会環境の変化と、第2章で明らかになった保育困難状況の要因と、社会的なサポートや障害の認識という複合的な要因から、保育士のメンタルヘルスを捉える必要が新たな課題となった。しかし、第1章は文献検討であり、第2章は選ばれた保育士の語りのため、この結果の一般化は難しい。そのため、第3章では、上記の要因を組みこんだ質問紙調査の結果から、さらに保育士のメンタルヘルスを検討したい。

文献

- 磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古. (2008). 小児保健研究, 67 (3), pp367-378
- 金城悟・安見克夫・中田英雄. (2011), 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について, -M- GTA による分析の試み-, 東京成徳短期大学紀要, 44, pp25-44
- 栗原サキ子・湯沢八重. (2013), A 病院における医師がおこなった患者・家族へのインフォームドコンセントの内容分析, 日本看護管理会誌, 17 (2), pp157-183
- 小林幸平・箱田琢磨・小山智典・小山明日香・栗田広. (2006). 臨床精神医学, 35 (5), pp563-569
- 村田努. (1996), 保育者のストレス状況とその要因, 白梅学園短期大学紀要, 32, pp135-147

第3章 保育士のメンタルヘルスと要因に関する量的分析

第2章では、保育に求められる役割が拡大する中で、保育困難状況の要因・対応とやりがいを質的に検討した。それらから、保育困難状況の起因となる子どもは発達障害児に類似する行動特性があり、その子どもに対して保育士は障害を個性と捉えて、支援的に対応していることが明らかになった。本章では、保育士のメンタルヘルスに関連する要因として、第1章で網羅する要因と抽出された職場要因・家庭要因・社会要因、及び第2章で明らかになった保育困難状況とその対応を要因として捉えたい。また、保育士が障害を個性と認識していたことより、保育士の障害認識も要因として加える。それらの要因が、どのように保育士のメンタルヘルスへの影響するのか、①陰性感情・②陽性感情・③陽性・陰性感情両方向から検討したい。

第1節 保育士の陰性感情と要因の検討

(1) 対象

対象者は、社会福祉協議会主催の研修会に参加したA県内の保育所勤務常勤保育士225名に自記式質問紙調査を行い、有効回答の得られた120名であった。年齢40.2才、120名全員女性であった。

(2) 方法

1) 研究デザイン

研究デザインは、相関関係型デザインである。

2) 調査期間

平成25年10月～11月

3) 調査項目

基本属性として、年齢や経験年数・職位・婚姻の有無を訊ねた。

陰性感情の尺度として先行研究で最も活用されていたバーンアウト尺度とWHO SUBI (Subjective Well-being Inventory) を採用した。「バーンアウト」尺度は「日本語版MBI」を用いた。これはバーンアウト状態を「個人的達成感の低下」(逆転項目)「情緒的消耗感」「脱人格化」の三因子、17項目で評価するものである。「いつもある(5点)～ない(1点)」までの5件法で回答をもとめた。今回点数が高いほどバーンアウト状態であるように逆転項目である「個人的達成感の低下」を調整した。評価は各因子の総計を「個人的達成感の低下」15点以上、「情緒的消耗感」19点以上、「脱人格化」15点以上を「注意すべき状態」とした(田尾, 1996)。

SUBIは、世界保健機関(WHO)が開発した心の健康自己評価質問用紙である。心の健康(陽

性感情)・心の疲労(陰性感情)の両方を測定する指標であり、11 下位尺度から心の健康度、心の疲労度を評価する。様々な研究で実証されてきたが、心の健康度と疲労度は逆相関になるものではなく、それぞれの感情が独立して動くと考えた尺度である。つまり、心の健康度が高くても心の疲労度が良好な状況ではないと考えられる。SUBI は点数が高いほど心の状態が良いことを示す。従って、心の疲労度は点数が高いほど心の疲労度が良好な状況であり、4 3 点未満は心の疲労度が高い状態である。しかし、本項では日本語版 MBI と総合して陰性感情を検討するため、陰性感情を従属変数とする重回帰分析の結果のみ、得点が高いほど心の疲労度が高くなるように偏回帰指数(β)を逆転させた。心の疲労度は、精神的なコントロール感・身体的な不健康感・社会的つながりの不足・人生に対する失望感の下位尺度で評価する。

陽性感情の項目として、ワークモチベーションと WHO SUBI (Subjective Well-being Inventory) を採用した。ワークモチベーションとして先行研究(磯野, 2008)を踏襲し、MSQ (motivation of status quo) からモチベーションチャージ(やる気)を測定する5項目(仕事の面白さ、仕事の継続性の意欲、仕事の有意義性など5項目)を選択した。回答をととてもよく「あてはまる(5点)～全くあてはまらない(1点)」までの5件法で求め、各項目の総合点で評価した。

心の健康度は、WHO SUBI (Subjective Well-being Inventory) の心の健康度を採用した。同尺度は心の健康度を、満足感・達成感・自信・至福感・近親者の支え・社会的な支え・家族との関係の下位尺度で評価する。心の健康度が良好なほど得点は高くなり、42 点以上の人は心が健康であると評価される。

保育士のストレス要因の尺度は、先行研究の中で唯一職場要因・家庭要因・社会要因を網羅して、陽性(ワークモチベーション)・陰性感情(日本語版 MBI)から検討した磯野の尺度を比較対象として採用した。磯野(磯野, 2008)の尺度では、職場要因として人間関係の良好度の低下・仕事の量的負担・仕事の質的負担の3 下位尺度1 5 項目・家庭要因として家庭の安寧度の低下(家にいて休まらない・自分が自由に使える時間が無いなど4 項目)・社会要因としてソーシャルサポートの充実(保育の仕事に関する悩みの相談に乗ってくれる相手がいるなど3 項目)で評価を行う。回答をととてもよく「あてはまる(5点)～全くあてはまらない(1点)」までの5件法で求め、各項目の総合点で評価した。以下、職場要因・家庭要因・社会要因をメンタルヘルス関連指標と示す。

障害の認識については、第2章の業務上の保育困難の要因から、身体障害や知的障害ではなく発達障害の認識を採用した。発達障害の認識については、厚生労働省の平成24年障害者総合福祉推進事業に取り入れられている概念である林の尺度を活用した。林の尺度の①発達障害に関わる際の

イメージ②発達障害に関する知識や教育についてのイメージ③発達障害の変化の可能性のイメージ④診断・告知・治療などのイメージ⑤就労・自立に向けた将来展望へのイメージをはかる内容となっている。本調査は保育士対象の質問紙であり、受けもつ子どもの障害認識であるため、①発達障害のイメージ及び⑤の就労自立に向けた内容は割愛した。②～④のそれぞれのイメージは、知識教育を中心とした「知識教育的認識」、診断治療を中心とした「診断治療的認識」、環境を調整することで、発達障害特性のある子どもが適応しやすくなるという「環境調整的認識」に分けることができる。「そう思う(4点)～そう思わない(1点)」までの4件法で求め、各認識の項目数に差があるため、各認識の1項目あたりの平均点で評価した。

表3-1-1に調査項目と尺度及び下位尺度の一覧を示す。また、発達障害認識については本調査では障害は発達障害と特定しているため、以下障害認識として表現する。

表3-1-1 調査項目と下位尺度

調査項目		下位尺度	尺度
陰性感情	バーンアウト	個人的達成感の低下	日本語版MBI
		情緒的消耗感	
		脱人格化	
	心の疲労度	精神的なコントロール感	SUBI(WHO)
		身体的な不健康感	
		社会的つながり不足	
		人生に対する失望感	
		家族との関係(疲労度)	
陽性感情	ワークモチベーション	ワークモチベーションの向上	MSQのモチベーションチャージ項目
	心の健康度	満足感	SUBI(WHO)
		達成感	
		自信	
		至福感	
		近親者の支え	
	家族との関係(健康度)		
メンタルヘルス関連指標	職場要因	人間関係の良好度の低下	磯野の尺度
		仕事の量的負担	
		仕事の質的負担	
	家庭要因	家庭の安寧度の低下	
社会要因	ソーシャルサポートの充実		
障害の認識	知識教育的認識	林の尺度	
	要因調整的認識		
	診断治療的認識		

保育困難状況に対する対応については、まずクラス担任をもっているか及び受け持ちクラスに保育困難状況の子どもがいるかを尋ねた。第2章の保育困難感の状況のインタビュー調査で保育困難状況時の支援的な援助として語られた対処法（表3-1-2）を「よくあてはまる（5点）～まったくあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

表3-1-2 保育困難状況とその対応についての質問項目

	質問項目	逐語カテゴリー
保育困難状況への対応	保育活動を試行錯誤する	保育活動の工夫
	保育が困難な子どもに段階的に関わる	
	保育が困難な子どもに個別対応する	
	クラス単位の行動など、保育の既成概念にとらわれない	
	保育が困難な子どもを中心とした活動をする	
	他の子どもへの対応を工夫する	保育環境の工夫
	保育が困難な子どもの居場所を作る	
	保育が困難な子どもを取り巻く子ども同士の関わりを作る	
	保育士自身が状況に巻き込まれないようにする	保育状況士
	スーパーバイザーに相談する	

4) 分析

分析は、各要因の記述統計後に、関連性を検討するため「日本語版 MBI 三因子（情緒的消耗感・脱人格化・個人的達成感の低下）」「心の疲労度（精神的なコントロール感・身体的な不健康感・社会的なつながり不足・人生に対する失望感・家族との関係）」それぞれを従属変数、「基本属性」「メンタルヘルス関連指標（職場要因・家庭要因・社会要因）」「障害認識（知識教育的認識・診断治療的認識・環境調節的認識）」を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。ともに有意水準は5%未満とし、統計は SPSS ver21 を使用した。

（3）結果

1) 基本的属性について

基本的属性の状況は表3-1-3に示す。経験年数10年以上が68%を占め、半数以上が既婚で主任保育士であった。

表3-1-3 基本的属性と勤務状況 n=120

項目		度数	割合(%)
経験年数	1年から3年未満	15	12.5
	3年から5年未満	8	6.7
	6年から9年未満	15	12.5
	10年以上	81	67.5
	無回答	2	1.7
婚姻	既婚	68	56.7
	未婚	50	41.7
	無回答	2	1.7
職位	管理職	1	8
	主任保育士	55	45.8
	常勤保育士	62	51.7
	非常勤保育士	2	1.7

2) メンタルヘルス関連指標

メンタルヘルス関連指標の状況を表3-1-4に示す。1項目の平均点から、これらの状況はどちらともいえない(3点)から、少しあてはまる(4点)程度であった。

表3-1-4 メンタルヘルス関連指標の結果

項目(満点)	項目数	項目の平均値	標準偏差	1項目の平均点
人間関係の良好度の低下(40)	8	25.41	3.33	3.18
仕事の量的負担(15)	3	12.18	2.32	4.06
仕事の質的負担(20)	4	15.18	2.98	3.80
家庭の安寧度の低下(15)	3	9.32	3.28	3.11
ソーシャルサポートの充実(15)	3	12.64	2.72	4.21

3) 障害の認識の状況

障害の認識の状況を表3-1-5に示す。1項目の平均から、各発達障害の認識の強さがわかる。診断治療的認識(1項目の平均点2.20)より、知識教育的認識(2.89)及び環境調整的認識(2.80)が強い状況であった。認識において有意差は認めなかった。

表3-1-5 障害の認識の状況 n=120

項目(満点)	項目数	平均値	標準偏差	1項目の平均点
知識教育的認識(20)	5	14.45	2.33	2.89
環境調整的認識(20)	5	13.98	2.79	2.80
診断治療的認識(16)	4	8.80	2.15	2.20

4) 保育困難状況に起因する子どもの存在と要因への影響

対象保育士120名のうち、クラス担任を受けもっている保育士は80名(66.7%)であった。そのうち、受け持ちクラスに保育困難に起因する子ども(以下、対象児と示す)がいると答えた保育士は51名(クラス担任を受けもっている保育士の63.8%)であった。その51名に、対象児の存在が精神的に負担であるか回答を求めた結果を表3-1-6に示す。対象児の負担感の平均は3.55(SD1.06)であり、どちらでもないから少し当てはまるレベルであった。

クラス担当や対象児の存在の有無、また対象児に起因する精神的負担感の程度が、基本的属性・メンタルヘルス関連指標や陽性感情・陰性感情の尺度に有意差を示すかを検証したが、すべての項目で有意差は認めなかった。このことは、クラス担任や対象児の存在や対象児に起因する精神的負担感の程度がメンタルヘルスに関係しないことを意味する。

表3-1-6 対象児に起因する精神的負担感の程度 n=51

精神的負担の程度	度数	パーセント	累積パーセント
全く当てはまらない	3	5.9	5.9
あまり当てはまらない	4	7.8	13.7
どちらでもない	12	23.5	37.3
少し当てはまる	26	51.0	88.2
よく当てはまる	6	11.8	100.0
合計	51	100.0	

5) 保育困難状況時の対応

全員の保育士に保育困難時の支援的な対応について、5件法で回答を求めた。各対応については一部を除いて、どちらともいえない(3点)～あてはまる(5点)に分布した(表3-1-7)。

「その子を中心とした対応」と「スーパーバイズ」以外は、対応としてややあてはまると答えた。

表3-1-7 保育困難時の対応の結果 n=120

項目	平均値	標準偏差
試行錯誤	4.32	0.81
段階的に関わる	4.15	0.81
個別対応	4.44	0.71
既成概念にとらわれない	3.51	0.89
その子を中心とした活動	2.73	0.94
他の子への工夫	3.90	0.64
その子の居場所	4.01	0.81
子ども同士の関わり	3.89	0.80
状況に巻き込まれない	3.28	1.06
スーパーバイズ	2.70	1.34

6) 陰性感情の状況

a) 日本語版 MBI

「日本語版 MBI」三因子の平均点は、「個人的達成感の低下」12.4、「情緒的消耗感」13.9、「脱人格化」10.0であった。注意すべき状態にある保育士の割合は「個人的達成感の低下」は29.8%、「情緒的消耗感」では16.7%、「脱人格化」は10.7%であった(表3-1-8)。カットオフラインについては、情緒的消耗感は19点、個人的達成感の低下及び脱人格化は15点となっている。

表3-1-8 バーンアウト3要因の得点と安全群・要注意群の割合 n=120

	平均値	標準偏差	安全群の割合(%)	要注意群の割合(%)
個人的達成感の低下	12.4	4.7	70.2	29.8
情緒的消耗感	13.9	4.3	83.3	16.7
脱人格化	10.1	3.4	89.3	10.7

b) 心の疲労度

心の疲労度の平均得点は47.1点であり、43点未満の要注意群25.0%であった。

各下位尺度の得点を表3-1-9に示す。

表3-1-9 SUBI 下位尺度の結果 n=120

	平均値	標準偏差
精神的なコントロール	15.02	3.11
身体的な不健康感	14.28	2.52
社会的な役割不足	7.17	1.51
人生に対する失望感	7.48	1.49
家族との関係疲労度	3.93	1.69

c) 日本語版 MBI とメンタルヘルス関連指標の重回帰分析

「日本語版 MBI」の三因子および「SUBI の心の疲労度」のそれぞれを従属変数とし、メンタルヘルス関連指標を独立変数にした重回帰分析をおこなった(表3-1-10)。日本語版 MBI と SUBI 心の疲労度の両陰性感情に対して、ソーシャルサポートの充実と経験年数は負の関連性を示した。それ以外の要因はすべて正の関連性を示した。表中の網掛けは、各下位尺度に対して最も関連性の高い要因を示している。陰性感情の下位尺度において、関連性の高い要因は「家庭の安寧度の低下」と「ソーシャルサポートの充実」であった。

表3-1-10 陰性感情に対する重回帰分析の結果(ステップワイズ法) ** p<0.01 * p<0.05

	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済みR ²
	経験年数	職位	人間関係の良好度の低下	仕事の量的負担	仕事の質的負担	家庭の安寧度の低下	未婚	ソーシャルサポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
日本語版 MBI	個人的達成感の低下							-0.437**	-0.169*			.213
	情緒的消耗感			.259**	.179*	.367**	.238**					.438
	脱人格化				.191*	.201*	.228*	-0.257**				.181
心の疲労(総合点)			.253**			.240**	.269*	-0.313**				.363
心の疲労度 下位尺度	精神的コントロール感					.263**		-0.346**				.224
	身体的健康感		.321**			.281**						.176
	社会的つながりの不足	-0.451**						-0.236**				.242
	人生への失望感		.180*			.224**	.241**	-0.331**				.214

「疲労度」は本来、低得点ほど疲労度が高いことを示すが、表中は高得点ほど疲労度難く開くように逆転して表した。

(4) 考察

本調査で「日本語版 MBI 三因子」の注意すべき状態の保育士の割合は「個人的達成感の低下」29.8%「情緒的消耗感」16.7%「脱人格化」10.7%であった。小林(2006)の調査結果「個人的達成感の低下」17.6%、「情緒的消耗感」21.6%、「脱人格化」11.2%に比較し、本研究では「個人的達成感の低下」について、注意すべき状態の保育士の割合が倍増した。これにより、情緒的な消耗感や脱人格化は先行研究に比して改善傾向にあるにも関わらず、個人的な達成感は得られにくい状況にあると推察された。

個人的達成感の低下とメンタルヘルス関連指標の関連では、「ソーシャルサポートの充実」のみ負の関連を示した。小林(2006)の調査でも個人的達成感と上司・同僚・友人・パートナーのサポートは相関を示している。このことから保育士の達成感は、職場内外からのサポートに影響され、周りからの十分なサポートや理解が得られないと個人的な達成感を感じにくいと推察された。

情緒的消耗感とメンタルヘルス関連指標の関連では、「家庭の安寧度の低下」「未婚」と「仕事の量的負担」が正に、「経験年数」負に相関していた。情緒的消耗感は、バーンアウトの初段階とされており、この段階で食い止めることがバーンアウト最終的な状態である脱人格化への移行を防ぐとされている(田尾, 1996)。保育士の情緒的な消耗感を軽減させるためには、家庭での安らぎと仕事量の調整が重要である。

脱人格化の注意すべき状態の割合は、10.7%でバーンアウト三要因の中で最も低い。このことから、保育士が子どもと接すること自体を敬遠することは少ないととらえた。脱人格化とメンタルヘルス関連指標では、正の関連として「未婚」「家庭の安寧度の低下」、「仕事の質的負担」、負の関連として「ソーシャルサポートの充実」を示した。家庭での安らぎが得られず、仕事の荷重が増し、職場内外のサポートが欠如すると、クライアントである子どもの愛情に影響すると考えられた。

今回、「家庭の安寧度の低下」はバーンアウトの「情緒的消耗感」「脱人格化」には正の関連、「ソーシャルサポートの充実」が「個人的達成感の低下」「脱人格化」に負の相関を示した。メンタルヘルスに関連していた。保育士のメンタルヘルスと職場要因やソーシャルサポートの関連性を明らかにした調査(小林, 2006、垣内, 2007)は多いが、家庭要因との関連性を示した調査は少ない(磯野, 2008)。今後は、保育士のメンタルヘルスと家庭要因の関連性の検討が課題となった。

SUBI の心の疲労度平均得点は 47.1 点であり、上村の調査得点 50.8 点や一般女性平均 51.2 点

に比して心の疲労度は不良なっている。保育士の心の疲労度得点が 43 点未満の要注意群の割合は 25.0%であり、上村の調査の要注意群の割合 14.6%や一般女性の要注意群の割合 4.37%に比し、先行研究の約 1.5 倍一般女性の約 5 倍と大幅に増加している。

心の疲労度とメンタルヘルス関連指標との重回帰分析の結果では、未婚・家庭の安寧度の低下・人間関係の良好度の低下とソーシャルサポートの充実が関連していた。磯野（2008）は園内の人間関係・家庭要因・ソーシャルサポートが保育士のバーンアウトの要因であると述べている。本研究の対象者が、平均年齢 40 歳代の中堅の保育士であることも誘因であろうが、心の疲労に家庭要因が最も関連しているとは意味深い。園の上司や同僚からの支えがメンタルヘルスの維持に必須であることが示された。このことは、人間関係の良好度の低下が心の疲労度に影響していることから言える。

以上より、陰性感情のバーンアウトの危険群の割合の比較では、情緒的消耗感と脱人格化は先行研究に比して良好となっているが、個人的な達成感の低下は先行研究に比して倍増していた。SUBI の心の疲労度では得点が 47.1 点、カットオフライン以下の要注意群は 23.7%で、先行研究に比して不良となっている。保育士の心の疲労度は悪化傾向にあることが示された。

第2節 保育士の陽性感情と要因の検討

前節では保育士のメンタルヘルスの先行研究において主軸であった陰性感情と要因について述べたが、本節では、陽性感情と要因について、ワークモチベーションと SUBI (Subjective Well-being Inventory) の心の健康度から検討を重ねる。

(1) ワークモチベーション

ワークモチベーションの結果を表3-2-1に示す。1/4の保育士がワークモチベーションの得点が満点であり、今回の調査対象はワークモチベーションが高い集団であることが分かった。

表3-2-1 ワークモチベーションの結果 n=120

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	満点の占める割合
ワークモチベーション	21.7	2.9	12.0	25.0	25.0%

(2) 心の健康度

心の健康度の結果を表3-2-2に示す。平均点 38.6 点で 31 点未満の要注意群にある人は 11.7%であった。SUBI 心の健康度の下位尺度の結果を表3-2-3に示す。

表3-2-2 心の健康度の結果 n=120

	得点平均値	標準偏差	危険群の割合
心の健康度	38.58	6.22	11.7%

表3-2-3 SUBI 下位尺度の結果 n=120

	平均値	標準偏差
満足感	6.10	1.49
達成感	5.93	1.14
自信	5.52	1.37
至福感	5.64	1.31
近親者の支え	7.12	1.58
社会的な支え	6.92	1.76
家族の関係総合	5.29	2.65

(3) 心の疲労度とメンタルヘルス関連指標の重回帰分析

「ワークモチベーション」「心の健康度」の下位尺度それぞれを従属変数に、メンタルヘルス関連指標を独立変数とした重回帰分析の結果を表3-2-4に示す。心の健康度においても、ソーシャルサポートの充実と経験年数は正の関連性を示し、他の要因は負の関連性を示した。表中の網掛けは、各下位尺度（横軸）に対して最も関連性の高い要因を示している。陽性感情においても、関連性の高い要因は「家庭の安寧度の低下」と「ソーシャルサポートの充実」であった。

表3-2-4 陽性感情に対する重回帰分析の結果（ステップワイズ法） ** p<0.01 * p<0.05

	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済みR ²
	経験年数	職位	人間関係の良好度の低下	仕事の量的負担	仕事の質的負担	家庭の安寧度の低下	未婚	ソーシャルサポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
ワークモチベーション	.223*					-225*		.223*				.155
心の健康度(総合点)	.192*					-200*		.369**				.219
心の健康度下位尺度	満足感					-260**		.312**				.215
	達成感					-237**				.182*		.115
	自信					-231**		.305**		.198*		.208
	至福感	.357**						.361**				.178
	近親者の支え							.249**				.066
	社会的な支え							.295**				.091
	家族との関係性							-586**				.494

(4) 考察

陽性感情である「ワークモチベーションの向上」は、磯野（磯野, 2008）の調査研究のワークモチベーションの平均得点 21.3、最高点の割合 21.6%に比し、本研究でもワークモチベーションの平均得点 21.7 点、最高点の割合が 25%と同様に良好な状況であった。多くの保育士は、やる気があり保育という仕事に意義や意欲を感じていた。

ワークモチベーションの向上とメンタルヘルス関連指標の検討では、「家庭の安寧度の低下」と「ソーシャルサポートの充実」に負の関連を示した。ワークモチベーションの向上には、職場要因ではなく、ソーシャルサポートの充実や家庭要因が関連していた。ワークモチベーションが

高い中間層の保育士の集団でさえ、家庭の安寧度やソーシャルサポートが不足するとワークモチベーションの維持が難しいと推察された。

一方、心の健康度の平均得点 38.6 点で、要注意群の割合は 11.7%であった。上村 (2012) の調査の平均得点 39.0 点とほぼ同点数で有り、要注意群の割合は上村 (2012) の 12.2%より減少した。また、一般女性の心の健康度平均得点 34.7 点、要注意群の割合 13.3%に比して、今回の保育士は心の健康度が高いことを示している。上村 (2012) の結果も加味すると保育士の心の健康度は一般女性より高いと考えられる。垣内 (2007) は、63%の保育士は仕事にやりがいを感じていると述べており、保育士は仕事や生活に対して前向きな姿勢を示しているにとらえられた。

心の健康度とメンタルヘルス関連指標との重回帰分析の結果では、ソーシャルサポートと経験年数が正に関連していた。磯野 (2008) の調査でも、ワークモチベーションはソーシャルサポートと強い相関 ($\alpha 0.80$) を示している。長年培われた保育スキルや園内外からのサポートは仕事に対する意欲を押し上げるとともに保育士の心の健康度に寄与すると推察された。

心の健康度には、仕事の量的・質的負担より、家庭要因とソーシャルサポートが寄与していたことは、業務上の負担感より、保育業務のやりがいや周りからの支えがないと中堅の保育士であつて、心の健康度の維持が難しいことを伺わせた。

以上より、陽性感情は先行研究や一般女性に比して良好であるが、陽性感情とメンタルヘルス関連指標との重回帰分析では、業務上の負担感より婚姻を含む家庭要因やソーシャルサポート・経験年数が関連していた。

第3節 保育士の陽性・陰性両感情と要因の検討

本節では、陽性感情と要因について、SUBI (Subjective Well-being Inventory) の心の健康度・及び心の疲労度から検討を重ねる。

図3-3-1・3-3-2に心の疲労度と心の健康度の得点分布の比較グラフを示す。カットオフラインを黒線で示した。このグラフにおいて、右に傾くほど心の健康度及び心の疲労度が良好な状態であることを示す。心の疲労度は、先行研究及び一般女性に比して不良であるが、心の健康度は一般女性と同様な曲線を描いていた。保育士と一般女性の比較を心の健康度の下位尺度(図3-3-3～3-3-9)と心の疲労度の下位尺度を図3-3-10～3-3-13に示した。

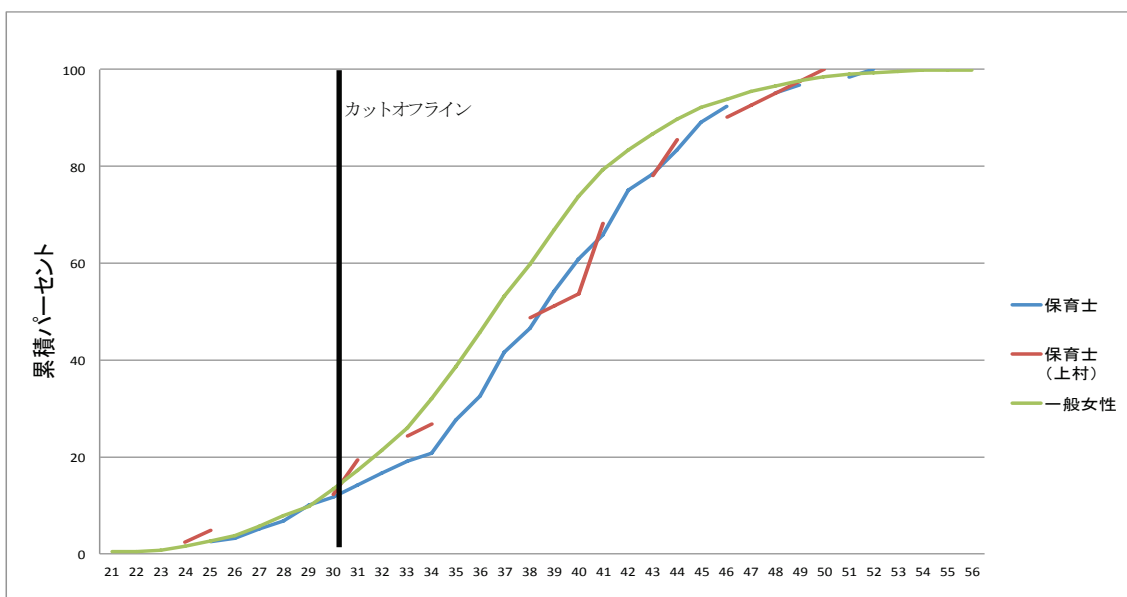


図3-3-1 心の健康度と得点比較

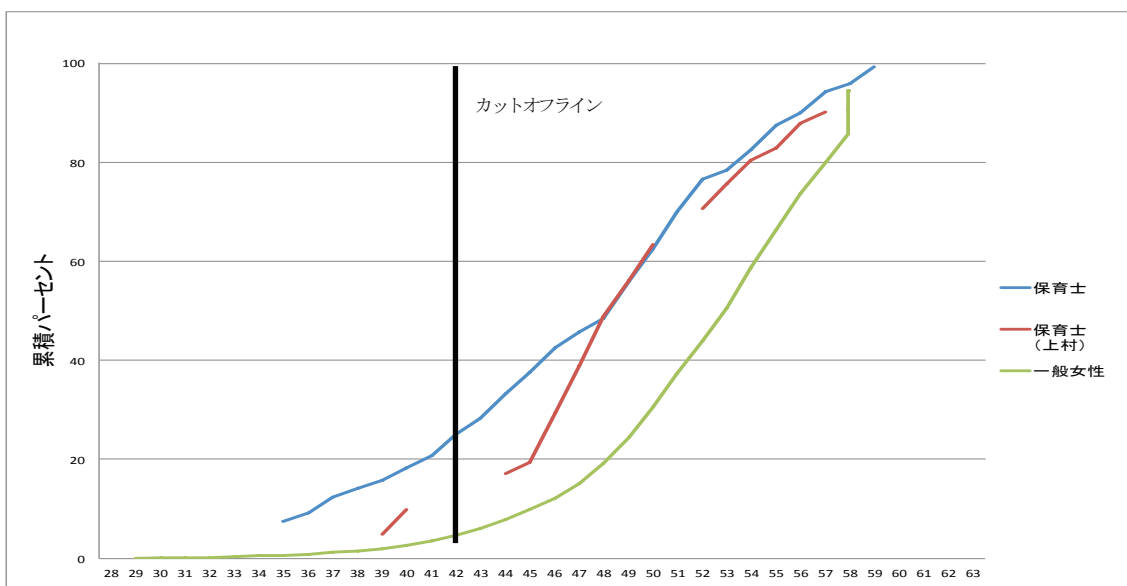
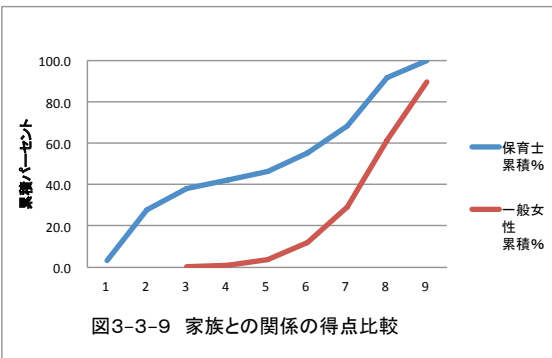
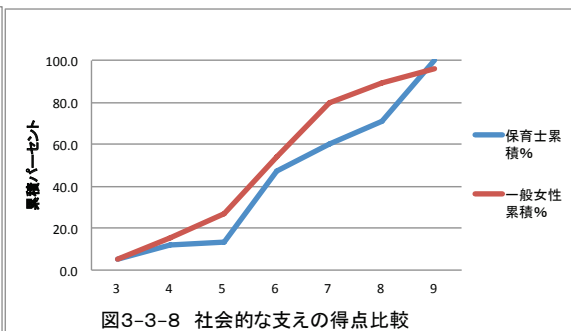
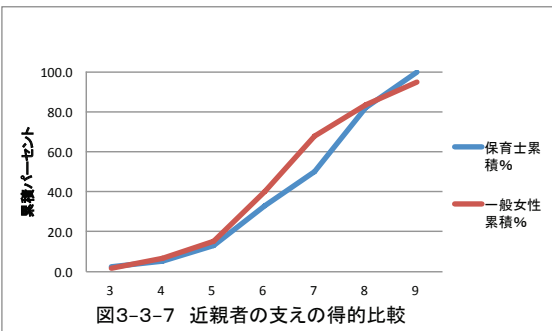
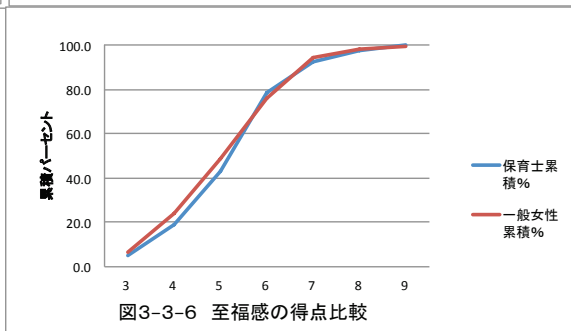
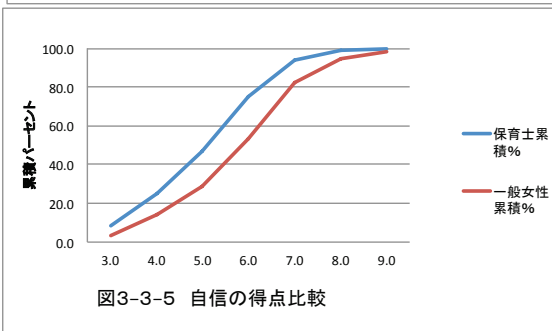
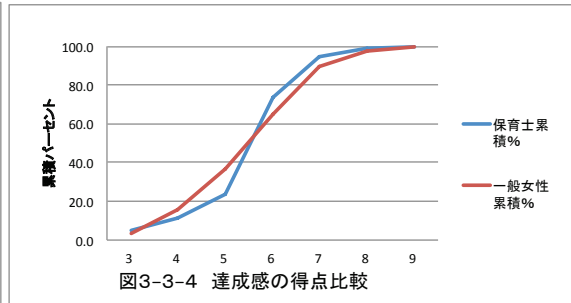
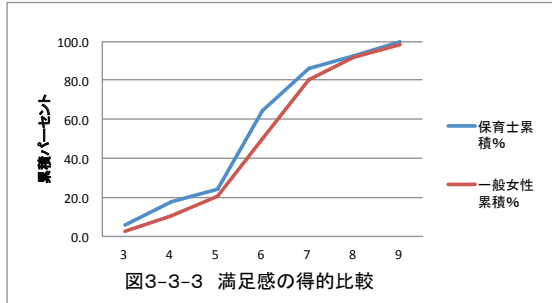
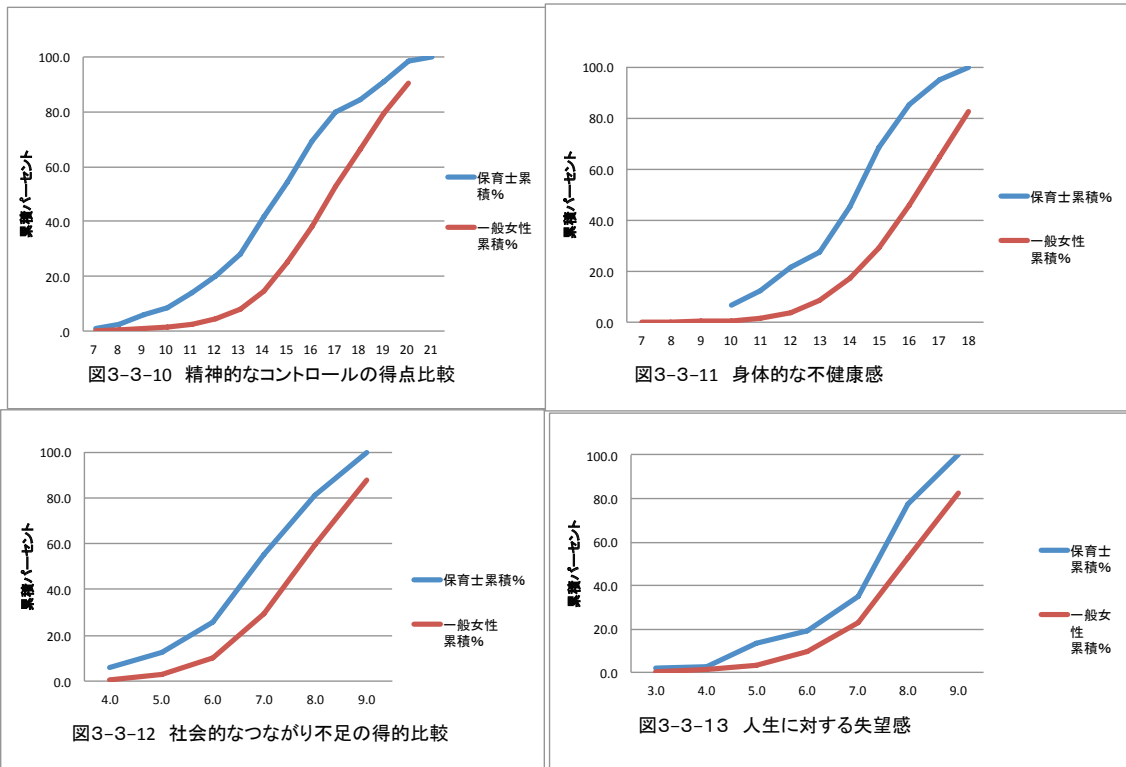


図3-3-2 心の疲労度と得点比較

下位尺度においても曲線が右に移行するほど、心の健康度が良好である事を示している。保育士が一般女性に比して心の健康度が良好であった下位尺度は「近親者の支え」と「社会的な支え」であった。



心の疲労度の下位尺度においても曲線が右に移行するほど、心の疲労の度合いが良い事を示している。保育士が一般女性に比して心の疲労度が不良であった下位尺度は、「精神的なコントロール」「身体的な不健康感」「社会的なつながり不足」「人生に対する失望感」であった。一般女性の点数と最も乖離した下位尺度は「家族との関係」であった。



(3) 心の疲労度及び心の健康度とメンタルヘルス関連指標との関連性

SUBI の「心の疲労度」「心の健康度」の下位尺度それぞれを従属変数に、メンタルヘルス関連指標を独立変数とした重回帰分析の結果を表 3-3-14 に示す。心の疲労度と健康度の双方に、ソーシャルサポートの充実と経験年数は正の関連性を示し、他の要因は負の関連性を示した。表中の網掛けは、各下位尺度に対して最も関連性の高い要因を示している。陽性・陰性両感情の下位尺度においても、関連性の高い要因は「家庭の安寧度の低下」と「ソーシャルサポートの充実」であった。また、保育士の業務上の負担感となる仕事の量的負担及び質的負担は、どの従属変数とも関連性は示されなかった。

表3-3-14 心の疲労度・健康度の重回帰分析の結果（ステップワイズ法） ** p<0.01 ** p<0.05

独立変数 従属変数	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済み R ²
	経験年数	職位	人間関係の良 好度の低下	仕事の 量的負担	仕事の 質的負担	家庭の安寧 度の低下	未婚	ソーシャルサ ポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
心の疲労度			-.253**			-.240**	-.269*	.313**				.363
心の疲労度 下位尺度	精神的 コントロール感					-.263**		.346**				.223
	身体的健康感		-.321**			-.281**						.176
	社会的つながり の不足	.451**						.236**				.242
	人生への失望感		-.180**			-.224**	-.241**	.331**				.214
心の健康度	.192*					-.200*		.369**				.219
心の健康度 下位尺度	満足感					-.260**		.312**				.215
	達成感					-.237**				.182*		.115
	自信					-.231**		.305**		.198*		.208
	至福感	.357**						.361**				.178
	近親者の支え						.249**					.066
	社会的な支え							.295**				.091
	家族との関係性						-.586**					.494

(4) 考察

SUBI の心の疲労度の得点平均 47.11 は、上村 (2012) の先行研究 50.8 及び一般女性 51.2 に比して不良であった。カットオフライン以下の危険群の割合は 25% で上村 (2012) の調査結果 14.6% や一般女性の危険群の割合 4.7% に比して疲労度が不良であることが示された。一般女性との乖離が一番大きい下位尺度は「家族との関係」であった。このことは、心の疲労度・心の健康度とメンタルヘルス関連指標の重回帰分析で、家族との関係に「未婚であること」が最も強く関連し

ていたことにも通じる。「近親者の支え」が一般女性より良好であるにもかかわらず、「家族との関係」や「未婚であること」が心の疲労度に関連するのは、配偶者がいることがストレス緩和要因であると考えられた。村田（1996）は配偶者がいる保育士ほどストレス得点が低く、身近な自分を信じてくれる支援者の重要性を示しており、心の疲労度の下位尺度4項目中、3項目に「家庭の安寧度の低下」が関連していたことでも示される。

心の健康度は得点平均 38.58 であり、上村（2012）の先行研究の得点平均 39.0 と同様となっている。これは、一般女性の得点平均 34.7 より高得点であり、保育士の心の健康度は良好であることが示された。心の健康度に最も影響を与えた要因は「ソーシャルサポートの充実」であり、次に「家庭の安寧度の低下」と「経験年数」であった。心の健康度の下位尺度の一般女性との得点比較で、「近親者の支え」と「社会的な支え」が高得点であったことと一致する。経験年数が、心の健康度に有意に関連し、下位尺度の「社会的なつながり不足」「至福感」と関連していた。村田（1996）の調査で、年齢が上がるにしたがい周囲からの支持を感じており、上村（2010）は新人保育士と比較してベテラン保育士の方が、心の健康度下位尺度「達成感」と「至福感」が有意に高いことを明らかにしている。経験を積むことで、保育スキルが向上し、「至福感」や周囲からの支持を感じることは推察できるが、長年保育士を継続できたことは、洗練された人材であることも予想される。安易に、経験年数が心の健康度に寄与すると考えるのは注意を要する。また、仕事の質的な負担はどの従属変数とも関連性が示されなかったが、保育士の障害認識である「環境調整」という支持的な関わりを示す要因が「達成感」と「自信」に関連していた。このことは、知識を得て教育を行うことや診断を受けて治療を行う認識より、環境を整え支援的な援助する障害認識が、保育の自信や達成感に貢献していることを示す。

心の疲労度・心の健康度とメンタルヘルス関連指標との重回帰分析では、「ソーシャルサポートの充実」が最も関連が強く示された。反面、直接的な業務の負担である「仕事の量的負担」と「仕事の質的負担」がどの項目とも関連性が示されなかった。業務上の負担より、人間関係の負担や家族要因・社会的なサポートが重要であることが示唆された。このことは業務上の質的負担と予測した対象児の存在や対象児に起因する負担感の程度もメンタルヘルスに関連しなかったことでも示された。

また、保育士の心の健康度が高く、また心の疲労度も不良である状況を考えてとき、大野ら（1996）は陰性感情が若干強く感じるようなストレス環境でも、陽性感情を感じることであれば充実した日常生活を送れる可能性を示唆している。大野ら（1996）は陰性感情が強くない場合は、陽性感情が独立して動くこと示した。上村（2010）の調査でも保育士の心の健康度は高く、

心の疲労度も不良であったことから、保育士特有の状況ではないかと捉える。

以上より、保育士の心の健康度は一般女性や先行研究に比して高く良好であるが、心の疲労度は一般女性や先行研究に比して不良であり、これら心の疲労度や健康度には、業務上の負担より人間関係の良好度や家庭安寧度やソーシャルサポートが関連することが明らかになった。

次章では、保育士の心の疲労度や心の健康度の影響要因について、第1章の保育士を巡る環境の変化、第2章の保育士の感じる保育困難状況の質的検討、第3章の保育士のメンタルヘルスと要因の量的検討をまとめて、保育士のメンタルヘルスに関連する要因について総合考察を行う。

文献

田尾雅夫. (1996). バーンアウトの理論と実際. 誠信書房.

磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古 (2008). 小児保健研究, 67 (3), pp367-378

林隆. (2014). 厚生労働省平成24年度 障害者総合福祉推進事業「医療や福祉分野の発達障害支援者の人材育成体制の調査」. pp111-116

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougai Shahukushi/cyousajigyou/sougoufukushi/dl/h24_seikabutsu-21a.pdf (参照 2016. 10. 10)

小林幸平, 箱田琢磨, 小山智典, 小山明日香, 栗田広. (2006). 臨床精神医学, 35 (5), pp563-569

垣内国光. (2007). 保育者の現在-専門性と職場要因. 東社協保育士会, ミネルヴァ書房, 2007

上村眞生. (2012). 保育士のメンタルヘルスに関する研究-保育士の経験年数に着目して-, 保育学研究, 50 (1), pp53-60

村田努. (1996). 保育者のストレス状況とその要因, 白梅学園短期大学紀要, 32, pp135-147

大野裕・吉村公雄・山内啓太・百瀬和雄他. (1996). 心理的健康感と心理的不健康感の関連性について, ストレス科学, 10 (3), pp273-278

第4章 保育士のメンタルヘルスに関連する要因の総合考察

本章では、第1章の保育士の現状から、第2章の保育士の業務上の困難感等の検討、第3章の保育士のメンタルヘルスの陽性・陰性感情と各要因の検討をふまえて、総合的な考察を行う。まず、メンタルヘルスの各要因の総合考察をまとめる。

第1節 保育士のメンタルヘルスの各要因の総合考察

本節では、保育士のメンタルヘルス陽性・陰性両感情に関連する要因として、①社会要因としてソーシャルサポート、②家庭要因、③職場要因、④個人要因である経験年数および障害認識を検討していきたい。

第1項 メンタルヘルスと社会・家庭・職場要因の関連性の検討

(1) メンタルヘルスと社会要因の関連性の検討

表4-1-1aは、縦軸に従属変数としてSUBIの心の疲労度、心の健康度と各下位尺度、横軸に独立変数として基本的属性から障害認識までの重回帰分析の結果である。表4-1-1aにおいてメンタルヘルスの各感情に、要因として最も多く示されたのは、社会要因であるソーシャルサポートの充実であった。これは、保育士のメンタルヘルスの向上には、社会的なサポートが最も有効であることを示している。このことは、第2章の保育困難感の要因マップ注1)（再掲図2-2-8）の「障害のとらえ方と連携」の囲みで、関係機関との連携を取るとは、肯定的な動詞（出来る・分かる・変わる）と繋がっていることでも合致する。つまり、社会的サポートを受けることは、保育士の保育困難感の軽減に寄与し、メンタルヘルスの向上に貢献する。

しかし、第2章第2項で示した逐語録のカテゴリとテキストマイニングから導き出したカテゴリの布置図注2)（再掲図2-2-5）では、サポートは最も遠い座標軸にあった。最も、効果的と考えられるソーシャルサポートが最も遠い位置にあり、サポートが有効に機能していないことを示し、ソーシャルサポートの充実の必要性が示唆された。

ソーシャルサポートの充実に対しては、保育士にとって同一の保育所の保育士の支援が最も効果的であること(上村,2008)、職場内でチームとしての共通意識を持つことで保護者と子どもとの信頼関係が築かれる知見(石川,2010)をふまえれば、同一の相互補助的なサポートの構築が望まれる。

注1) 要因マップとは、逐語録のテキストから、品詞分析しキーワードの重要度や関連度を計算後、重要キーワード検索を実施し、抽出した重要キーワードを意味のあるまとまりとして、平面上に

マッピングした図である。要因マップの関連性において、意味のあるまとまりを赤枠で囲み、赤字で意味名を示した。

注2) 布置図とは、コレスポンデンス分析で得られた座標値を平面の共通した次元上に近似プロットした図である。テキストマイニングによって得られたカテゴリと逐語録から抽出したカテゴリを用いたコレスポンデンス分析を実施し布置図とした。布置図は、点の間の遠近の程度をデータの類似関係として示している。そのため、布置図の座標軸に値する次元については解釈を行わない。

表 4-1-1a 心の疲労度・心の健康度に対する社会的要因に着目した重回帰分析の結果

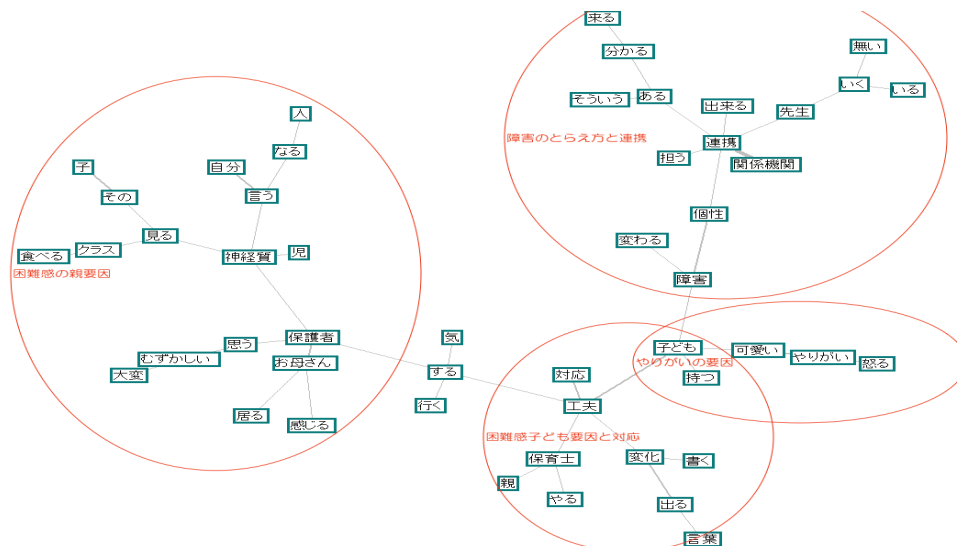
(ステップワイズ法 * p < 0.05 ** p < 0.01)

独立変数 従属変数	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済み R ²
	経験年数	職位	人間関係の良好度の低下	仕事の量的負担	仕事の質的負担	家庭の安寧度の低下	未婚	ソーシャルサポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
心の疲労度			-253**			-240**	-269*	.313**				.363
心の疲労度 下位尺度	精神的コントロール感					-263**		.346**				.223
	身体的健康感		-321**			-281**						.176
	社会的つながりの不足	.451**						.236**				.242
	人生への失望感		-180**			-224**	-241**	.331**				.214
心の健康度	.192*					-200*		.369**				.219
心の健康度 下位尺度	満足感					-260**		.312**				.215
	達成感					-237**				.182*		.115
	自信					-231**		.305**		.198*		.208
	至福感	.357**						.361**				.178
	近親者の支え						.249**					.066
	社会的な支え							.295**				.091
	家族との関係性											.494

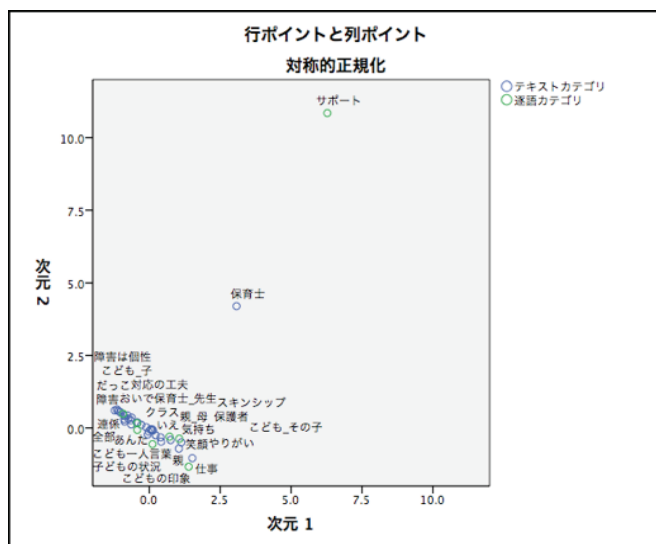
しかし、同一園内のサポートにも限界があり、外部のサポートが必要となる。外部のソーシャルサポートの重要性は、保育困難状況の子ども要因でも示された。保育困難状況の子ども要因は、発達障害児の行動特性に酷似する内容であった。そのため、関連機関への連携は必須となる。近年小中学校の特別支援教育体制の整備により、小中学校においては校内委員会や特別支援教育コ

ーディネーターの設置が90%を越えている反面、保育所や幼稚園では施設内委員会や特別支援コーディネーターの設置率は50%台と支援体制の遅れが指摘されている（文科省,2014）。

ソーシャルサポートのひとつとして、保育困難状況に起因する対象児の関連機関として、特別支援コーディネーター等の巡回相談や小学校の校内委員会との連携など、地域ぐるみのつながりが望まれる。



再掲図 2-2-8 保育困難感の要因マップ



再掲図 2-2-5 逐語録カテゴリとテキストマイニングから導き出したカテゴリの布置図

(2) メンタルヘルスと家庭要因の関連性の検討

心の疲労度・心の健康度に対する各要因の重回帰の結果(表 4-1-1b)において、ソーシャルサポートの次に保育士のメンタルヘルスの要因として関連性が多く示されたのは、家庭要因である「家庭の安寧度の低下」であった。「家庭の安寧度の低下」は、メンタルヘルスに対してすべて負の要因となっていた。「家庭の安寧度の低下」は、心の疲労度及び心の健康度両方に関連性を示し、表 4-1-1b の家庭要因の縦軸をみると、SUBI の全 13 項目(下位尺度含む)のうち、10 項目が関連していた。つまり、家庭要因を整えるとメンタルヘルスの下位尺度 10 項目が改善する可能性がある。

次に、「家庭の安寧度」に関連している心の疲労度・健康度の下位尺度の内容を検討する。「家庭の安寧度」は心の疲労度の下位尺度である「身体面の健康感(原因のはっきりしない身体症状)」、「精神的なコントロール感(心の安定のコントロール感)」にも関連していた。一方、心の健康度の下位尺度である「満足感(人生が順調に進んでいるという感覚)」「達成感(自分が期待したとおりの成果)」「自信(適切に対処する力)」の向上に繋がり、「人生への失望感(人生全体に対する否定的な感情)」の減少へも影響を及ぼしていた。また、未婚者において心の疲労度の下位尺度である「人生の失望感」と「家族との関連性」が負の関係にあった。

これらは、既婚で家庭をもち、家族関係が安定していれば、身体及び心が安定し、満足と自信を得ることで、人生への希望につながる事を示唆し、家庭で近親者のサポートがあるとメンタルヘルスが向上することを意味する。元来、家庭には家族を癒やすという働き・機能(重田,2012b)があり、家庭の人間関係の中に自分の居場所があり、無条件で自分を受け入れてもらえる安心の場の提供だと考えられる。しかし、家庭の癒し機能のためには、仕事をしながらも家族が生活時間を共有できる保証、つまりワークライフバランスの重要性が示唆された。これらより、保育士の生活時間の確保のため、時間外労働時間の短縮が必要だと推察された。

表 4-1-1b 心の疲労度・心の健康度に対する家庭要因に着目した重回帰分析の結果

(ステップワイズ法 * p<0.05 ** p<0.01)

独立変数 従属変数	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済み R ²
	経験年数	職位	人間関係 の良好度 の低下	仕事の 量的負担	仕事の 質的負担	家庭の安寧 度の低下	未婚	ソーシャルサ ポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
心の疲労度			-0.253**			-0.240**	-0.269*	.313**				.363
心の疲労度 下位尺度	精神的 コントロール感					-0.263**		.346**				.223
	身体的健康感		-0.321**			-0.281**						.176
	社会的つながり の不足	.451**						.236**				.242
	人生への失望感		-0.180**			-0.224**	-0.241**	.331**				.214
心の健康度	.192*					-0.200*		.369**				.219
心の健康度 下位尺度	満足感					-0.260**		.312**				.215
	達成感					-0.237**				.182*		.115
	自信					-0.231**		.305**		.198*		.208
	至福感	.357**						.361**				.178
	近親者の支え						.249**					.066
	社会的な支え							.295**				.091
	家族との関係性						-0.586**					.494

(3) メンタルヘルスと職場要因の関連性の検討

心の疲労度・心の健康度に対する各要因の重回帰の結果(表 4-1-1c)において、職場要因で唯一関連性が示されたのが、職場の人間関係の良好度であった。職場の人間関係は、「身体的な不健康感」については「人生への失望感」も負の関連性を示していた。保育士のメンタルヘルスの心の疲労度が不良な要因は、家庭及び職場の人間関係が大きく影響していた。反面、第 1 章や第 2 章で危惧された仕事の量的負担及び質的な負担は、関連性を示さなかった。

それでは、何故第 2 章の保育困難感のインタビューで、保育の質的な困難感が浮き彫りにされたのか。その要因は、2 つ考えられる。一つは、保育の業務上の困難感に的を絞ってインタビューをしたことで、内容が子ども及び親の困難感の要因に焦点化されたと推察される。保育士は、インタビューガイドに沿って現在の保育実践と子どもの対応で困難感を感じる場面を示した。その際、保育士の勤務要因や仕事上の人間関係は表面化しなかったと考えた。

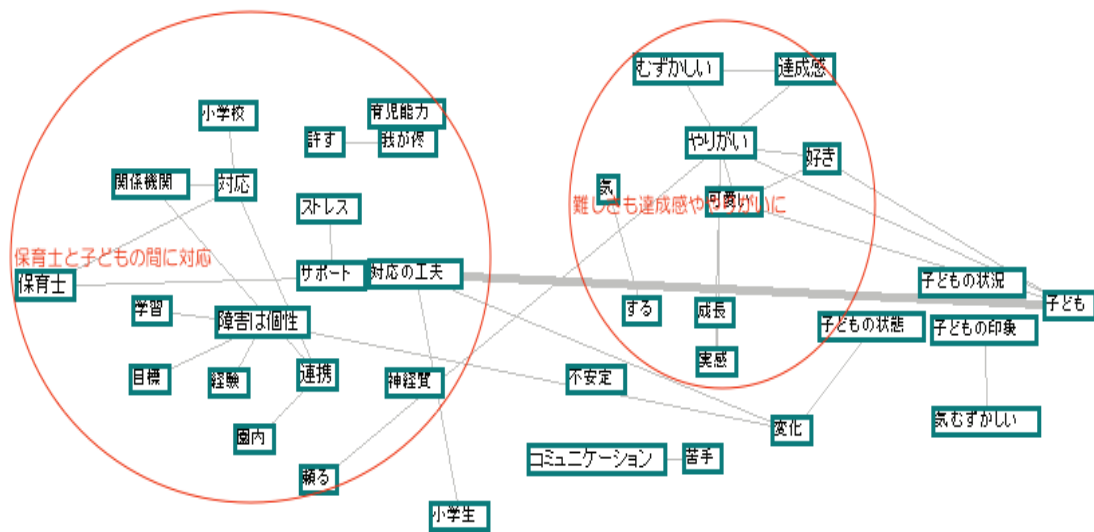
もう一つは、保育士のやりがいの存在である。第 2 章第 2 節の保育士の子どもの要因マップ(再掲図 2-2-9)を示す。これによると、「むずかしい」が「達成感」と「やりがい」と結びれて

おり、難しい状況でもその状況を乗り越えることで達成感ややりがいに関連ことを示している。また、成長-実感-可愛いが「やりがい」に結ばれていた。これは、成長を実感することが子どもをかわいいと感じ「やりがい」に関連することを意味する。子どもは、絶えず成長をする存在である。子どもの成長を実感することがやりがいとなる保育士は、やりがいを感じやすい職業ともとれる。加えて子どもの難しい状況でも乗り越えると達成感に繋がり、やりがいを感じる。やりがいが困難感を薄めている可能性があるかと推察した。

表 4-1-1c 心の疲労度・心の健康度に対する職場要因に着目した重回帰分析の結果

(ステップワイズ法 * p<0.05 ** p<0.01)

独立変数 従属変数	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済み R ²
	経年数	職位	人間関係 の良好度 の低下	仕事の 量的負担	仕事の 質的負担	家庭の安寧 度の低下	未婚	ソーシャルサ ポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
心の疲労度			-253**			-240**	-269*	.313**				.363
心の疲労度 下位尺度												
	精神的 コントロール感											.223
	身体的健康感											.176
	社会的つながり の不足	.451**										.242
人生への失望感												.214
心の健康度	.192*											.219
心の健康度 下位尺度												
	満足感											.215
	達成感										.182*	.115
	自信										.198*	.208
	至福感	.357**										.178
	近親者の支え										.249**	.066
	社会的な支え										.295**	.091
家族との関係性												.494



再掲図 2-2-9 保育士と子どもの要因マップ

(4) メンタルヘルスと障害認識および基本的属性の関連性の検討

第3章の保育士の障害認識と子どもの状況の結果から、メンタルヘルスの陰性感情に、受け持つ子どもの障害の有無・対象児に起因する負担の程度・経験年数・障害の認識において、すべて有意差をみとめなかった。このことは、保育士は受け持つ子どもの状況に左右されず、経験が浅くても環境調整的な障害認識が強いことを示す。

心の疲労度・健康度に対する各要因の重回帰の結果において、障害認識で唯一関連性を示したのは「環境調整的障害認識」であった(表 4-1-1d)。環境調整的障害認識は、心の健康度の下位尺度である「達成感(期待や目的)」と「自信(様々な状況に対応)」に関連していた。加えて、表 4-1-1d の「達成感」及び「自信」を横軸にたどると、両者とも「経験年数」は関連していない。これらのことは、保育士は「経験年数」にかかわらず環境調整的な認識をもち、どんな子どもにも対応の工夫で対処し、その成果は「達成感」や「自信」に関連していることを示した。保育士は新人であっても、障害を個性ととらえ、対応の工夫で子どもの行動が変化し、成長し集団適応できることを、実践的に学び活かしていた。以上は、保育士と子どもの要因マップ(再掲図 2-2-9)の関連性でも示された。

次に、メンタルヘルスと経験年数の関連性を検討したい。表 4-1-1d 重回帰の結果において「経験年数」を縦軸にみていくと「社会的つながり不足」「至福感」と正に関連していた。このことは、保育経験を積むことで保育所を中心にした「社会的なつながり」が増え、「至福感」につながることを意味する。

表 4-1-1d 心の疲労度・心の健康度に対する障害認識・基本的属性に着目した重回帰分析の結果

(ステップワイズ法 * p<0.05 ** p<0.01)

独立変数 従属変数	基本的属性		職場要因			家庭要因		社会要因	障害認識			調整済み R ²
	経験年数	職位	人間関係 の良好度 の低下	仕事の 量的負担	仕事の 質的負担	家庭の安寧 度の低下	未婚	ソーシャルサ ポートの充実	知識教育	環境調整	診断治療	
心の疲労度			-253**			-240**	-269*	.313**				.363
心の疲労度 下位尺度	精神的 コントロール感					-263**		.346**				.223
	身体的健康感					-281**						.176
	社会的つながり の不足	.451**						.236**				.242
	人生への失望感							.331**				.214
心の健康度	.192*					-200*		.369**				.219
心の健康度 下位尺度	満足感					-260**		.312**				.215
	達成感					-237**				.182*		.115
	自信					-231**		.305**		.198*		.208
	至福感	.357**						.361**				.178
	近親者の支え									.249**		.066
	社会的な支え								.295**			.091
	家族との関係性											.494

また、表 4-1-1d の心の疲労度の下位尺度である「社会的つながり不足」の横軸において、「経験年数」の方が「ソーシャルサポートの充実」より重相関係数 (β) が高いことは、サポートネットワークを経験から拡大していることが推察された。

しかし、「経験年数」が所属感を中心とした「至福感」とは関連したものの、「達成感（期待や目的）」や「自信（様々な状況に対応）」と関連を示さない傾向は、第 3 章の日本語版 MBI の三要素「個人的達成感の低下」の要注意群が 29.8% と不良であったことも一致する。経験的な保育スキルだけでは対応できず、達成感が得られにくい状況であることが、この結果でも示された。

池田（2012）によると「個人的な達成感」や「至福感」及び「自信」を持ち続けるためには、保育者としての誇りという認識が媒介変数としてポジティブな効果を示している。よって、保育のプロとしての自負や成長希求を支持するためには、保育研修の定期開催などスキルを向上する機会が必要となる。

第2項 保育士の心の疲労と心の健康

(1) 心の疲労と心の健康の共存への検討

これまでの検討から、保育士には心の疲労度が不良な状況（以下、心の疲労と示す）と、心の健康度が良好な状況（以下、心の健康と示す）が共存していた。この理由について考察したい。今回メンタルヘルスの指標とした採用した SUBI は、世界保健機関（WHO）が開発した心の健康自己評価質問用紙である。心の健康度（陽性感情）・心の疲労度（陰性感情）の両方を測定する指標であり、11 下位尺度から心の健康度、心の疲労度を評価する。様々な研究で実証されてきたが、心の健康度と疲労度は逆相関になるものではなく、それぞれの感情が独立して動くと考えた尺度である。

本調査において、SUBI の心の疲労度平均得点は 47.1 点であり、上村（2012）の調査得点 50.8 点や SUBI の一般女性平均 51.2 点に比して心の疲労度は不良になっている（SUBI は心の疲労度・健康度共に点数が高いほど心の状態が良いことを示す）。保育士の心の疲労度得点が 43 点未満の要注意群の割合は 25.0%であり、上村（2012）の調査の要注意群の割合 14.6%や一般女性の要注意群の割合 4.37%に比し、先行研究の約 1.5 倍一般女性の約 5 倍と大幅に増加していた。

一方、心の健康度の平均得点 38.6 点で、要注意群の割合は 11.7%であった。上村（2012）の調査の平均得点 39.0 点とほぼ同点数で有り、要注意群の割合は上村の 12.2%に比して少ない。また、SUBI に示された一般女性の心の健康度平均得点 34.7 点に比し高く、要注意群の割合 13.3%に比し少ないことから、今回の保育士は心の健康度が高いことを示している。上村の結果も加味すると保育士の心の健康度は一般女性より高いと考えられる。以上より、保育士の一般的傾向として、心が疲労している状況と心は健康である状況が共存していると判断された。

それでは、保育士がなぜ心の健康と心の疲労が共存するのであろうか。本調査の心の疲労度及び健康度の要注意群と良好群のクロス集計を表 4-1-2 に示す。心の疲労度の要注意群 25%（30 名）のうち、心の健康度も要注意群であったのは 6.7%（8 名）にとどまった。図 4-1-4 に心の疲労度と心の健康度の散布図を示す。散布図には縦軸及び横軸にそれぞれカットオフライン及び回帰直線を示した。心の疲労度は、疲労度が少ないほど得点が高いため、心の健康度とは正の相関（ $r = .477$ ）の相関を示している。加えて、保育士は心の健康度及び疲労度のクロス集計（表 4-1-2）による要注意者の重複が 6.7%であることは、それぞれの感情が独立していると推察された。大野（1996）は、陰性感情が若干強く感じられるストレス状況であっても、陽性感情が高ければ充実した日常生活を送れる可能性を示した。また、SUBI の解説によると陰性感情が強い場合には陽性感情が弱くなるが、陰性感情が強くない場合には陽性感情が陰性感情は連

動せず独立すると述べている。

以上より、保育士は心の疲労と心の健康は独立しており、心の疲労はあるものの、反面心は健康であった。そのことは、保育士は子どもの成長にやりがいを感じる心の健康の高さが職場家庭の人間関係に起因する心の疲労を中和すること示唆している。

表4-1-2 心の疲労度と心の健康度の要注意群と良好群のクロス集計

		心の健康度2群		合計
		要注意群	良好群	
心の疲労度 2群	要注意群	8(6.7%)	22(18.3%)	30(25.0%)
	良好群	6(5.0%)	84(70.0%)	90(75.0%)
合計		14(11.7%)	106(88.3%)	120(100%)

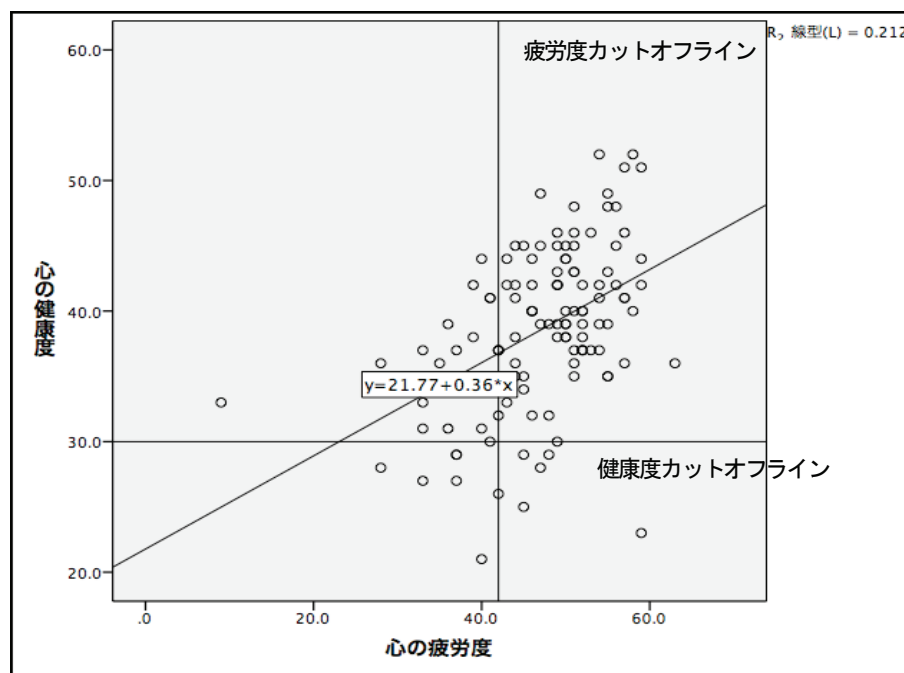


図4-1-4 心の疲労度と心の健康度の散布図

(2) 陽性感情と陰性感情からとらえた保育士のメンタルヘルス

本研究の仮説は、社会情勢の変化から保育業務の量的・質的負担の増加及び、保育士のストレスが拡大する。それらのストレスの要因として、職場要因だけでなく、家庭要因及び社会要因や、保育業務の困難感ややりがいを想定した。それら保育士のストレス要因と、保育士の陽性・陰性感情との関連性の検証を目的とした。

この仮説に今回の結果を反映したものを図4-2-1に示す。図4-2-1で、保育士のメンタルヘルスに関連する要因を陽性感情はピンクで陰性感情は青で示した。どの要因においても、陽性・陰性感情との関連がみられた。このことは、陽性・陰性両感情からメンタルヘルスの検討が必要であることを示す。

図4-2-1で、要因の関連性を各感情からみていく。職場要因では陽性感情に「やりがい」および「保育困難でも対応可能」が関連し、陰性感情として「職場の人間関係」及び、「発達障害の行動特性の子ども」の養護が関連した。保育士はやりがいを子どもの成長の実感及び、保育の独自性から感じていた。保育の対象となる乳幼児期の子どもは絶えず成長する存在であり、そのため保育士はやりがいを見だしやすい職種だととらえられた。また、成長が変化を生むことを信じる状況は、子どもに対する評価の柔軟性につながる。それは、対象児に固定した評価与えず支援的に対応し、保育の工夫の成果は保育士の達成感に繋がっていた。それゆえ、保育困難な状況でも対応でき、職場の人間関係が良好で、保育のやりがいを感じていれば心は健康に傾く。

しかし、保育士のメンタルヘルスに大きく関わったのは、子どもの養護に関連した職場要因ではなく、社会要因と家庭要因であった。近親者及び家族の支えや保育園内外の社会的なサポートがないと保育士のメンタルヘルスの向上は難しいことが示された。つまり、保育士のメンタルヘルスは、子どもの養護とは関係のない、勤務する保育所や家庭の人間関係や社会的サポートの関連が大きいことが示された。その結果、保育士の心が健康でありながら、反面心が疲労しているアンビバレントな状況を呈していた。

以上をふまえて保育士のメンタルヘルスの向上の方向性を考えたい。まず、要注意群に含まれる保育士が25%に及んだ心の疲労度の改善から検討する。心の疲労に関連したのは家庭要因と職場の人間関係であった。職場の人間関係と家庭の安定のため、保育という仕事を持ちながら家族との共有時間を確保できる「ワークライフバランス」の必要性が示された。保育士の「ワークライフバランス」を保つためには、時間外労働の短縮等の労働条件の改善が必要となる。そのために、保育士の量及び質の確保が欠かせない。

また、心の疲労度において「社会的なサポートの欠如」も重要視された。質的調査において保

育困難な状況の子ども要因は発達障害の行動特性の子どもに起因しており、中堅の保育士が多い今回の調査においても、それらの対応に苦慮していた。その現状から、「社会的なサポート」として保育困難状況及び対象児に対する施設内委員会設置などの自助だけでなく、定期的な特別支援コーディネーターの巡回や助言等のサポートの充実、専門家による「対象児への対応」の研修が切に望まれる。

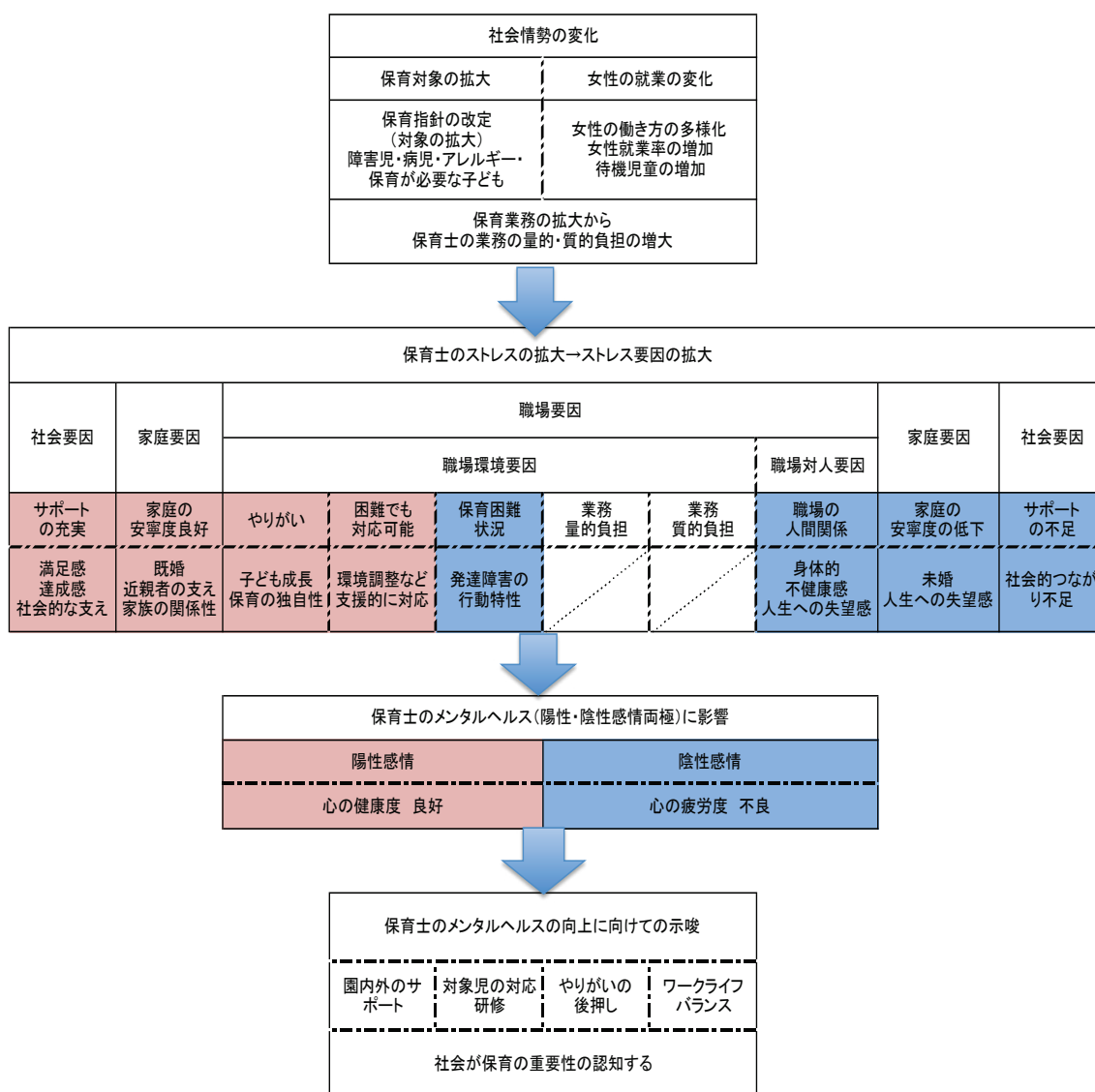


図4-2-1 結果を付記した仮説図

次に、心の健康度の向上について検討する。心の健康度は一般の女性に比して良好であり、それらは保育のやりがいや家庭の近親者の支え、仕事に対する満足感に裏付けられていた。反面、第3章の陰性感情と日本語版MBIによるバーンアウト指標では、「個人的達成感」の注意すべき状態にある保育士は29.8%に及んでいた。この状況は、保育士が子どもの成長や保育の独自性に「やりがい」を感じつつも、仕事の自己評価である「個人的達成感」までに及んでいない可能性

を示唆した。保育のやりがいには、保育のプロとしての自負や成長希求を支持が必要であり、保育研修の定期開催などの保育スキルを向上する機会が望まれる。それら、保育士の「やりがい」の後押しにより「個人的な達成感」、引いては心の健康度の向上につながると考えられた。

第5章 結語

本研究は、保育士のメンタルヘルスに対する陽性・陰性感情からの関連について明らかにすることを目的とした。

結果として第一に、保育士の業務上の困難感とその困難感への対応及び保育士のやりがいの質的調査から、業務上の困難感には、子ども要因と親要因が示された。子ども要因には「発達障害児に類似する行動特性」が、親要因では「子どもの行動特性を気にしない」「親の行動特性に問題がある」「育児能力の未熟さ」「自分中心の親」等があった。こうした困難感を抱えながらも、保育士は支援的な関わりで対応していた。さらに、「子どもが好き」「仕事が好きである」「親と喜びを分かち合える」「保育に独創性が活かせる」等、保育士としてのやりがいを感じていた。「子どもが好き」「仕事が好きである」ことを主に置きつつ、「親と喜びを分かち合え」、「保育に独創性が活かせる」等を加え、保育士は保育困難状況に支援的に関わっていた。

第二に、保育士のメンタルヘルスに対する陽性・陰性感情からの関連として、基本的属性・職場要因・家庭要因・社会要因と障害に対する認識及び対応に関する実態調査を行った。その結果、陽性・陰性感情共に「ソーシャルサポートの充実」と「家庭の安寧度」が重要な要因として示された。また、職場要因として業務上の負担である「仕事の量的負担」と「仕事の質的負担」の関連は示されず、唯一「職場の人間関係の良好度」が陰性感情に関連していた。これら保育士のメンタルヘルス不良の主要因は、子どもの養護に対するストレスはではなく、保育士自身の家庭要因や職場の人間関係、職場内外の社会的サポートであることが示された。また、家庭要因やソーシャルサポートが両感情に関連していることから、家庭・社会からのサポートが整うと保育士のメンタルヘルスは一層向上することが示唆された。

第三に、保育士は発達障害に類似する行動特性を持つ子ども（対象児）に保育困難感を感じていた。しかし、対象児が受け持ちクラスに存在することや発達障害と認識することとは、保育士のメンタルヘルスに関係は示されなかった。つまり、どのような子どもを担当していても、保育士のメンタルヘルスに影響がないことが明らかとなった。このことは小野ら（2010）や吉兼ら（2010）が指摘することと同様であった。

第四に、保育士は心の健康度は一般女性より良好であったが、心の疲労度は一般女性よりも不良な状況、つまり保育士は心が健康度は高いものの、反面心の疲労度も高い状態であった。これは、一見矛盾にうつるが、保育士は心の健康と心の疲労が独立しており、子どもの成長にやりがいを感じるとした心の健康の高さが職場家庭の人間関係に起因する心の疲労を薄める等、調整していると捉えられた。

本研究の限界として職場要因では、職場の人間関係の良好度の関連性は示されたが、保育本来の業務である仕事の量的負担や質的負担の関連性は示されなかった。仕事の量的負担を保育士自身の自覚だけでなく、保育士の実態として時間外勤務や超過勤務、加えて自宅での仕事など、保育士自身が無意識に行っている仕事内容等を調査できていない。また、仕事の質的負担において、保育困難状況の起因となる対象児への対応方法等、保育士自身が自己研鑽している内容等についても調査していない。今後はこれらの要因も加え、保育士自身でさえ自覚していない、もしくは問題視していない職場要因との関連性についても明らかにしていくことが重要である。

また、家庭要因及び社会要因との関連性が示されたが、家庭要因は家族構成・子どもの年齢・就労形態や主たる家庭サポート者とその程度を、社会要因はサポートの範囲（園内・園外の関連機関）と内容（子どもへの関わり方・保育方針・親への関わり方）など、項目の絞り込みが不十分であった。より詳細な要因の精査が今後の課題となった。

今回、保育士の業務上の困難感の質的調査において、発達障害児に類似する行動特性のある子ども（対象児）に困難感を感じていた。しかし、保育士のメンタルヘルスの要因検討においては、これら対象児の存在は関連していなかった。今回調査した保育士は保育困難な状況にあったにもかかわらず、なぜメンタルヘルスへの悪影響を回避できたのか、あるいは恒常的に保育士のメンタルヘルスを良質に維持するためにどのような保育への対応の工夫が効果的であるかについての検討は今後の課題となった。

また、本研究は保育士のメンタルヘルスに対して、子どもと保育士の業務及び家庭要因・社会的サポートを中心に関連性を明らかにしてきた。しかし、養護する子どもの親についても保育者のストレス要因となり得る。第2章の保育困難状況の親要因でもそれらは示された。今回は、親要因の語り子ども要因に比し少ないため検討から外したが、これについても今後詳細な検討が必要である。

おわりに

我が国の少子高齢化は急速であり、国内外からこの傾向は危惧されている。子どもを育てるには、経済的・環境的状况、乳幼児の保育する場所の減少等厳しい現実がある。仮に保育所に入所できたとしても、そこで働く保育士の労働要因（時間外保育や病児保育等）は厳しく、保育士の担う役割は保護者の育児支援・地域の育児拠点・障害児保育など肥大し、保育士の疲弊は一層激化することが予測される。こうした状況にありながらも、保育の質が維持されているのは、第一線で働く保育士の熱意と努力と子どもへの愛情とわかった。

しかし、保育士の熱意と努力にも限界がある。保育士の疲弊は、子どもの養護にも影響する。故に、社会の変化を保育の役割の拡大で埋め、保育士自身の当事者努力にあまんじるわけにはいかないのではないだろうか。社会の風潮は、職種や性別を問わずワークライフ・バランス等、働き方改革が強調されるようになった。この追い風を受けて、保育現場の働き方への改革を進める必要がある。

保育には、子どもの健やかな発育を支え、社会性の確立を助けるなど、次世代における人材養成の礎を担う重要な機能を有する。よって、本研究から明らかとなった子どもに対する直接的な保育活動に対する陽性感情は、保育士のメンタルヘルスの財産として守る必要がある。陽性感情の元となるやりがい、つまり保育のプロとしての自負や成長希求の保証が必須である。

今後一層、保育士のメンタルヘルスに関するバランスが図られ、よりよい方向への保育士のメンタルヘルスの向上が図られることを願い、残された課題をしっかりと受けとめつつ本論を閉じる。

文献

- 上村眞生・七木田敦士（2008）保育士のサポート源に関する実証的研究. 小児保健研究. 第 67 巻第 6 号, 854-860
- 上村眞生(2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究-保育士の経験年数に着目して-, 保育学研究, 第 50 巻 1 号, 53-60
- 石川洋子・井上清子（2010）保育士のストレスに関する研究-職場のストレスとその解消-. 立教大学教育学部紀要, 第 44 巻, 113-120
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵(2007). 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究, 小児保健研究, 第 66 巻, 815-820
- 岡田節子・齋藤友介・中嶋和夫（2001）保育士の職場要因ストレスの認知尺度. 保育学研究. 第 39 巻第 2 号, 209-215
- 大野裕・吉村公雄・山内啓太・百瀬和雄他（1996）, 心理的健康感と心理的不健康感の関連性について, ストレス科学, 第 10 巻 3 号 273-278
- 重田博正（2012a）保育士のメンタルヘルス. かもがわ出版. 27-54
- 重田博正（2012b）保育士のメンタルヘルス. かもがわ出版. 97-112
- 文部科学省（2014）, 特別支援体制整備状況調査.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1356211.htm (2016 年 10 月 9 日)
- 吉兼伸子・林隆. (2010), 特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について, 山口県立大学学術情報大学院論集, 3, pp81-88
- 河内しのぶ・福澤雪子・濱田裕子. (2006), 統合保育が保育士の与える影響, 産業医科大学雑誌, 28 (3), pp337-348
- 野澤祥子. (2016), 今日本の保育の真実を探る, 東京大学
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/about/symposiumseminar/sympo_20160917/ (2016. 10. 15 参照)
- 木曾陽子. (2013), 発達障害傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係, 保育学研究, 51 (2), pp51-62

謝辞

本研究の過程において、終始懇切丁寧なるご指導とご助言をいただきました、山口県立大学大学院健康福祉学研究科健康福祉学専攻教授田中マキ子先生に心より感謝申し上げます。また、数々のご助言とご指導をいただきました同専攻教授長坂祐二先生、同専攻准教授上白木悦子先生、佐々木直美先生に深謝申し上げます。

そして、インタビューにご協力いただきました保育士の先生方に、この場を借りて深謝申し上げます。

文献リスト

- 赤田太郎. (2010), 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性, 心理学研究, pp158-166
- 池田幸代・大川一郎. (2012), 保育士・幼稚園教諭のストレッサーが職務に対する精神状態に及ぼす影響-保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として, 発達心理学研究, 23 (1), pp23-35
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵(2007). 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究, 小児保健研究, 第66巻, 815-820
- 石川洋子・井上清子. (2010), 保育士のストレスに関する研究-職場のストレスとその解消, 文教大学教育学部紀要, 44, pp113-120
- 磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古. (2008), 保育所で働く保育士のモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因, 小児保健研究, 67 (2), pp367-374
- 上村眞生・七木田敦. (2008), 保育士のサポート源構造に関する実証的研究, 小児保健研究, pp854-860
- 上村眞生. (2011), 保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究-保育士の経験: 年数による検討-, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 60, pp249-257
- 上村眞生(2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究-保育士の経験年数に着目して-, 保育学研究, 50 (1), pp53-60
- 大鐘啓伸. (2015), 保育士のメンタルヘルス支援プログラムの試作-EPA活動に関連する心理学的測定から-, 名古屋女子大学紀要, 61, pp165-173
- 大野裕・吉村公雄・山内啓太・百瀬和雄他 (1996), 心理的健康感と心理的不健康感の関連性について, ストレス科学, 10 (3), pp 273-278
- 岡田節子・齋藤友介・中嶋和夫 (2001) 保育士の職場環境ストレッサーの認知尺度. 保育学研究. 39 (2), pp209-215
- 垣内国光. (2007), 保育者の現在-専門性と職場環境, 東社協保育士会, ミネルバ書房
- 加藤由美・安藤美華代. (2015), 保育士のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望, 岡山大学院教育学部研究科集録, 159, pp1-10
- 加藤由美・安藤美華代. (2012), 新任保育士の抱える困難に関する研究の動向と展望, 岡山大学院教育学研究科集録, 151, pp23-32
- 神谷哲司・杉山隆一・戸田有一・村山有一. (2011), 保育所における雇用環境と保育者のストレス反応-雇用形態と非正規職員の比率に着目して-, 日本労働研究, 608, pp103-114

- 木曾陽子. (2013), 発達障害傾向がある子どもと保育士のバーンアウトの関係, 保育学研究, 51 (2), pp51-62
- 金城悟・安見克夫・中田英夫. (2011), 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造—M-GTAによる分析の試み—, 東京淑徳短期大学紀要, 44, pp25-44
- 鯨岡峻. (2002), 「育てられる者」から「育てる者」へ—関係発達の視点から—, 日本放送出版協会
- 河内しのぶ・福澤雪子・濱田裕子. (2006), 統合保育が保育士の与える影響, 産業医科大学雑誌, 28 (3), pp337-348
- 厚生労働省, 平成 27 年度人口統計年間推移,
合計特殊出生率 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei15/dl/14_tfr.pdf
(参照 2016. 10. 10)
- 厚生労働省, (2010) 出生動向基本調査,
<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp> (参照 2016. 10. 10)
- 郷間英世他. (2008), 幼稚園・保育園における「気なる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀要, 113
- 古賀松香. (2011), 1 歳児保育の難しさとは何か, 保育学研究, 49 (3)
- 斉藤愛子他. (2008) 保育所における「気になる子ども」に対する保育上の困難さについての調査研究, 小児保健研究, 68 (6)
- 齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘令子・宮岡等. (2009), 保育従事者のバーンアウトとストレスコーピングについて, 3, pp23-29
- 重田博正. (2010), 保育職場のストレス—いきいきした保育をしたい—, かもがわ出版
- 重田博正. (2007), 保育士のメンタルヘルス—いきいきした保育をしたい—, かもがわ出版
- 嶋崎博嗣. (1995), 保育者の精神健康管理に関する研究—属性・職務上の背景からの検討—, 筑波大学体育科学系紀要, 18, pp149-158
- 須永進他. (2010), 保護者の保育ニーズとその対応に関する研究 I, 医療福祉研究, 6
- 田尾雅夫. (1996) .バーンアウトの理論と実際. 誠信書
- 田中紀衣・村松公美子・片桐敦子・村松芳幸・宮岡等. (2012), 保育従事者におけるバーンアウトとコーピングに関する検討, 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 6, pp41-45
- 田辺昌吾・松山由美子・古市久子・遠藤晶・江原千恵・内藤真希. (2014), 保育者は経験年数を重ねることでどのように変化するのか—身体表現の指導・援助の悩みに注目して—, 四天王寺大学紀要, 58, pp231-241

- 手島幸子. (2010), 保育者における保護者からのストレスとソーシャルサポート, 心理相談センター年報, 6, pp33-41
- 内閣府. (2015), 労働力調査,
<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf>
(参照 2016. 10. 10)
- 内閣府. (2011),
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/gdp.html> (参照 2016. 10. 10)
- 中根真. (2014), 保育所保育士のワーク・ライフ・バランスの実態と課題-両立の難しさに焦点をあてて-, 保育学研究, 52 (1), pp116-128
- 中村仁志他. (2005), 幼稚園及び保育園における落ち着きのない子どもの困難性と対応について, 小児保健研究, 64 (1)
- 西坂小百合. (2002), 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育効力感の影響, 教育心理学研究, 50, pp283-290
- 西野美佐子・藤原利. (2006), 保育士が直面する問題と職場研修に関する研究, 東北福祉大学研究紀要, 30, pp11-26
- 野澤祥子. (2016), 今日本の保育の真実を探る, 東京大学
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/about/symposiumseminar/sympo_20160917/ (2016. 10. 15 参照)
- 秦野悦子・青木敦美. (2005), 保育士の精神的健康におけるストレス要因と効力感, 保育と保健, 12 (1), pp43-47
- 林富公子. (2013), 保育士自身を対象とした研究に関する動向, 園田学園女子大学論文集, 47, pp209-221
- 林隆. (2014). 厚生労働省平成 24 年度 障害者総合福祉推進事業「医療や福祉分野の発達障害支援者の人材育成体制の調査」. pp111-116
- 原田和宏・齋藤圭介・有岡道博・岡田節子・香川幸次郎・中嶋和男, (2002), 福祉関連職における Maslach Burnout Inventory の因子構造の比較, 社会福祉学研究, 42 (2), pp43-53
- 保育所保育指針. (2008), 厚生労働省告示. 厚生労働省 2008. 03. 26
<http://www.nozomi.ac.jp/hoikuen/hoikuisin2008.pdf> (参照 2016. 10. 10)
- 前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎. (2009), 保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響, 九州保健大学研究紀要, 10, pp17-23

- 前田和子他. (2010) : 保育士による発達障害児の早期発見と早期支援の課題, 沖縄県立大学
紀要, 11
- 水野智美・徳田克己. (2008), 就職後3ヶ月の時点における新任保育者の職場適応, 近畿大学臨
床心理センター紀要, 1, pp75-84
- 美馬正和, (2012) : 保育士は気になる子どもをどう語るのか, 北海道大学大学院教育学研究院
紀要, 115
- 宮下敏恵. (2010), 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討, 上越教育大学紀要,
29, pp177-186
- 民秋言. (2014), 幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育
要領の成立, 萌文書林
- 村田ひろ子. (2015), 家庭生活の満足度は、家事の分担次第-ISSP 国際比較調査
「家庭と男女の役割」から-, 放送研究と課題, pp8-19
- 村田努. (1996), 保育者のストレス状況とその要因, 白梅学園短期大学紀要, 32, pp135-147
- 本吉大介・細野宏美. (2014), 保育者の対人ストレスの認知的評価とソーシャルスキルの関連,
健康心理学研究, 27 (1), pp45-52
- 森田多美子・植村勝彦. (2011), 保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響する要因の検討,
愛知淑徳大学論集, 1, pp67-81
- 文部科学省 (2014), 特別支援体制整備状況調査.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1356211.htm (2016年10月9日)
- 山城真紀子・上地亜矢子・大城一子・嘉数朝子. (2005), 沖縄県の保育者の職業的ストレスと
健康についての研究1-認可保育園と認可外保育園を対象に-琉球大学教育学部教育実践総合
センター紀要, 12, pp79-86
- 吉兼伸子・林隆. (2010), 特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について,
山口県立大学学術情報大学院論集, 3, pp81-88

資料

インタビュー同意書

インタビュー説明書

質問紙

同意書

私()は、山口県立大学大学院 健康福祉学研究科 博士後期課程1年生
吉兼伸子が行う研究「保育士の業務上の負担感とその関連要因の検討～特に子どもの発達特性
の与える影響に着目して～」について、吉兼伸子から本研究の主旨と内容の説明を受け、それらを
理解し、研究に協力することに同意します。

年 月 日

研究協力者署名:

説明者署名:

〒747-0066

山口市桜畠3-2-1

山口県立大学大学院 健康福祉学研究科

博士後期課程1年 吉兼伸子

mail: theta@wine.plala.or.jp

指導教授:山口県立大学大学院 健康福祉学研究科

博士後期課程教授 林 隆

同意説明文書

研究課題 保育士の業務上の負担感とやりがいにつながる関連要因の検討
～特に子どもの発達特性の与える影響に着目して～

研究者: 吉兼伸子

所属 : 山口県立大学 大学院 健康福祉学研究科

この同意説明文書は、研究課題「保育士の業務上の負担感とやりがいにつながる関連要因の検討」について、その趣旨を十分ご理解いただくために作成したものです。この研究に参加・協力していただけるかどうかは、各保育士の自由意思によります。

1 研究の目的および方法

研究責任者: 林 隆 (山口県立大学 大学院 健康福祉学研究科 教授)

共同研究者: 吉兼伸子 (山口県立大学 大学院 健康福祉学研究科 博士後期課程)

研究期間 : 平成 24 年 1 月から 平成 26 年 3 月

(1) 研究の目的

新たな保育指針が示され保育士の業務の多様化が予想されます。保育士が日々の保育業務の中でどのようなことに負担を感じておられるかインタビュー・調査研究を通して実態を明らかにし、それを軽減解消するためにどのような支援や制度が必要であるかを考えたいと思っております。

また、保育士がどのような喜びややりがいを感じておられ、それらに関連する要因を明らかにし、ストレスコーピングについて明らかにしたいと考えております。

(2) 研究方法

研究の趣旨を理解し、参加に同意が得られた経験 5 年以上で、現在 0～5 歳児の担任をしている保育士にインタビューをお願いしたいと考えています。調査は、プレテストとしてインタビューガイドにそった 1 時間程度の半構造化面接法で行います。面接の内容は、対象者の承諾を得た上で録音いたします。得られた結果は逐語録に起こし、負担感ややりがいにつながる関連要因を抽出します。その後抽出された内容に添った質問紙を作成し、無記名の調査研究を行い保育士の業務上の負担感・やりがいにつながる要因の分析をいたします。

研究実施場所

インタビュー 対象者の指定した場所に伺います。

研究対象者および研究対象者数

インタビュー 保育士経験 5 年以上で、現在 0～5 歳児の担任している保育士
6～12 名程度

調査研究 山口県内の公立市立保育所に勤務し、クラス担任をしている保育士

1 インフォームド・コンセント

依頼書を用いて研究内容を説明し、同意された場合は同意書も頂く。

2 対象者に対する倫理的配慮(利害とそれに対する配慮)

質問に対しての回答や、研究の一部の参加を拒否すること、一度研究協力に署名を頂いても、後日協力を取り消すことは可能です。またインタビュー内容についても後日撤回することも可能です。拒否することで不利益を被ることはありません。インタビュー結果を研究以外で使用することはありません。研究として論文にまとめ、関係学会で発表するがその際もプライバシーを守るように配慮いたします。

3 対象者に対する秘密保持

個人情報保護法に則り、頂いたデータは個人が識別できないように変数化しデータとして保存します。得られたデータやインタビュー内容は質的に分析し、調査研究では統計処理を行い、個人が特定されるような形での検討はいたしません。データの管理には細心の注意を払い、データの漏洩、紛失がないように厳重に管理いたします。

4 得られたデータの利用範囲と研究成果の公表

得られた研究データは本研究のみに使用します。研究の成果は、関連学会での発表、学術雑誌への投稿および博士論文作成等によって公表いたします。

5 研究に参加することでの得られる利益と不利益

この不参加による不利益は一切ありません。

6 研究の科学的価値や当該領域・社会に対する不利益

保育士の保育の負担感ややりがいにつながる要因を明らかにすることは、より具体的な保育士支援とストレスコーピングの新しい知見となりうるものであると考えられます。

7 問い合わせ先

研究者 吉兼伸子

E-mail: theta@wine.plala.or.jp

研究責任者 林隆

E-mail: thayashi@n.ypu.ac.jp

アンケートのお願い

保育士の皆様には、多忙な中にお子さん一人ひとりの成長をみすえた保育活動をされていることと推察いたします。保育士の皆様に、①どんな子どもの行動が保育する上で困るか、②保育のサポート ③発達障害についての先生方のイメージについてお聞きし、同時に先生方の心の健康度を知ること、よりよい保育支援に役立てたいと考えております。

つきましては以下のアンケートにご協力いただければ幸いです。お忙しいところ申し訳ありませんがご協力のほどよろしくお願いたします。アンケートは匿名で、個人や保育所を特定・公表することはありません。質問項目の一部(発達障害のイメージ)は、厚生労働省の平成24年度障害者総合福祉推進事業の内容に準じております。

ご提供いただいた情報は、保育士を対象とした研修などをより役立てるとともに、関連学会、論文の発表に用いさせていただきます。その他の目的で使用することはありません。主旨にご賛同と、ご協力いただければ幸いです。

山口県立大学大学院 健康福祉学研究科 博士後期課程2年 吉兼 伸子
山口県立大学大学院 健康福祉学研究科 博士後期課程教授 田中 マキ子
医療法人テレサ会 西川医院 発達診療部 部長 林 隆

1 先生ご自身の事をおたずねします。

1) 性別をお教え下さい。○で囲んでください。	男	・	女	
2) 年齢をお教え下さい。	歳			
3) 保育経験年数をお教え下さい。	年			
4) 現在の職位をお教えください。	管理職	主任 保育士	常勤 保育士	非常勤 保育士
5) ご結婚されていますか。	既婚		未婚	
6) 現在担任をもたれていますか。	いいえ → 次のページの質問にお進み下さい。			
	はい → 以下の質問にお答えください。			
7) 担任をされているクラスはどれに当てはまりますか。 ○で囲んで下さい。	3歳未満・年少・年中・年長			

2 現在担任をされているクラスの中に保育する上で困難感を いる→ 3の項目へお進み下さい。

感じる発達障害の行動特性(発達障害児と似た行動)をもつお子さんがおられ いない→次のページの質問へお進み下さい。

3 現在担任クラスの中に保育する上で困難感を感じる発達障害の行動特性(発達障害児と似た行動)を持つお子さんがおられる方だけ

現在担任されているクラスのお子さんの中、保育する上で最も困難感を感じる発達障害の行動特性を持つお子さんを1名思い浮かべてください。

そのお子さんについて質問をします。

1) そのお子さんの性別をお教え下さい。	男	・	女	
2) そのお子さんは何らかの診断が付いていますか。○で囲んでください。 疑診断でも結構です。複数選択可能です。	診断なし			診断有り
	注意欠陥多動性障害(ADHD)・学習障害(LD)			
	広汎性発達障害(アスペルガー症候群・自閉症)			
	言語遅滞・知的障害・身体障害			
3) そのお子さんを保育するために、加配等の配慮がされていますか。	はい	・	いいえ	

4) そのお子さんの存在は先生にとって精神的な負担である。

良く当てはまる	少し当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない

この質問は、全ての先生方にお答えいただく質問です。保育する上で、困る子どもさんの状態についてお聞きます。

4 子どもさんの困る状態のベスト3を教えてください。困る順に1・2・3を()内にご記入ください。

1) 細かいところまで注意が払えない。	() 例(3)
2) 遊びに集中できない。	()
3) 話しかけられているのに聴いていないように見える。	() 例(1)
4) 指示に従えず、最後までできない。	()
5) 物をよくなくす。	()
6) 忘れっぽい。	()
7) 意味も無く席を離れる。	()
8) じっとしているべき時に走り回る。	()
9) 質問が終わらないうちに答える。	()
10) 順番を待つのが難しい。	()
11) 言葉通りに受け取る。	()
12) 自分だけにしかわからない造語を作る。	()
13) 場面に関係なく声を出す。	()
14) 得意と極端な不得意がありますか。	()
15) 協調性が乏しい。	()
16) 友達の傍にはいるが一人で遊ぶ。	()
17) 仲のよい友達がいない。	()
18) 球技やゲームをするときに仲間と協力ができない。	()
19) こだわりで、簡単な日常の活動ができない。	()
20) 自分なりの独特な日課や手順がある。	() 例(2)
21) 特定のものに執着がある。	()

この質問は、全ての先生方にお答えいただく質問です。保育する上で、困る親御さんの状態についてお聞きます。

5 親御さんの困る状態のベスト3を教えてください。困る順に1・2・3を()内にご記入ください。

1) 親が子どもの行動の特性を気にしない。	() 例(3)
2) 親自身が情緒不安定である。	()
3) 親自身がコミュニケーションが苦手である。	() 例(1)
4) 親自身が乱暴な行動をとる。	()
5) 親の育児方針が特殊である。	()
6) 親が神経質である。	()
7) 親が子どもに無関心である。	() 例(2)
8) 親が子どもを叱ることができない。	()
9) 親の育児方針が特殊である。	()
10) 親の育児能力が低い。	()
11) 親が自己中心的である。	()
12) 親が子どもに、どう接してよいかわからない。	()

この質問は、全ての先生方にお答えいただく質問です。 先生が保育が困難な状況の時になされている行動についてお聞きします。 あてはまるものに○をつけてください		良く当てはまる	少し当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
6	保育活動を試行錯誤する。					
	保育が困難な子どもに段階的に関わる。					
	保育が困難な子どもに個別対応する。					
	クラス単位の行動など、保育の既成概念にとらわれない。					
	保育が困難な子どもを中心とした活動をする。					
	他の子どもへの対応を工夫する。					
	保育が困難な子どもの居場所を作る。					
	保育が困難な子どもを取り巻く子ども同士の関わりを作る。					
	保育士自身が状況に巻き込まれないようにする。					
	スーパーバイザーに相談する。					

この質問は、全ての先生方にお答えいただく質問です。 先生が、日頃感じていることをお聞きします。あてはまるものに○をつけてください		良く当てはまる	少し当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
7	保育の仕事は社会的に重要な仕事である					
	保育の仕事は自分自身の大切な一部である					
	保育の仕事を長く続けたい					
	保育の仕事に意欲を感じる					
	仕事がおもしろい					
	体験や感情を共有できる同僚がいる					
	助言してくれる先輩や同僚に恵まれている					
	職場には意見を言う場や機会が無い					
	上司の考え方ややり方は自分に合っている					
	職場の仕事の方針に自分の意見を反映できない					
	自分の保育に対する考え方と合わない保育方針をとることを要求される。					
	職場の問題についてオープンに話せる。					
	自分と合わない同僚と一緒に働いている。					
	仕事が多くて忙しいことが多い。					
	休憩時間も子どもの世話や記録でゆっくり休めない。					
	人手不足である。					
	子どもの安全などの注意や緊張を必要とする時間が多くなってきた。					
	関わり方が難しい子どもを担当することが多くなった。					
	高度な保育の提供や高度な判断が強く求められるようになってきた。					
	保護者からの無理難題な要求に直面させられることが多くなってきた。					
	家にいても休まらない。					
	自分の趣味が思うようにできない。					
	自分が自由に使える時間が無い。					
	保育の仕事に関する悩み事や迷いごとを聞いたり相談に乗ってくれたりする人がいる。					
	仕事のことで以外で何でも気軽に話せたり、相談に乗ってくれる人がいる。					
	一緒にいると楽しく、安らぎやエネルギーを得られる人がいる。					

8 以下の質問も、全ての先生方にお答えいただく質問です。先生の現在の状態についてお聞きします。5段階でお答えください。	いつも ある	しばしば ある	時々 ある	まれに ある	ない
1) こんな仕事もうやめたいと思うことがある。					
2) われを忘れるほど仕事に熱中することがある。					
3) こまごまと気を配ることが面倒感することがある。					
4) この仕事は私の性分に合っているとすることがある。					
5) 同僚や子どもの顔を見るのも嫌になることがある。					
6) 自分の仕事がつまらなく思えて仕方ないことがある。					
7) 1日の仕事が終わると「やっと終わった」と感じることがある。					
8) 出勤前に、職場に出るのが嫌になって、家にいたいと思うことがある。					
9) 仕事を終えて、今日は気持ちの良い日だったと思うことがある。					
10) 同僚や子どもと何も話したくなくなるがある。					
11) 仕事の結果はどうでもよいと思うことがある。					
12) 仕事のために心にゆとりが無くなったと感じることがある。					
13) 今の仕事に、心から喜びを感じるがある。					
14) 今の仕事は、私にとってあまり意味がないと思うことがある。					
15) 仕事楽しくて知らないうちに時間が過ぎることがある。					
16) 体も気持ちも疲れ果てたと思うことがある。					
17) われながら、仕事をうまくやり終えたと思うことがある。					

9 この質問は、全ての先生方にお答えいただく質問です。発達障害に対するイメージについてお聞きします。

発達障害(注意欠陥多動性障害・広汎性発達障害・学習障害など)に対するイメージをお聞きします。先生のお考えに近い回答に○をつけてください。	そう思う	どちらかといえそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
1. 私は発達障害児とうまく関わっている。				
2. 発達障害児と関わるのは楽しく、やりがいがある。				
3. 発達障害児の将来に希望を感じる。				
4. 発達障害児と関わるのは、正直、あまり自信がない。				
5. 発達障害児と関わるのは精神的に負担だ。				
6. 発達障害の原因や仕組みについて理論的に理解したい。				
7. 理論よりも発達障害支援の現場で役に立つ具体的な技術が知りたい。				
8. 私は発達障害について知識がある。				
9. 私は発達障害について十分な教育を受けていない。				
10. 発達障害児に好かれる方法が知りたい。				
11. 発達障害は脳の機能的な障害で、治ることはない。				
12. 環境の変化や成長によって、発達障害の問題が解消することがある。				
13. 環境の変化や成長によって、発達障害の診断が変わることがある。				
14. 成長しても、発達障害の特性は変わらない。				
15. 周囲が視点を変えれば、発達障害は大きな問題にならないこともある。				
16. 発達障害の診断は、支援を行ううえで欠かせない。				
17. 発達障害の診断名に対応した特定の関わりをしなければならない。				
18. 発達障害の診断名にとらわれず、本人に合った関わりをする方がよい。				
19. 治療・療育を通して障害の克服を目指すことが、発達障害支援の目標だ。				

何か、ご意見や ご感想があればご自由にお書き下さい。 お疲れのところ、大変ありがとうございました